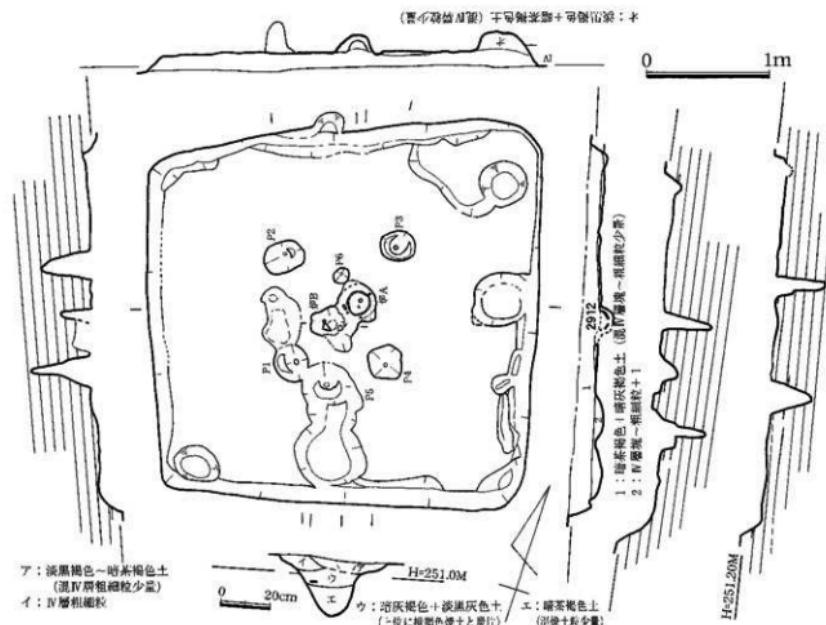


5.06~5.48mの、南壁が突出するホームベース型を呈する。覆土は10~32cm遺存し、土層的には、10~25cmの削失が推定される。主柱穴は、直径20~40cm・深さ24~34cmの4本（P 1~4）である。炉は中心には無く、P 2の西に掘り込み炉A（深さ15cm、2次）とB（1次）がある。北西部には内区があるような図になっているが、IV区（南半）では明瞭ではないことから、あえて表現しなくても良い程度の段差である。貼り床は厚く、2枚（2次期）あるが、2b層上面は綺まりが弱く境も不明瞭な部分がある。

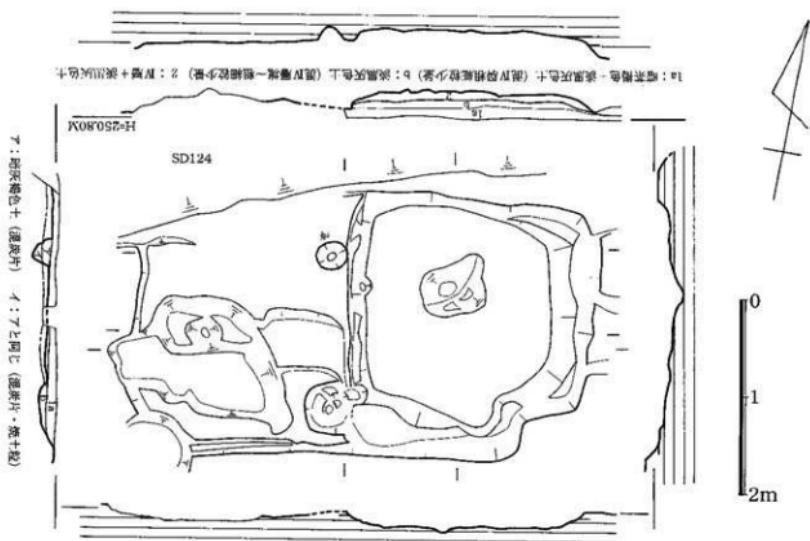
覆土から、土師器片535点、須恵器片2点や鉄鏃1点等が、2層から土師器片193点、土器片加工円盤1点等が出土している。2814は壺の底部片であるが、外面の凹みが平滑になっており、何らかの使用が想定される。須恵器の坏身（2807）は新しい要素であり、混入と推定される。5世紀中葉か。

#### S A-115 (第265図)

IV区の北側に位置し、852号土坑に切られた、長さ3.0~3.42m・幅2.7~3.1mの長方形を呈する住居である。覆土は10~18cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。主柱穴と壁溝は検出されなかった。覆土および台石3点の底面までの2層から、土師器片355点等が、2層から土師器片26点が出土しているが、図化できたのは僅かである。2827は、被熱と弾けがある、鉄床石である。



第281図 S A-122 遺構実測図



第282図 S A-123 遺構実測図

台石底面のレベルが1次面であった可能性が高いが、平・断面では顯著ではなかった。1 b<sub>1</sub>層には焼土粒と炭粒が混入しており、1 b<sub>2</sub>層～2層上面が2次面として使用されたと推定される。5世紀前半か。

#### S A-116 (第266図)

71号住居の5.5m北東に位置し、底面の殆どがⅢ層内にあることから、Ⅲ区内においては機械掘削時に殆ど削失し、主柱穴と若干の2層が遺存していた。Ⅲ区ではきっちりとⅢ d層上面でプランを検出した。

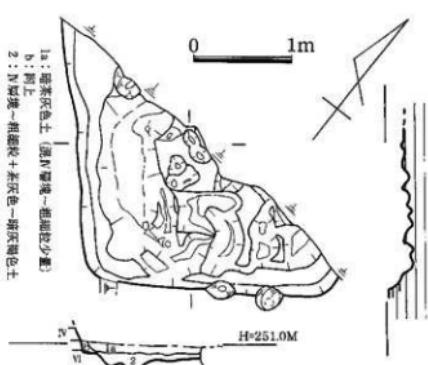
Ⅲ・Ⅹ区検出図を合成すると、南北3.8m、

東西は推定3.1mの隅円長方形を呈する。覆土は、14～20cmの厚さで、貼り床は南西部のみにある。主柱穴は、深さ78cmのpit 1基である。炉と壁溝は、検出されなかった。

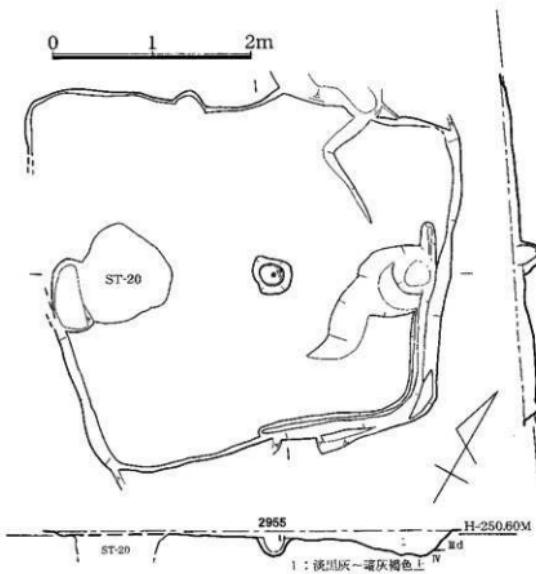
覆土から、土師器片67点と台石1点が出土している。5世紀前半か。

#### S A-117 (第273図)

中央を145号溝に大きく抉られた、長さ4.9～5.12m・幅4.7～5.13mの、台形様プランを呈する



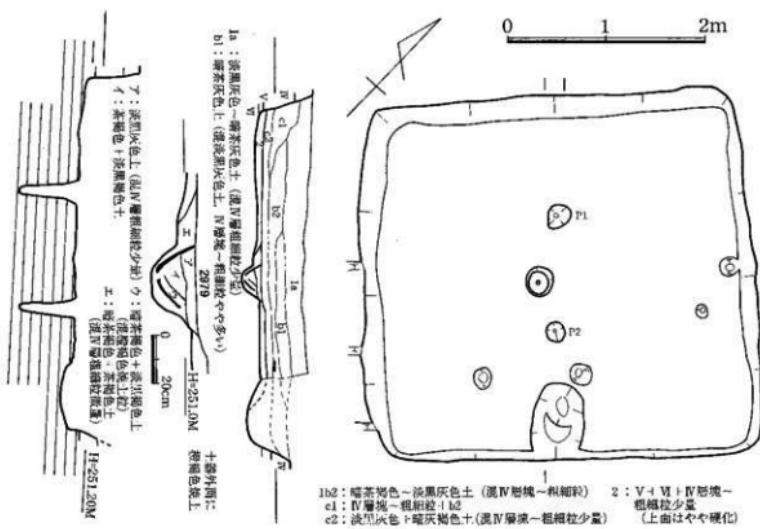
第283図 S A-124 遺構実測図



第284図 S A-125 遺構実測図

住居である。覆土は19~26cm遺存し、土層的には15cm程の削失と推定される。主柱穴は、直径20~28cm・深さ44cmの4本で、住居の掘形と相似形の配置をとる。貼り床は4~16cmの厚さで、南辺中央部の壁溝が途切ることから、出入口が想定される。中央やや東寄りには、口縁部を打ち欠いた甌（2846）を使用した土器埋設炉がある。

覆土から、土師器片577点、須恵器片15点等が、2層から土師器片25点が出土している。2852の底部は、125号住居内の20号地下式横穴墓内出土片と接合している。



第285図 S A-126 遺構実測図 (II・III区検出図合成)

### S A-118 (第274図)

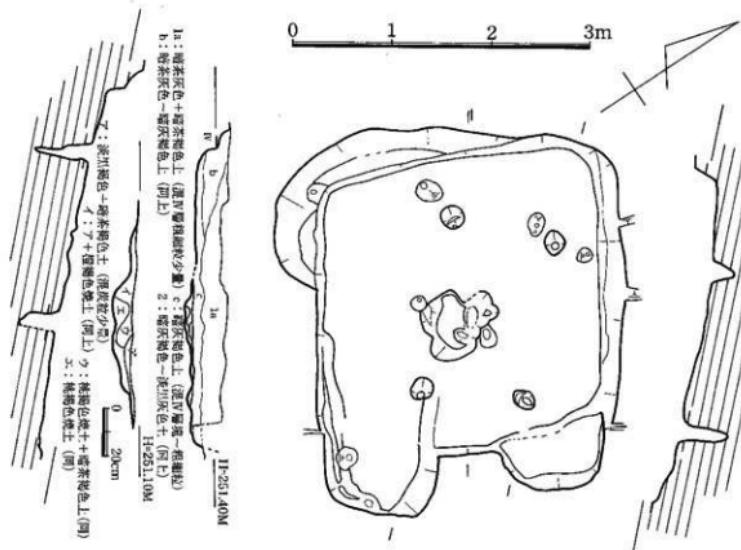
長さ4.2~4.7m・幅3.54~3.68mの不整長方形を呈し、南西隅は凹みがある。覆土は0~10cm程が遺存し、土層的には10~15cmの削失が推定される。直径25~42cm・深さ14cmのP 2と深さ51cmのP 1は、主柱穴と推定される。中央には、長径50cm・短径42cm・深さ5cmの掘り込み炉があり、断面観察では2次期（ア・イ層）の使用が窺える。

覆土から、土師器片77点のほか、高壙転用繩の羽口2点（2876・2877）が出土している。5世紀後半か。

### S A-119 (第275図)

78号円形住居を切り、894号土坑に切られ、現代の天地返しによって痕跡を留める程度の検出であった。長さ4.4~4.7m・幅3.7~4.08mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は無いに等しく、土層的には、30cm程の削失が推定される。主柱穴は、直徑26~36cm・深さ50~55cmの2本柱である。中央やや南には、口縁部を打ち欠いた甕（2878）を使用した土器埋設炉があるが、近現代の柱穴に掘り込まれて半分を失う。

覆土（主として南側の土坑）から、土師器片20点と須恵器片1点が、2層から土師器片90点が出士しているが、固化できたのは僅かである。5世紀後半~6世紀前半で、須恵器は混入の可能性が高い。



第286図 S A-127 遺構実測図

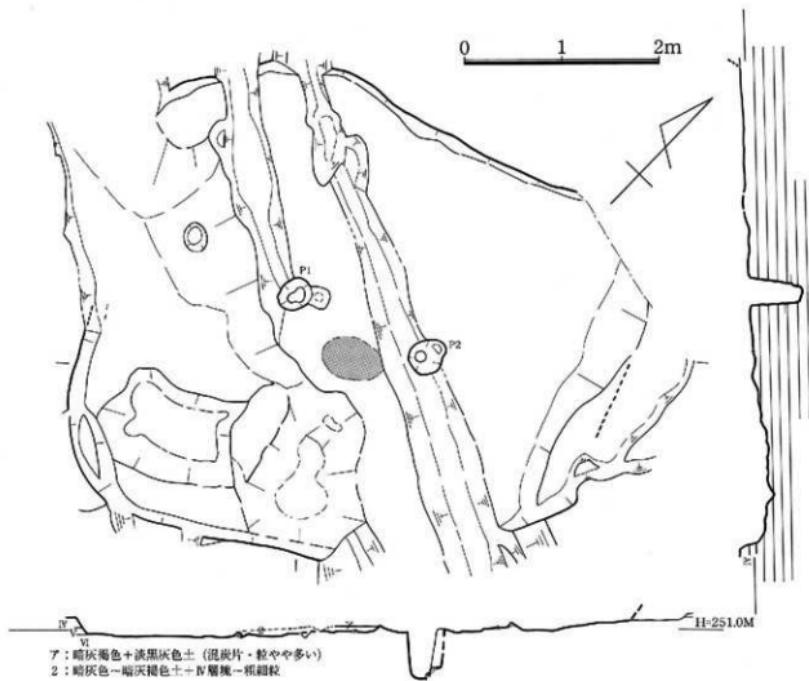
S A-120 (第276図)

78号住居と1m隔て、149号溝に切られた、長さ5~5.21m・幅4.8~5.36mの隅円方形を呈する住居である。覆土は10~18cm遺存し、土層的には20cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径28~44cm・深さ47~74cmの4本で、中央に、胴部上半までを打ち欠いた甕(2886)を使用した上器埋設炉(B)がある。初期の炉はAの掘り込み炉(長径62cm・短径40cm・深さ10cm)であり、東南部の掘り込み炉C(長径59cm・短径48cm・深さ4~7cm)は第3次の炉と推定される。

覆土から、土師器片252点と須恵器片2点が、2層から土師器片34点が出土している。2901の高坏は、899号土坑出土片と接合している。須恵器の高坏2898は、145号溝出土片と接合している。6世紀後半である。

S A-121 (第280図)

床面に重機の爪痕が残る、痕跡程度に削失された住居で、長さ4.8~5.3m・幅4.2~4.7m程の隅円長方形を呈する。覆土は僅かで、土層的には10~20cmの削失が推定される。主柱穴は、直径25~33cm・深さ44~63cmの4本(P1~4)で、中央やや南に、口唇部を打ち欠いた甕(2902)を使用



第287図 S A-128 遺構実測図

した土器埋設柱がある。その東西には、直径14~28cm・深さ16~24cm(P5・6)の小pitがあり初期の2本柱と推定される。土器埋設炉の掘り込みは、異常な程の大きさである。南辺中央部には長径94cm・短径53cmの土坑が伴う。

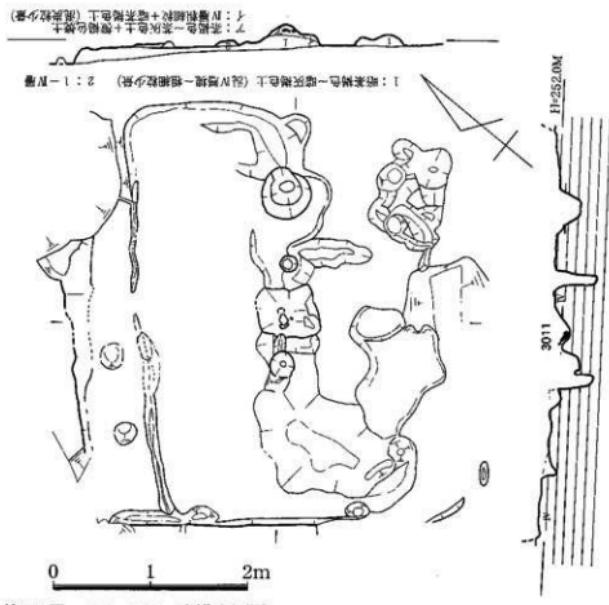
覆土と2層から、土器片84点が出土しているが、固化できたのは僅かである。

6世紀前半か。

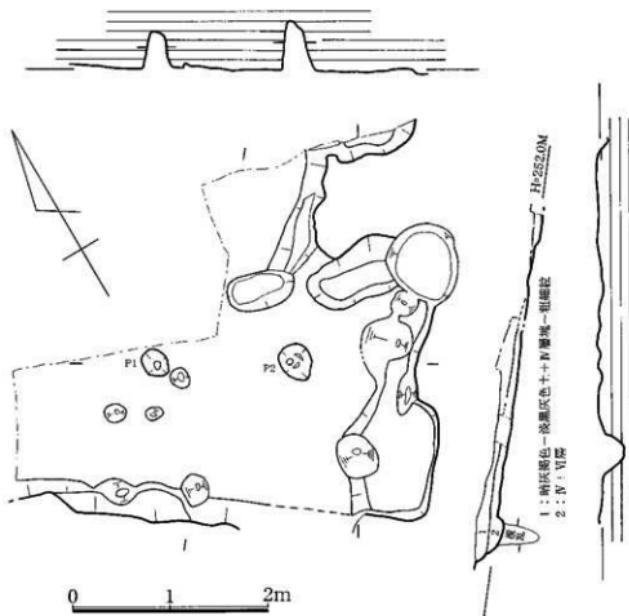
#### S A-122(第281

図)

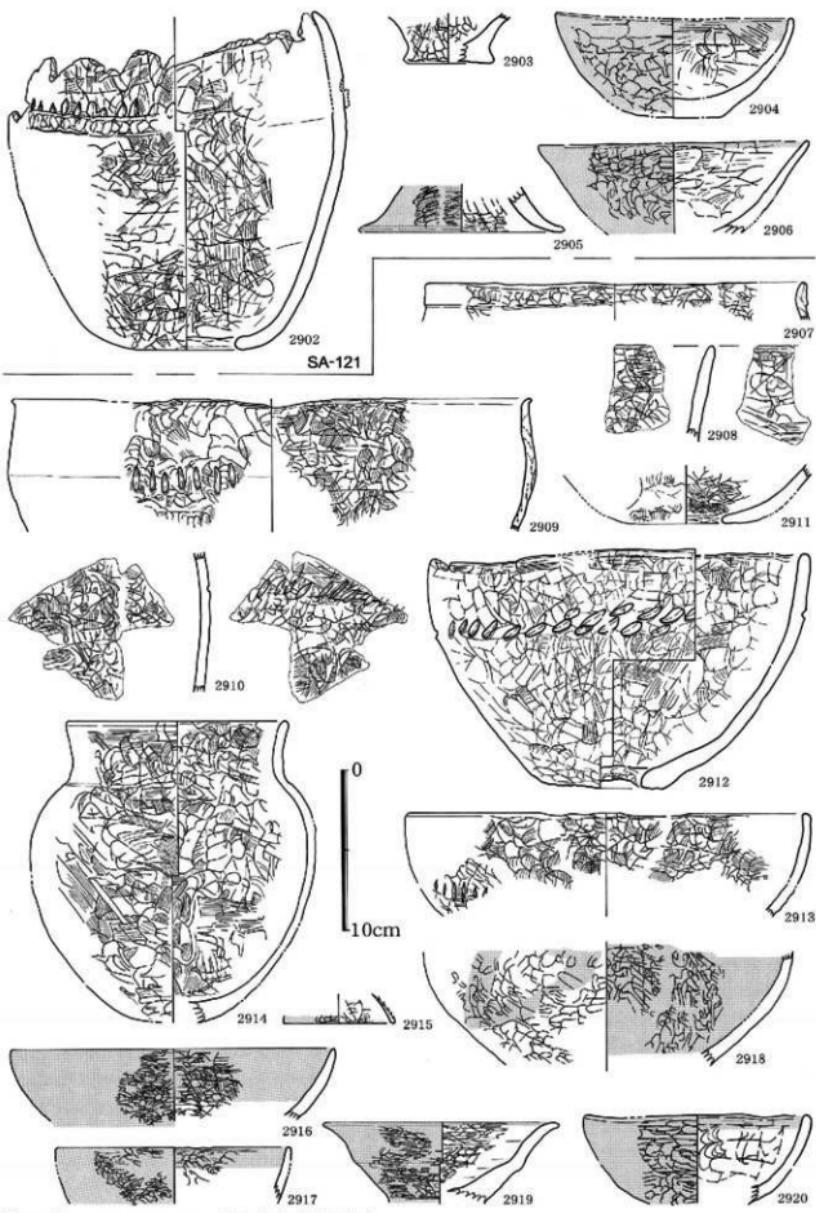
東西3.7~4.0m・南北3.4~3.97mの、台形様の隅円方形を呈する住居である。覆土は10~22cm遺存し、土層的には15cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径32~41cm・深さ42~61cmの4本(P1~4)で、中央東寄りには、器高の低



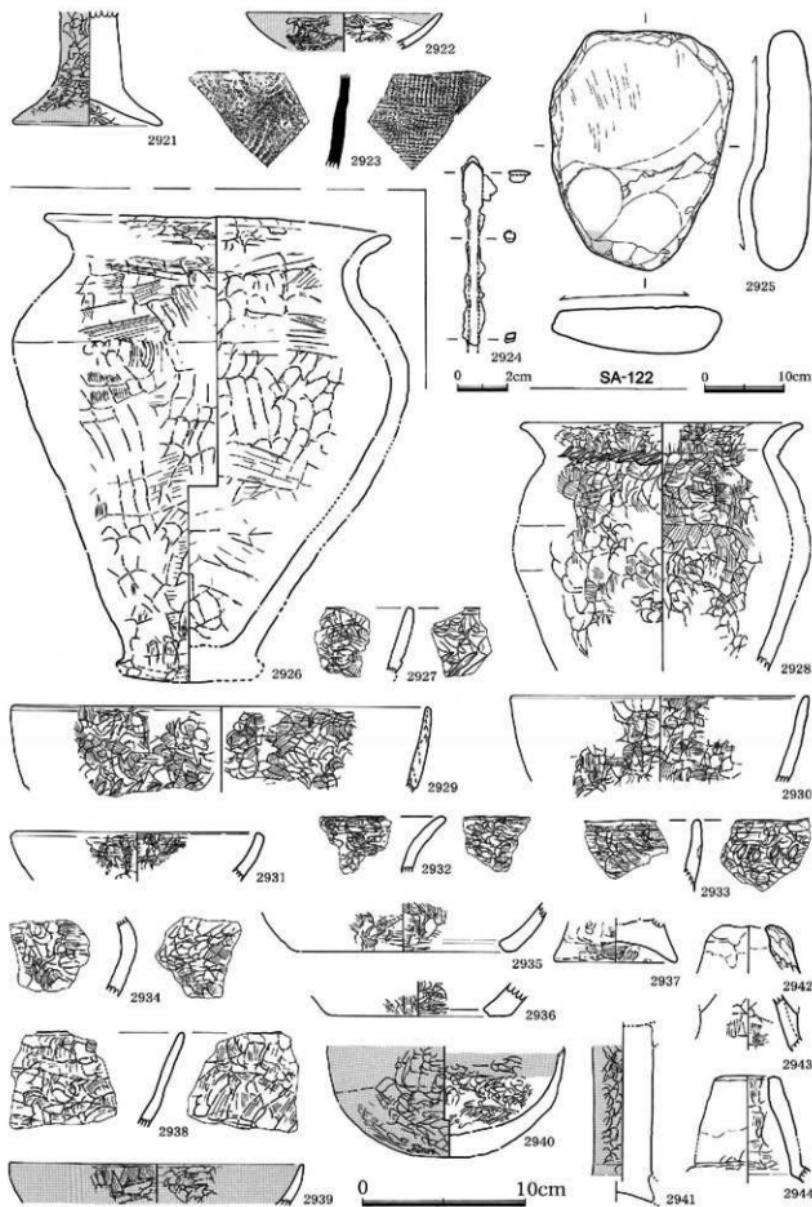
第288図 S A-129 遺構実測図



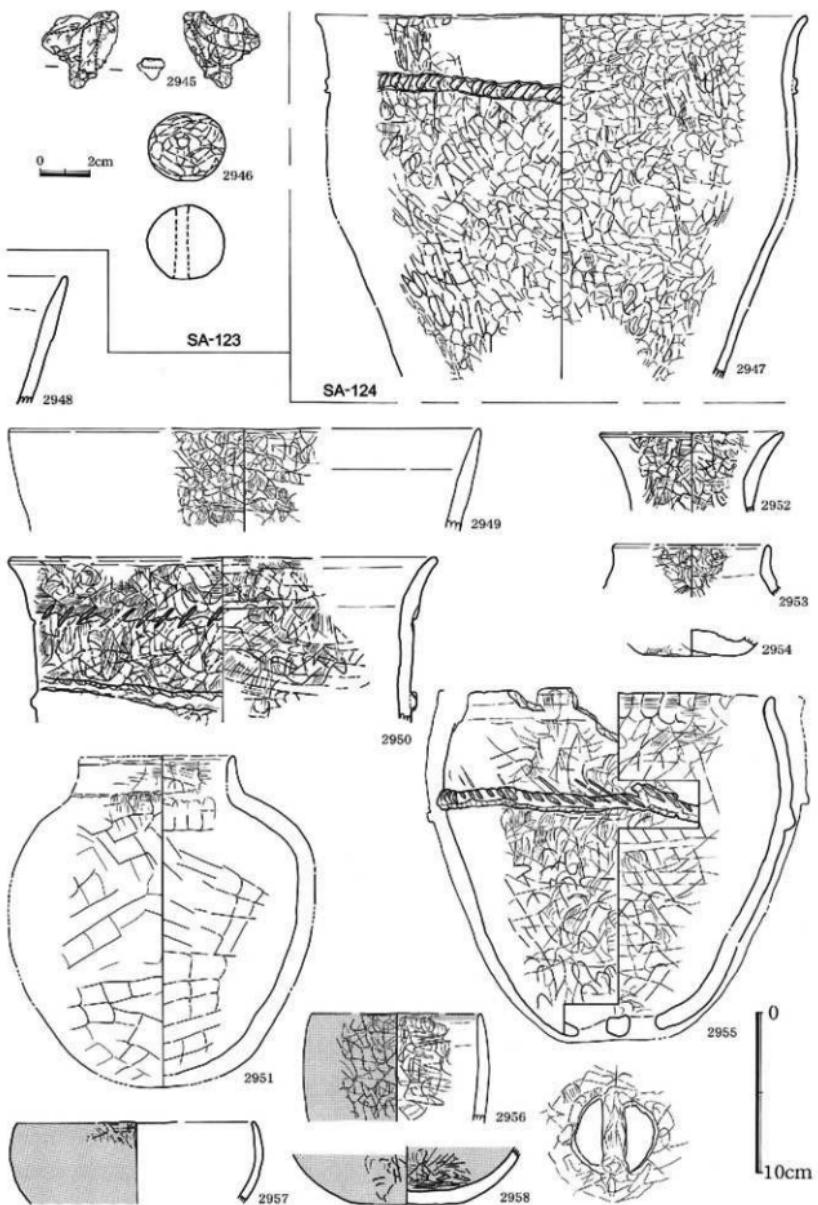
第289図 S A-130 遺構実測図



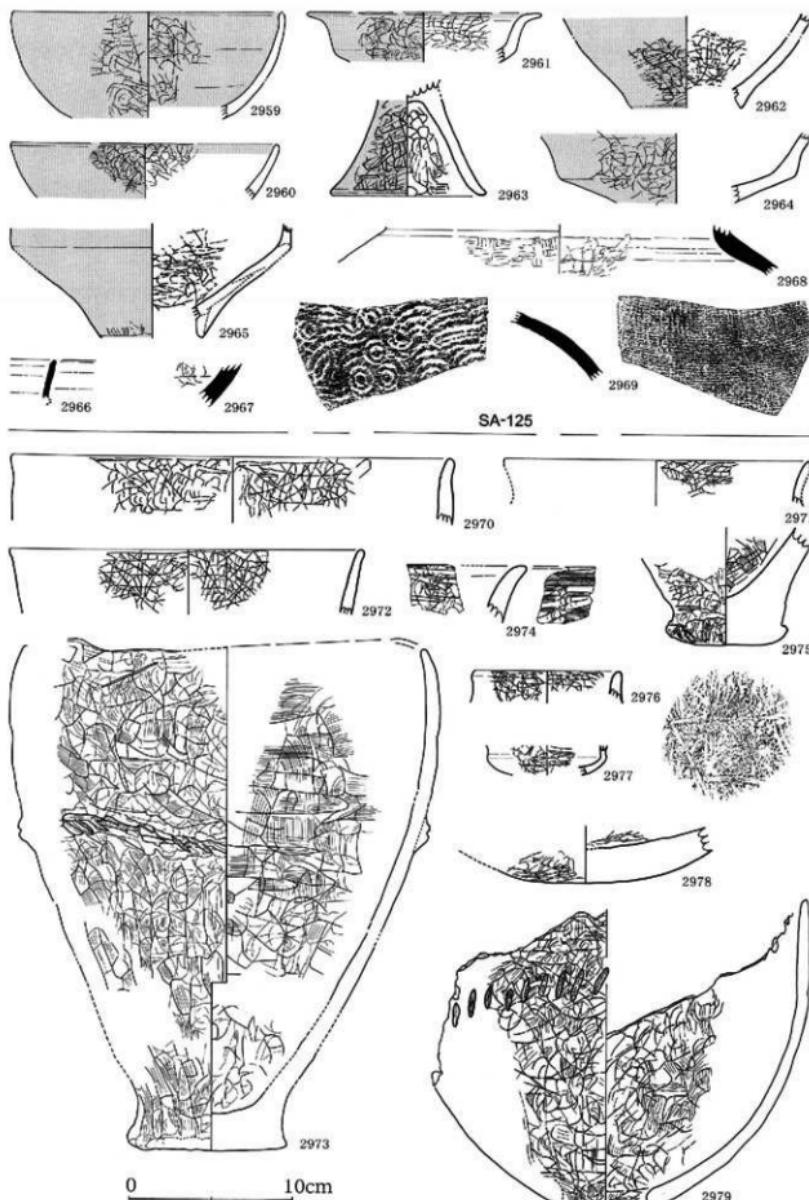
第290図 SA-121-122 出土遺物実測図(1)



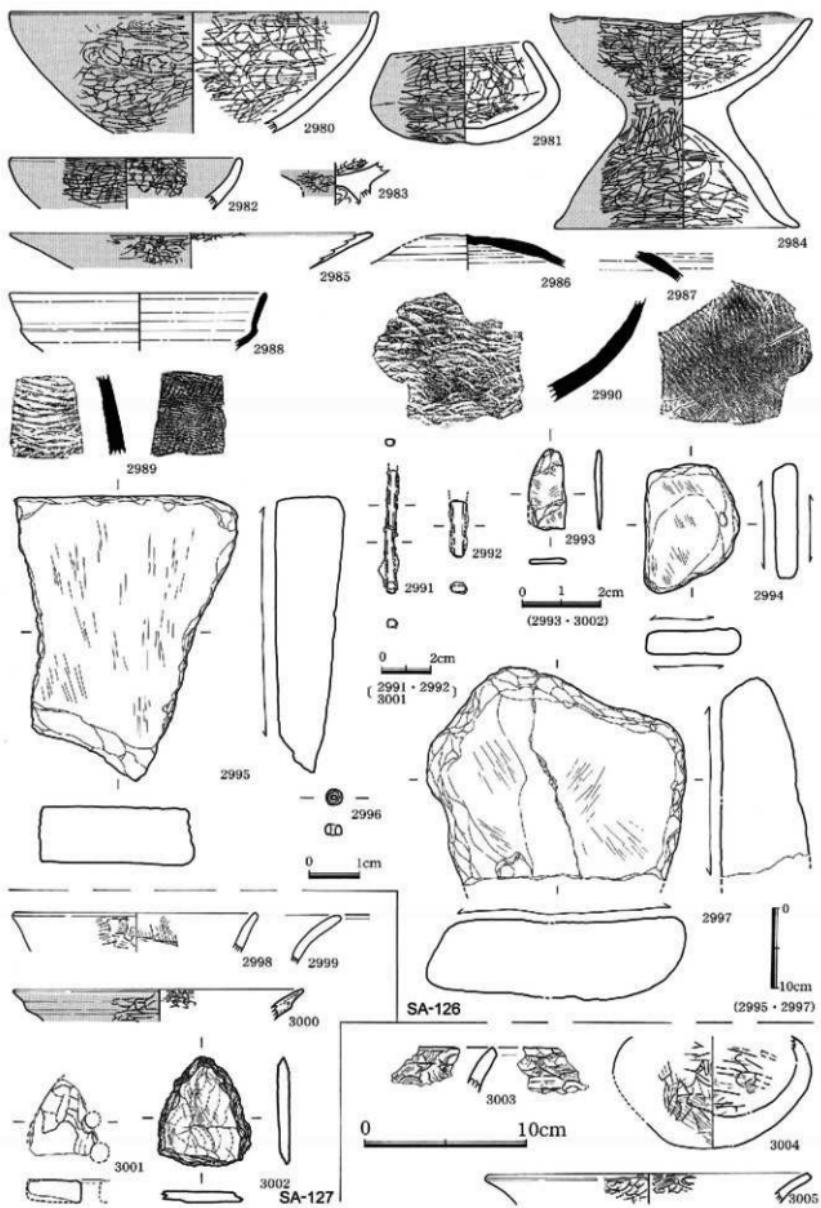
第291図 SA-122 出土遺物実測図(2), SA-123 出土遺物実測図(1)



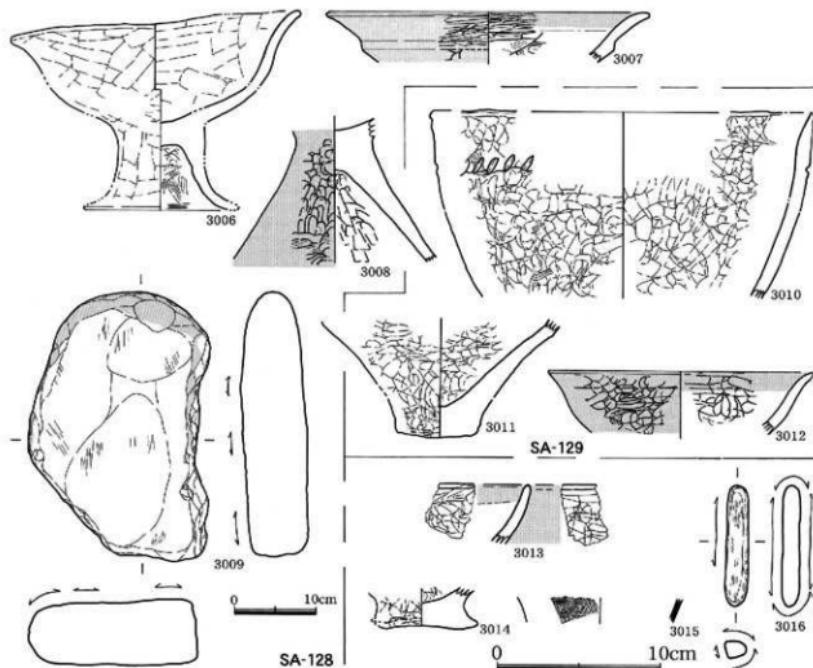
第292図 SA-123 出土遺物実測図(2), SA-124-125 出土遺物実測図(1)



第293図 SA-125 出土遺物実測図(2), SA-126 出土遺物実測図(1)



第294図 S A-126 出土遺物実測図(2), S A-127・128 出土遺物実測図(1)



第295図 SA-128 出土遺物実測図(2), SA-129・130 出土遺物実測図

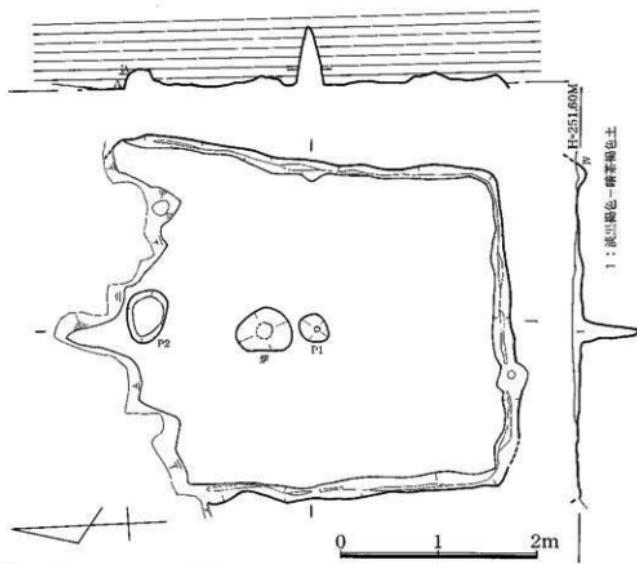
い壺（2912）を使用した土器埋設炉（A）がある。炉AはBを切り、Bは掘り込み斜面に丹塗り壺の破片（2918）を貼っている。その南北には、深さ48・58cmのpit（P5・6）があり、初期の2本柱と推定される。東辺中央には、直径54cm程の土坑が伴う。

覆土から、土師器片385点のほか、須恵器片1点、鐵鎌1点（2924）、台石1点が、2層から土師器片39点が出土している。6世紀後半である。

#### SA-123 (第282図)

北半分を124号溝に切られ、南西部に搅乱、南東部を土坑が切る、遺存の悪い住居である。東西4.61m・南北3.6~4m位と推定され南東部1/4程度が一段（6~8cm）下がる。その底面には、厚さ4~10cm程の貼り床が施されている。主柱穴は無いが、中央付近に、長径32cm・短径28cm・深さ17cmの掘り込み炉がある。

覆土から、土師器片179点、須恵器片1点（4547）のほか、高坏転用輪の羽口3点（2942~2944）、球形土錐1点、銹着した鐵鎌片、鐵滓1点（写真図版413）等が、2層から土師器片12点が出土している。5世紀後半であり、須恵器は混入と思われる。



第296図 S A-131 遺構実測図

S A-124 (第283図)

北半分を道路擁壁基礎工事で削失した、幅 $2.56m + \alpha$ 、長さ $2.7m + \alpha$ の、隅円長方形を呈する住居である。主柱穴と炉・壁溝は不明瞭であるが、貼り床が施されていることから住居と断定される。覆土は24cm遺存し、土層的には20cm程の削失が推定される。1 b層は、壁材の存在を窺わせる。

覆土から、土師器片14点のほか、朱玉片3点（写真図版413）が、2層から土師器片3点が出土しているが、土師器1点のみ図化できた。5世紀後半か。

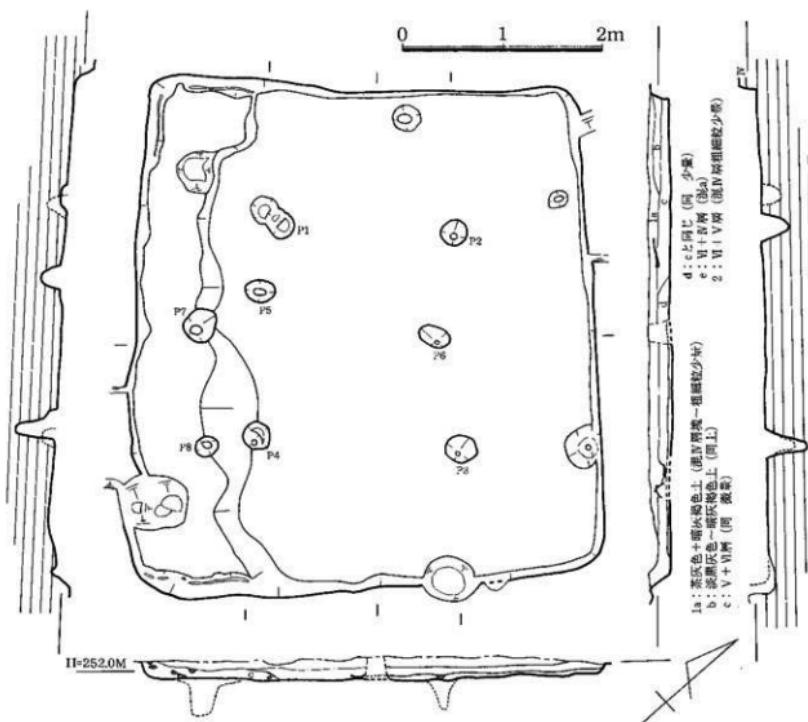
S A-125 (第284図)

XII区の西端に位置した、長さ $3.5\sim4.34m$ ・幅 $3.1\sim3.94m$ の、隅円台形を呈する住居である。東隅以外は痕跡程度が遺存するが、削失は10cm程であろうから、築造時から浅い住居であったようである。主柱穴は無く中央には双孔の甌（2955）を使用した土器埋設炉がある。西南辺中央には、長径75cm・深さ4cmの、20号地下式横穴墓に切られた浅い土坑が伴う。北東辺中央には、短径70cmで2段掘り・深さ18cmの土坑がある。貼り床は、無い。

覆土から、土師器片685点のほか、須恵器片4点等が出土している。6世紀後半である。

S A-126 (第285図)

XII区で8割、III区で2割を調査した、長さ（主柱穴方向） $3.6\sim3.8m$ ・幅 $3.7\sim4.0m$ の隅円方形を呈する住居である。覆土は、40~48cmの厚さを測る。主柱穴は、直径20~27cm・深さ54~59cmの2本（P1・2）である。中央やや東南寄りには、口縁部~胴部上半を打ち欠いた甌（2979）を使



第297図 SA-132 遺構実測図

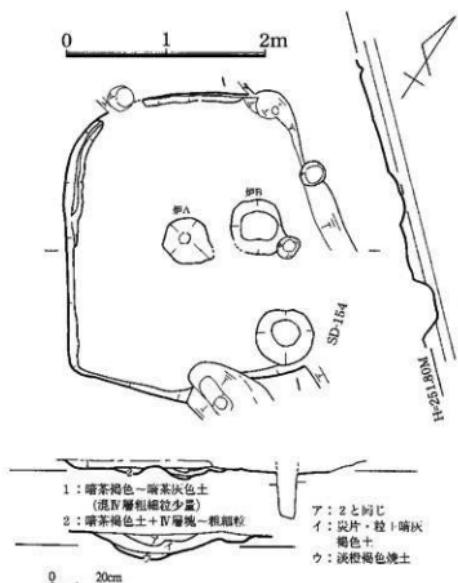
用した土器埋設炉がある。東南辺中央には、幅46~52cm・深さ11cmの土坑が伴う。壁溝は無い。南隅と40cm離てた西側には、26号地下式横穴墓がある。

覆土から、土師器片396点のほか、須恵器片10点、鐵鎌片2点、ガラス小玉1点、台石2点が、2層から土師器片6点が出土している。台石2997は、5.7m北に位置する139号住居出土片と接合している。2995の台石とともに鉄床石として使用された可能性が高い。6世紀後半である。

#### SA-127 (第286図)

126号住居の4m南西に位置した、長さ3.4~3.94m・幅2.8~3.04mの、南東辺に間仕切りのある隅円長方形を基調とし、西隅には、南北西方向に奥行き40cmの斜面突出部が付く。主柱穴は直径20~25cm・深さ21~54cmの4本柱で、中軸よりもかなり東寄りに長方形に配置されている。住居底面の中央には、3~4次期の掘り込み炉がある。

覆土から、弥生時代後期~古墳時代前期の土器片が260点、須恵器片2点、磨製石鎌の未製品などが出土しているが、図化できたのは僅かである。須恵器片は、木根等の搅乱混入と思われ、図化



第298図 SA-133 遺構実測図

#### SA-129 (第288図)

XII区の北西端に位置した、東南半分が痕跡程度に遺存した住居で、長さ4.33m（主柱穴方向）、幅推定4.2mの隅円方形を呈する。覆土は北西半分に4~14cm遺存し、土層的には20~25cmの削失が推定される。主柱穴は、深さ42cmの2本柱で、中央に、壺の底部片（3011）を使用した土器埋設炉がある。イ層は初期の掘り込み炉と推定され、北西辺の70cm内側には拡張前の櫛溝があることからも裏付けできる。北東中央部にある直径54cm前後・深さ22cmの穴は、初期の段階の土坑と推定される。

覆土から、5世紀代と思われる土師器片45点が、2層から3点が出土しているが、図化できたのは僅かである。

#### SA-130 (第289図)

近現代の擾乱が著しく、北~北東部は畦畔下にあるために不明な点が多い。

1辺4.2m以上の隅円方形と推定される掘形は、南西部のみで検出された。覆土は6~14cm遺存し、東辺の掘形ラインは2層の掘り込みラインであり間仕切りでは無い。

直径25~40cm・深さ40~51cmのpit 2基（P1・2）は、主柱穴4本のうちの2本と推定される。炉跡や壁溝は検出していない。

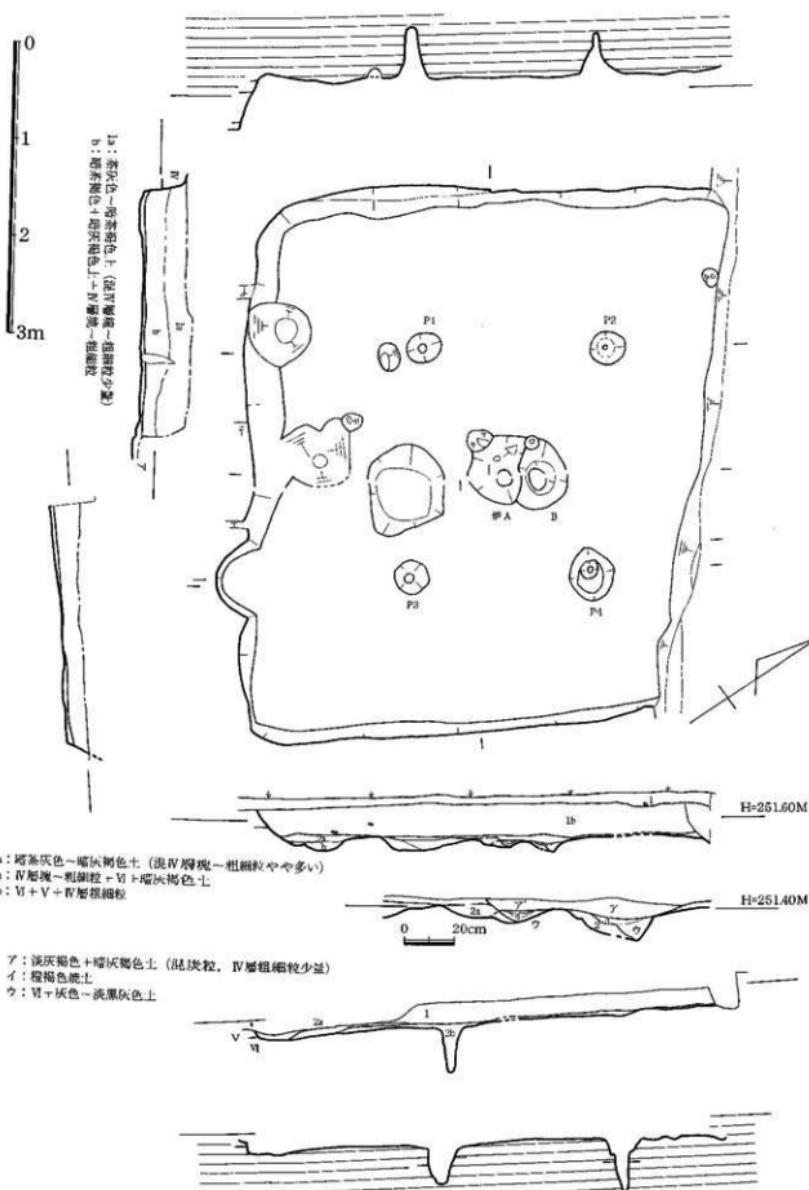
覆土から、土師器片15点と須恵器片1点、器面調製具の可能性がある石器1点（3016）が、2層

に耐えない。

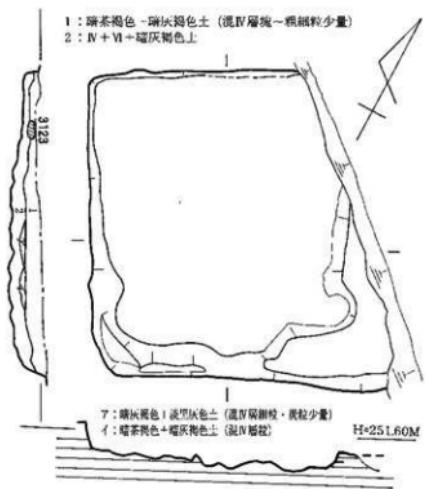
#### SA-128 (第287図)

147・149号溝に切られ、北東部は消失するほどの削失を受けた住居であるが、断続的に掘形が遺存しており、大凡の規模は把握できる。長さ5.4m・幅3.6~4.96mの、北西辺が短い隅円台形を呈する。覆土は南側のみ16cm程遺存し、土層的には30cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径30~39cm・深さ50~54cmの2本（P1・2）で、中央南東寄りには、長径70cm・短径50cm・深さ5~6cmの掘り込み炉がある。壁溝は無い。

覆土から、土師器片9点と台石1点が、貼り床から土師器片が26点出土したが、図化できたものは少ない。台石3009は被熱しており、鉄床石の可能性がある。6世紀前半か。



第299図 SA-134 遺構実測図 (II・III・IV検出図合成)



第300図 SA-135 遺構実測図

ば、長さは最大5.7m程になる。反面、P.2が土坑で、北東端の底面の曲がりが生きているとすれば、長さは4.3~4.4m程でP.1の1本柱住居が復元される。

P.1の北には、長径59cm・短径41cm・深さ10cmの掘り込み炉があり、炭粒と焼土紋が混入している。覆土および2層から、土師器片89点が出土したが、図化できたのは少ない。6世紀前半か。

#### SA-132 (第297図)

133号住居の4.5m東に位置した、長さ4.96~5.40m・幅4.3~4.8mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は20cm遺存するが、土層的には30~40cmの削失が推定される。主柱穴は、直径24~30cm・深さ20~39cmの4本(P.1~4)である。長径31cm・短径21cm・深さ20cmの2本(P.5・6)は、拡張前の主柱穴と推定される。直径18~33cm・深さ12~20cmのP.7・8は、出入口の支柱穴の可能性がある。炉跡は、検出されなかった。

覆土から、土師器片483点、須恵器片8点等が、2層から土師器片22点が出土した。丹塗り高壇の中には、壊部が梢円形を呈するもの(3064)がある。6世紀後半である。

#### SA-133 (第298図)

129号住居の南東1.9m、154号溝に切られた、長さ2.8~3.14m・幅2.5m程の隅円長方形タイプで、南東辺が崩張る。覆土は7~8cm遺存し、土層的には15cm程の削失が推定される。中央西寄りには、長径56cm・短径47cm・深さ11cmの初期の炉があり、ア層で埋めて、北東側に、長さ56cm・幅51cm・深さ7cmの隅円方形を呈する2次炉(B)が掘り込まれたと推定される。主柱穴は無く、南東部に、直径57cm・深さ16cmの土坑が伴う。

覆土から、土師器片20点が出土したが、図化できたのは僅か2点である。3世紀後半か。

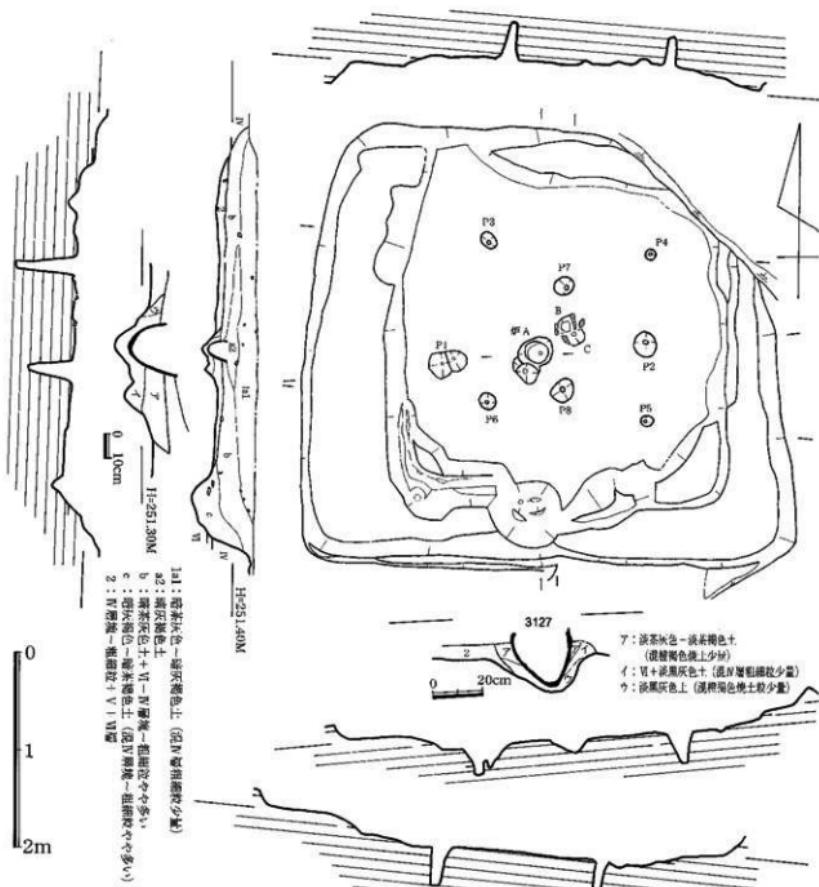
から土師器片4点が出土したが、図化できたのは僅かである。6世紀前半か。

#### SA-131 (第296図)

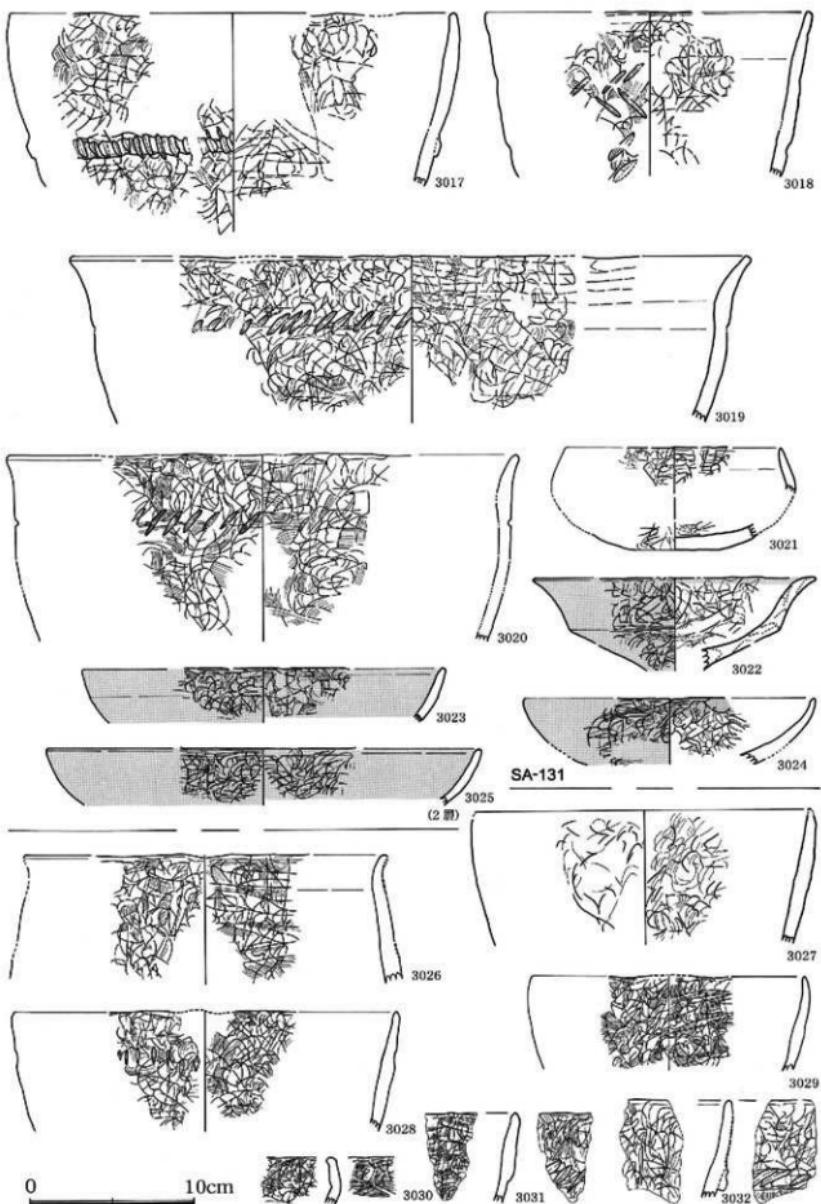
痕跡程度の住居で、南北3.8m以上・東西3.3~3.7mの長方形を呈し、北側は天地返しによって消失する。覆土および2層は中央部付近で10cm程遺存するが、土層的には30~40cmの削失が推定される。長径32cm・短径27cm・深さ57cmのpit(P.1)は、主柱穴と推定される。その1.7m北には長径56cm・短径39cm・深さ19cmの小pit(P.2)があり、規格が異なるのが難点であるが、5~6m北に位置する137号住居が相似形をしており、2本柱を想定しても良いのではないかと思われる。そうであれ

S A-134 (第299図)

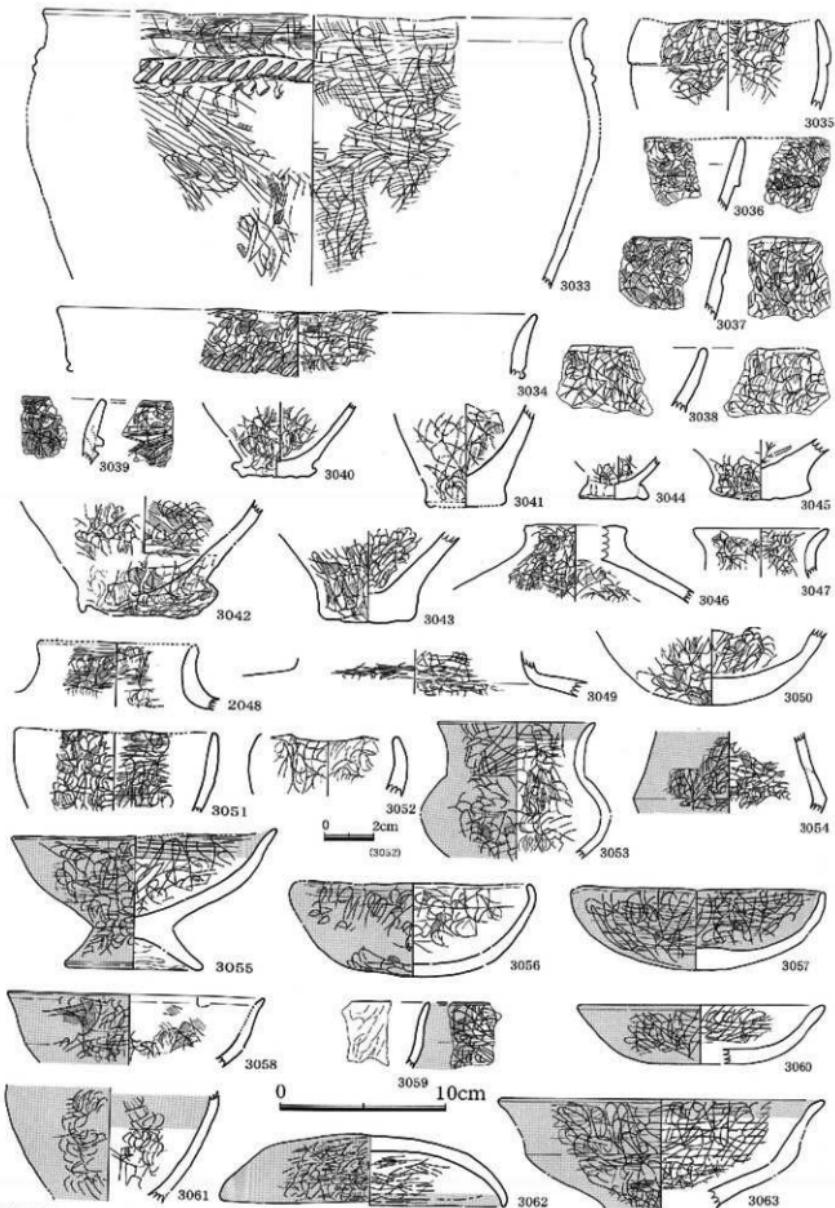
西北半分をⅧ区で、南東半分をⅪ区で調査した住居で、北東辺は道路状遺構に削られ消失している。長さは4.7m以上・推定5m、幅5.32~5.65mの隅円方形を呈し、南西部には幅80cm・奥行き32cmの半円形突出部があり、出入口と推定される。覆土は41cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径30~54cm・深さ40~53cmの4本（P1~4）である。P3・4の柱痕跡の直径は10cmである。中央には、2次期の掘り込み炉A・B（新旧不明）があり、3次には両方にまたがって（ア層）使用される。炉Aの南西部にある土坑状掘り込みは埋め戻されて機能していない。



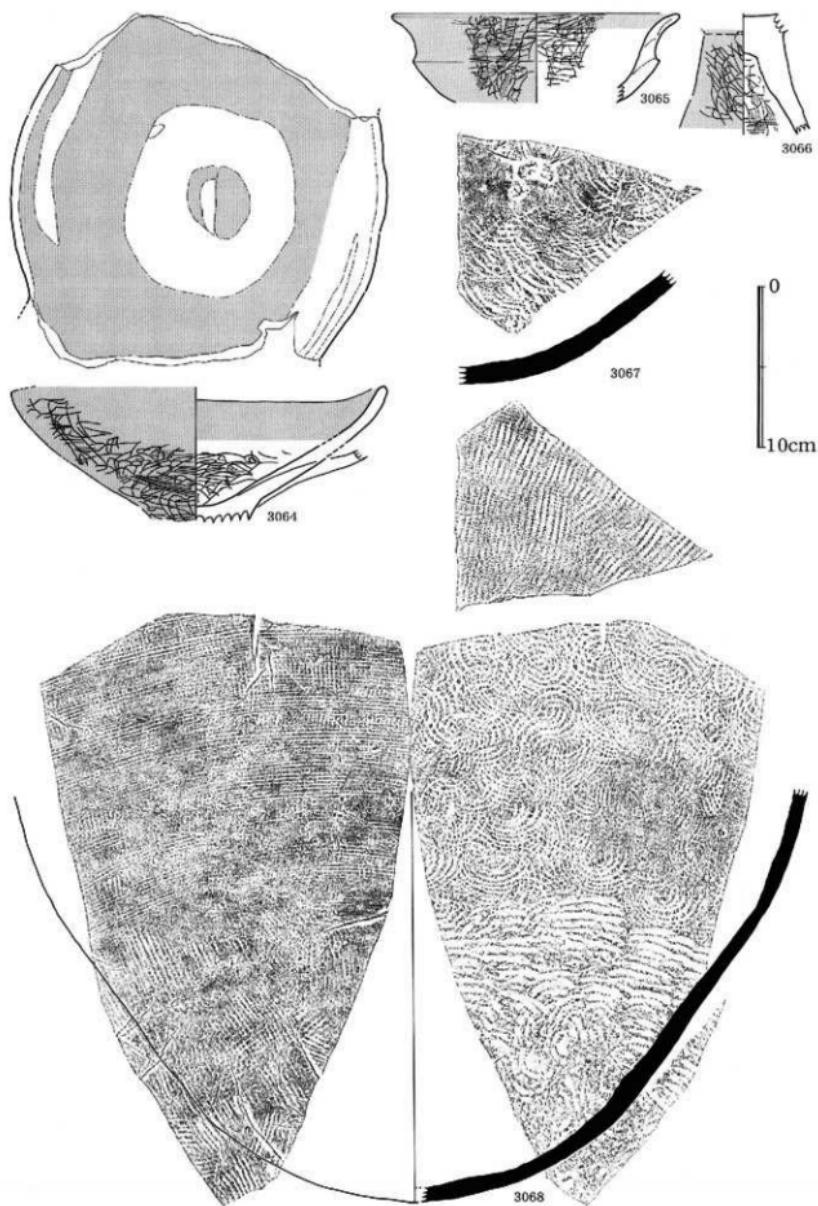
第301図 S A-136 遺構実測図 アミ目は焼土



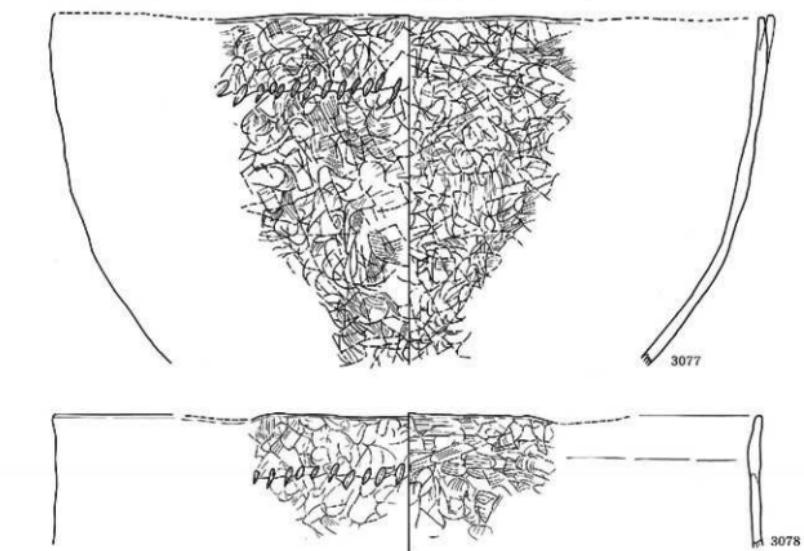
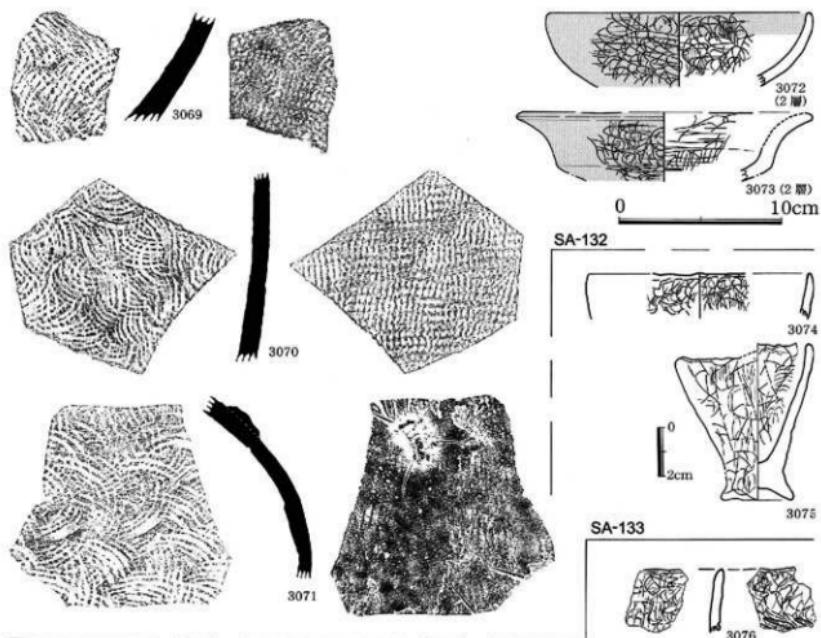
第302図 SA-131・132 出土遺物実測図(1)



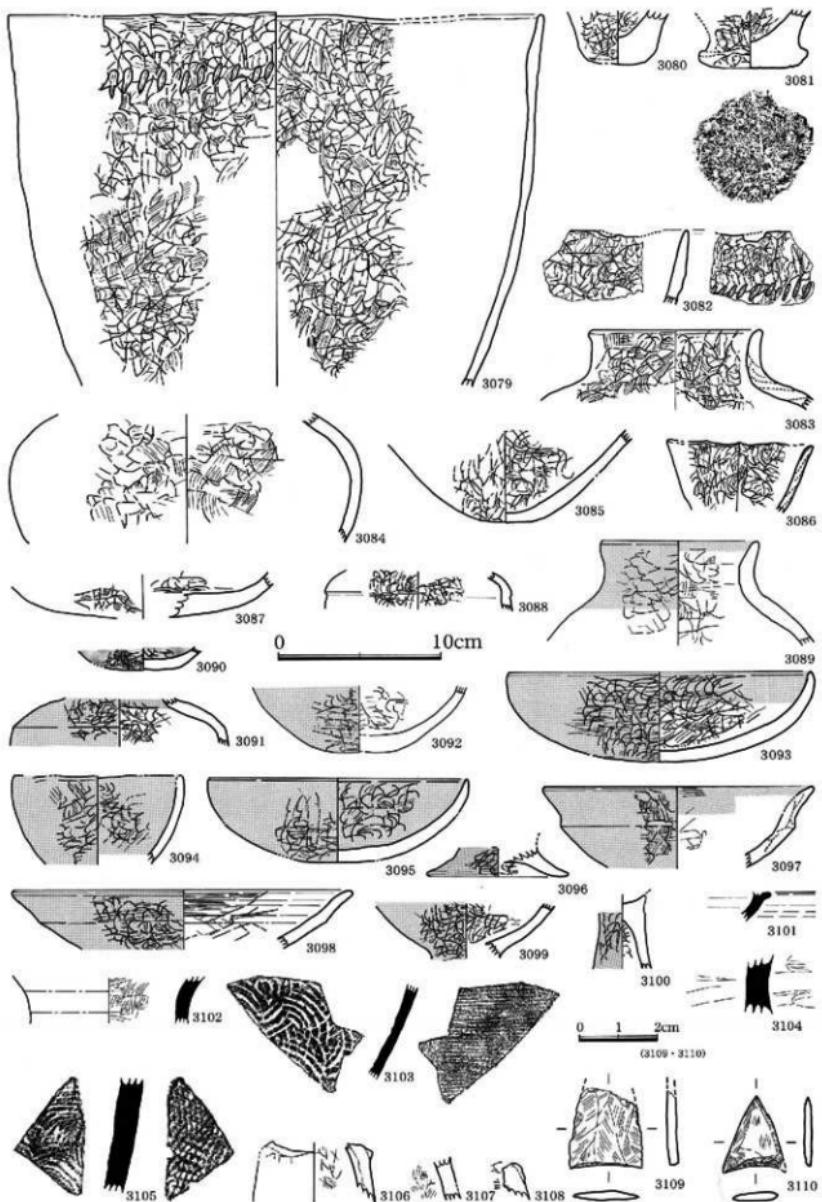
第303図 S A-132 出土遺物実測図(2)



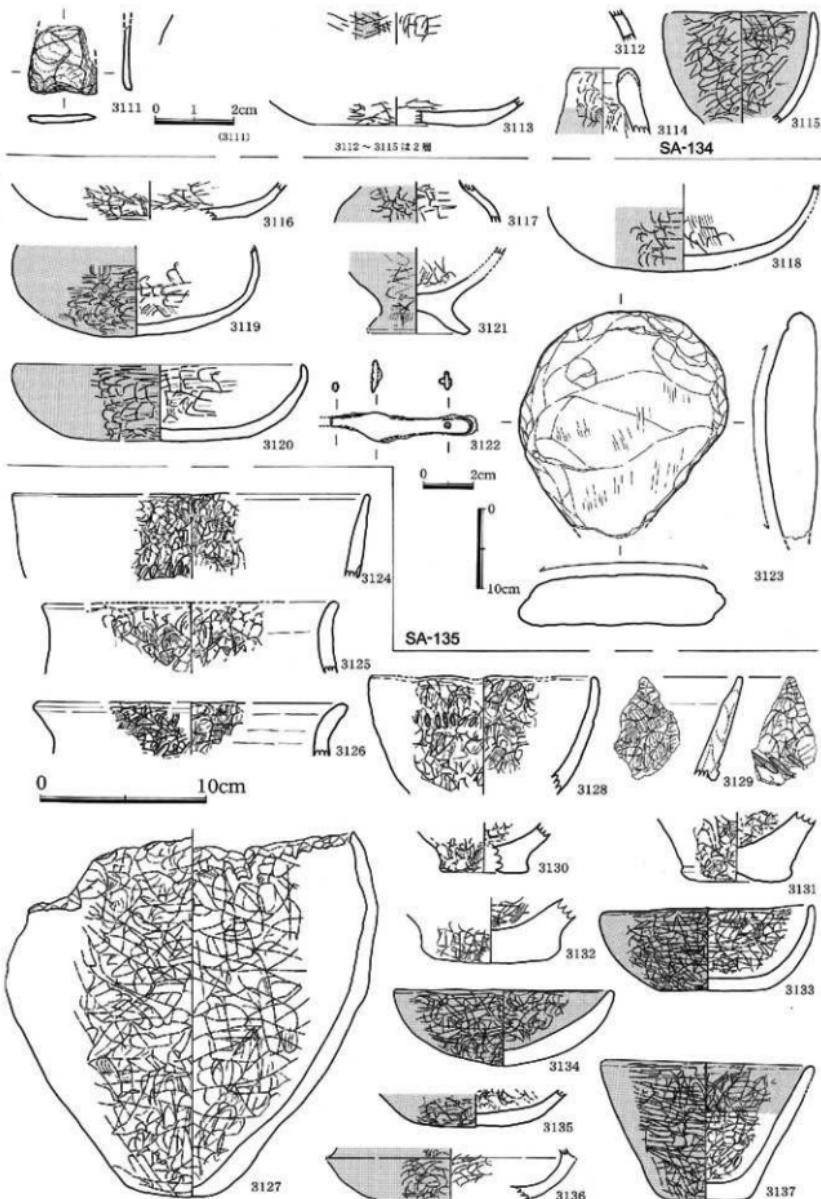
第304図 S A-132 出土遺物実測図(3)



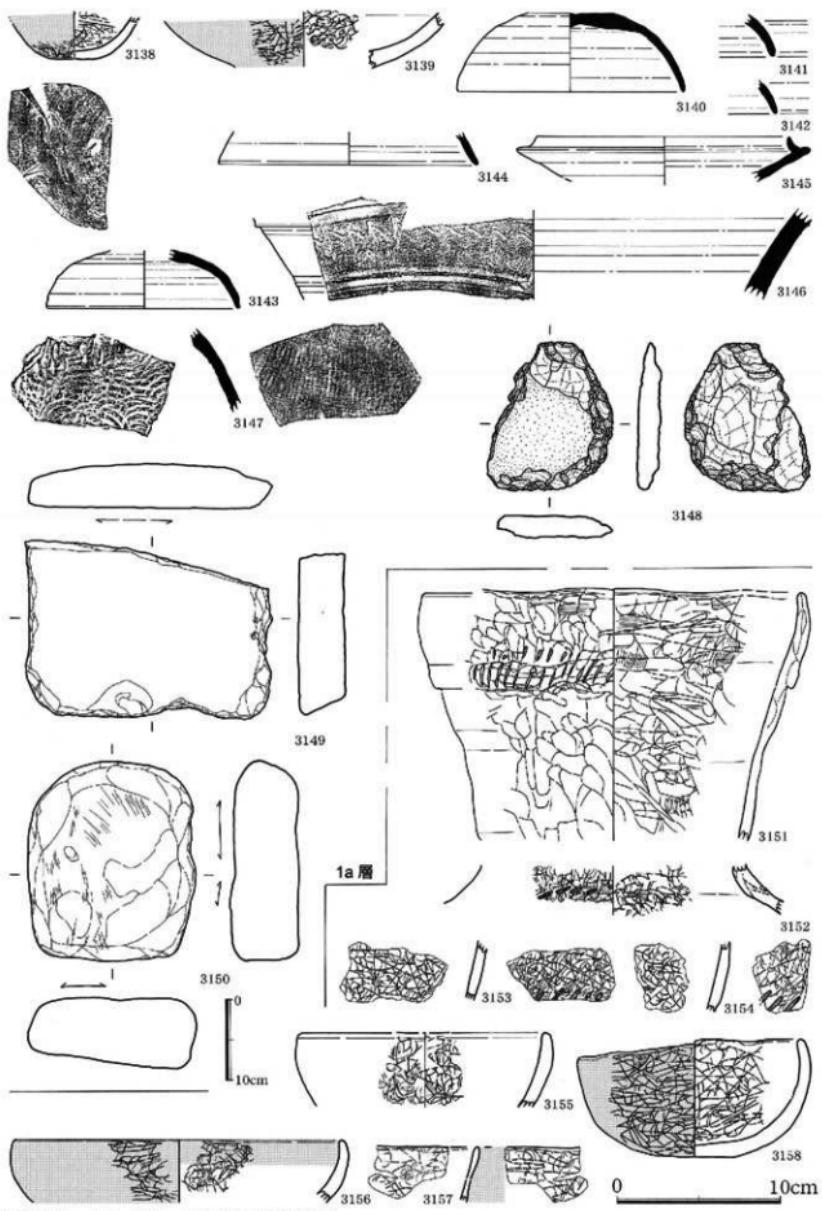
第305図 SA-132 出土遺物実測図(4), SA-133・134 出土遺物実測図(1)



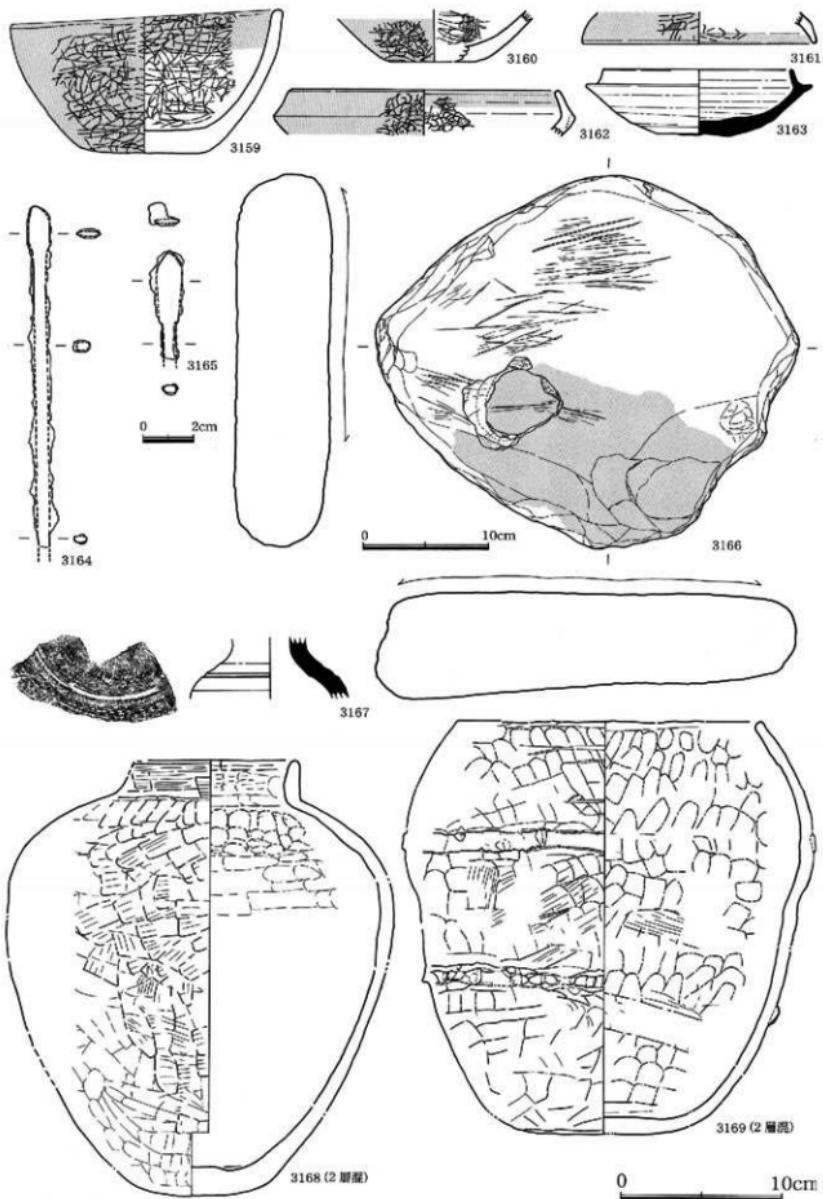
第306図 S A-134 出土遺物実測図(2)



第307図 SA-134 出土遺物実測図(3), SA-135-136 出土遺物実測図(1)



第308図 SA-136 出土遺物実測図(2)



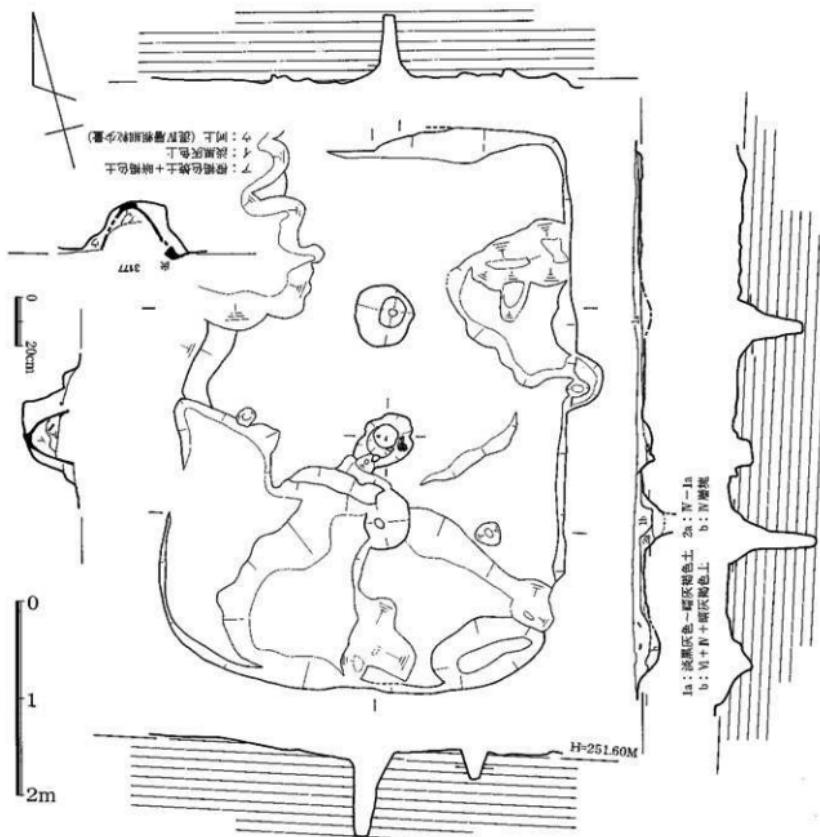
第309図 SA-136 出土遺物実測図(3)

い。

覆土から、土師器片672点のほか、須恵器片11点、高坏転用輪の羽口3点、磨製石鎌2点とその未製品1点など、2層から土師器片44点と高坏転用輪の羽口1点が出土している。5世紀後半～6世紀後半である。

#### S A-135 (第300図)

134号住居と20cm離て、北東辺を道路状遺構に削られた住居である。長さ3m以上・幅3.1～3.2mの方形を呈する。覆土は5～17cm遺存し、土層的には5～10cmの削失が推定される。主柱穴は不明で、径40～50cm・深さ4～5cmの掘り込み炉ア・イを確認した。炉は2次期で、中央に近いAの方が新しい。



第310図 S A-137 遺構実測図

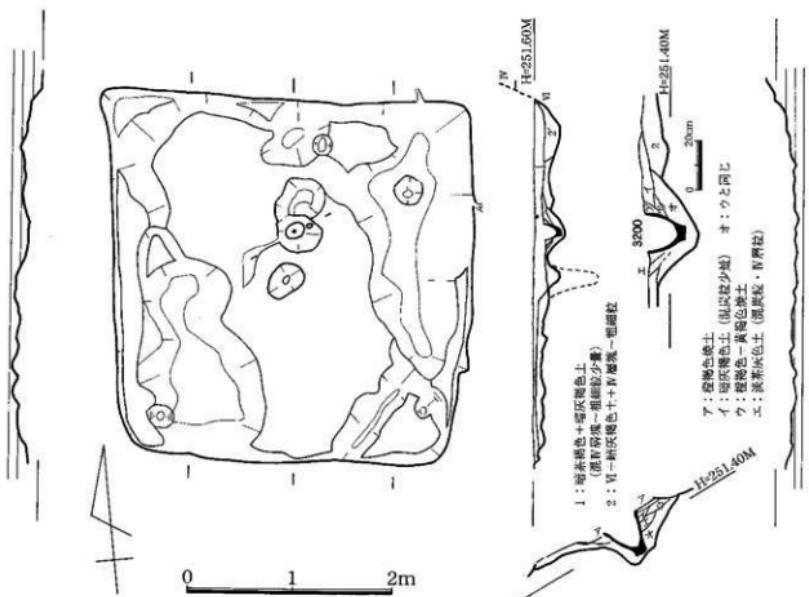
覆土から、上師器片20点のほか、刀子片（3122）と台石1点が出土している。6世紀前半か。

### S A-136 (第301図)

135号住居と2.1m南、157号溝に切られ、北東部は道路状遺構に削失された住居である。東西4.5～5.0m・南北4.5mの隅円方形を呈し、北辺がやや短い。

主柱穴は、直徑22～24cm・深さ28～34cmの2本（P 1・2）で、中央には口縁部を打ち欠いた蓋（3127）を使用した土器埋設炉がある。拡張前は、直徑10～18cm・深さ31～40cmの4本柱（P 3～6）で、中央に掘り込み炉（B）を持つ。この時の掘形は東西3.44m・南北3.4～3.6m程の規模である。構築初期の主柱穴は南北方向で、直徑18～26cm・深さ44～62cmの2本（P 7・8）であり、中央やや東寄りに掘り込み炉（C）を有する。この時の住居の掘形は、南北3.0m・東西3.2m程と推定される。

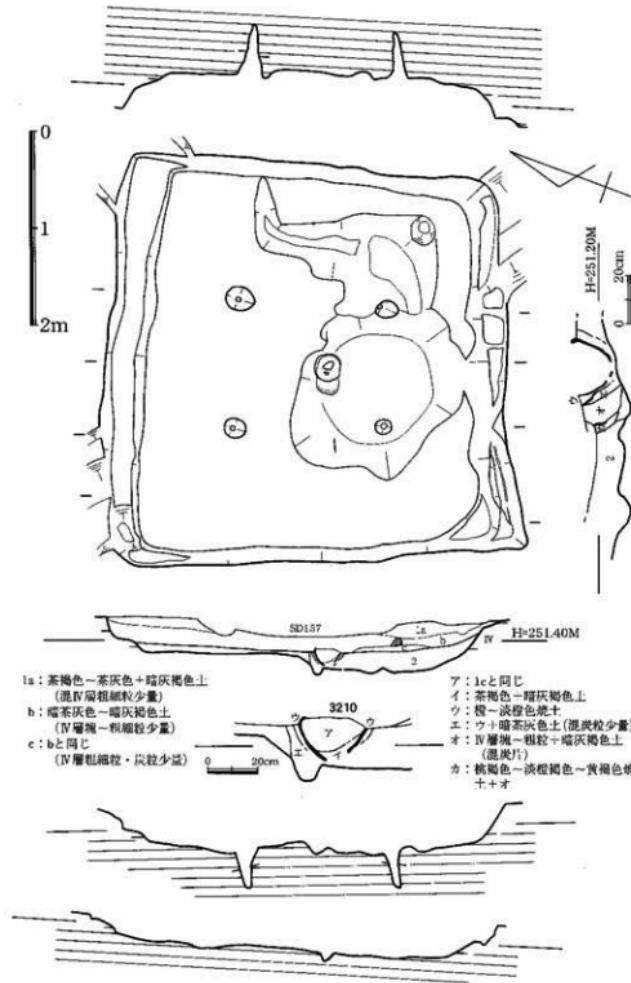
覆土から、土師器片493点のほか、須恵器片13点、鉄鎌2点、鉄床石1点（3166）、台石2点などが出土し、a・b層に分けているが、時期差は無い。2層からも土師器片33点が出土しているが、3168の壺片と3169の甕片が覆土出土片と接合していることから、この2点の土器は、当住居とは直接関係するものではない。3166の左中央下寄りには、弾け飛んだ剥片が接合している。3135～3137・3156・3162の土器は被熱している。須恵器の蓋（3140）は、139号住居出土品と接合している。6世紀後半である。



第311図 S A-138 遺構実測図

S A-137 (第310図)

近現代の削失と天地返しによって、平面形態の把握が困難であったが、南北5.8m・東西4.0mの隅円長方形を呈する住居であることが判明した。覆土は3~8cm遺存し、土層的には15~20cmの削失が推定される。主柱穴は、直径60~65cm・深さ66・91cmの2本柱である。その中央南寄りには口縁部~胴部上半を打ち欠いた甕(3177)を使用した土器埋設炉がある。東辺中央には、幅64cm・奥行き30cmの半円形の突出部があり、出入口の可能性が高い。



第312図 S A-139 遺構実測図 アミ目は焼土

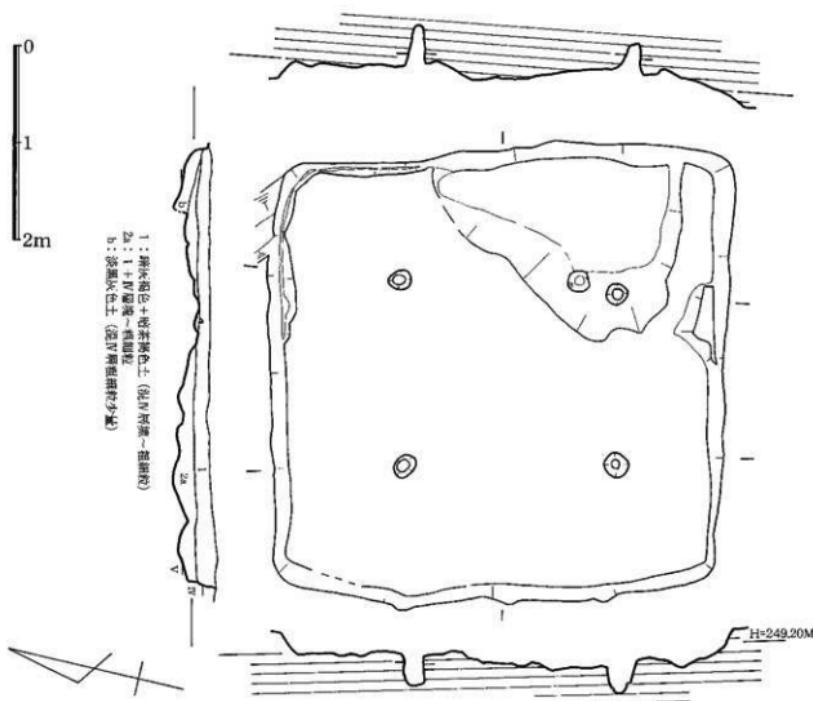
覆土から、土師器片503点のほか須恵器片13点、用途不明鉄器片（3198）、砥石（3199）等が、2層から土師器片21点が出土している。6世紀後半である。

#### S A-138（第311図）

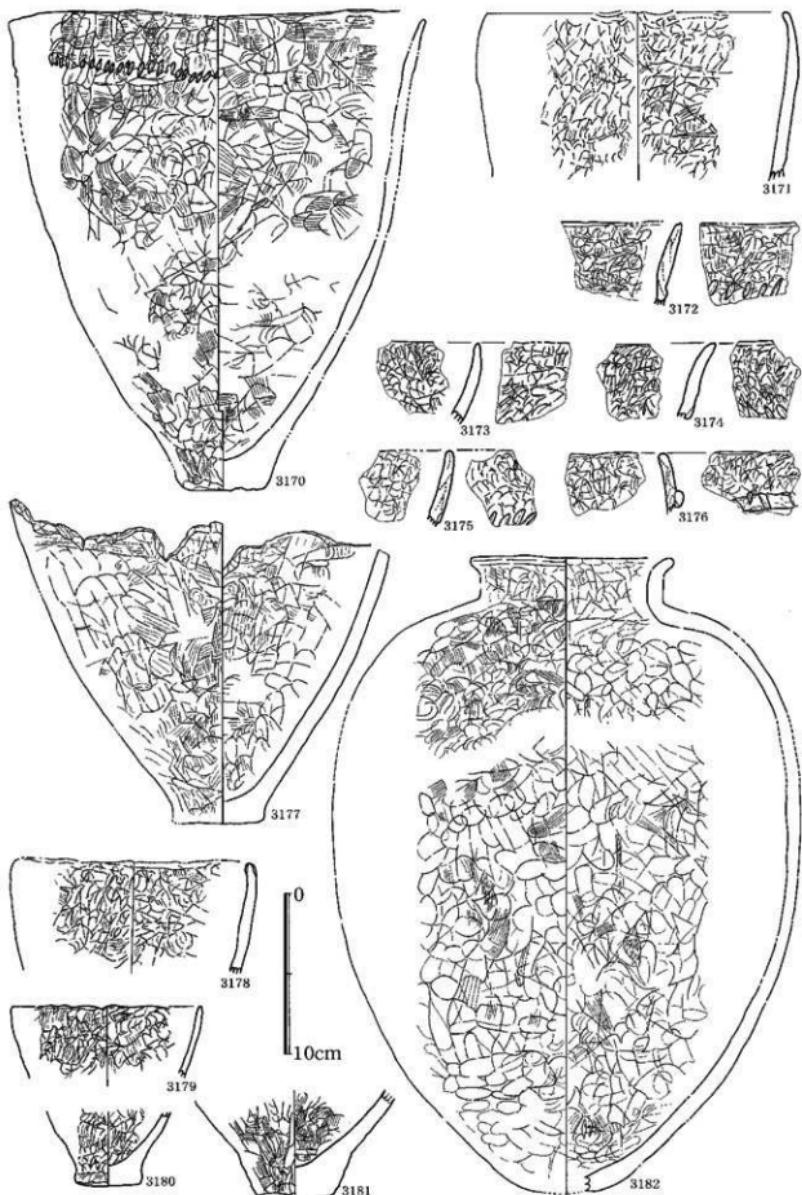
131号と137号住居の中間西寄りに位置し、天地返しされた搅乱層下に位置しており、覆土との差異が不明瞭であったことから、10cm程、重機で削り過ぎた。東西3.2~3.67m・南北3.7~3.73mの隅円方形を呈する住居で、南辺が短い。覆土は3~11cm遺存し、土層的には70cm程削失が推定され、深い住居であったようだ。床面は、北半中部のみ1段（7cm）下がる。

中央には、長径40cm・短径29cm・深さ53cmの主柱穴1基がある。その北側に、口縁部を打ち欠いた甕（3200）を使用した土器埋設炉がある。

覆土から、土師器片11点と須恵器片1点が、2層から土師器片15点が出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀後半である。



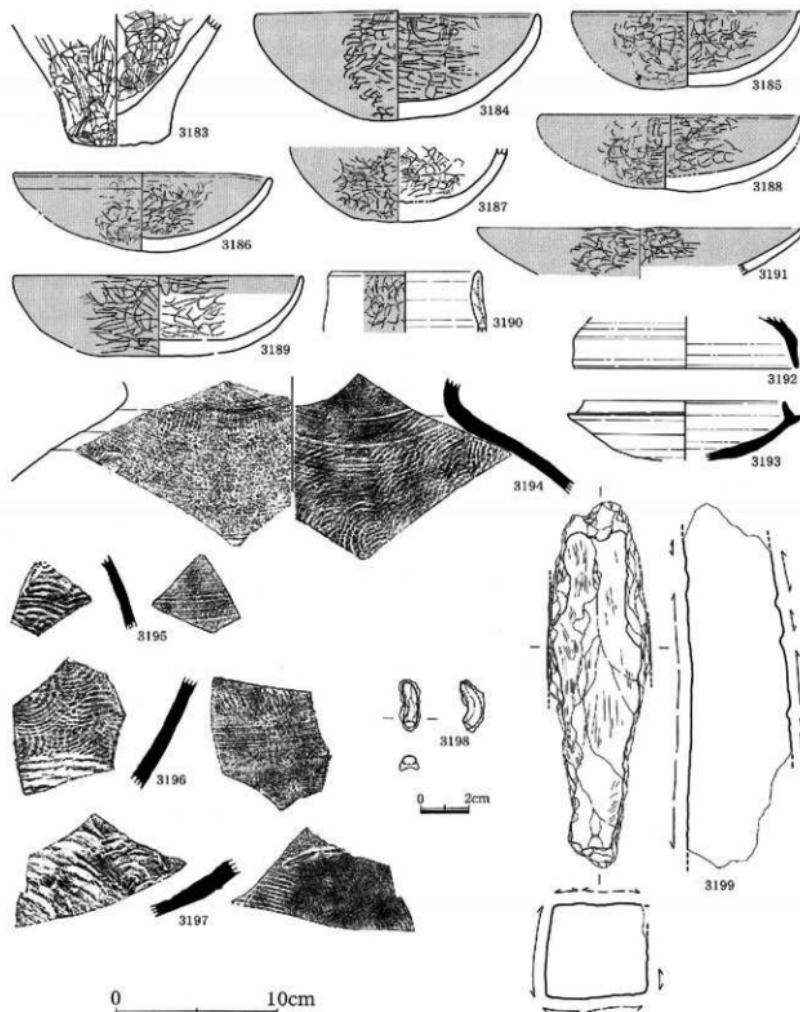
第313図 S A-140 遺構実測図



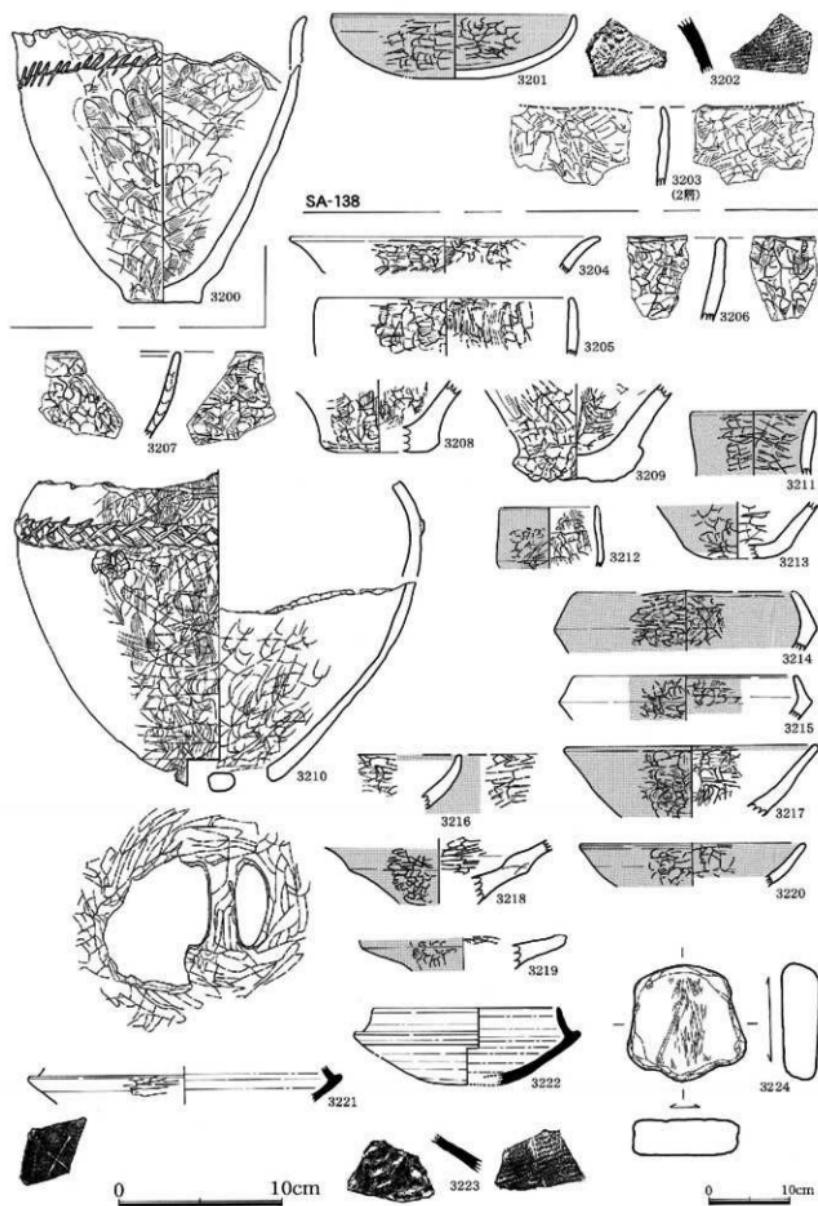
第314図 S A-137 出土遺物実測図(1)

S A-139 (第312図)

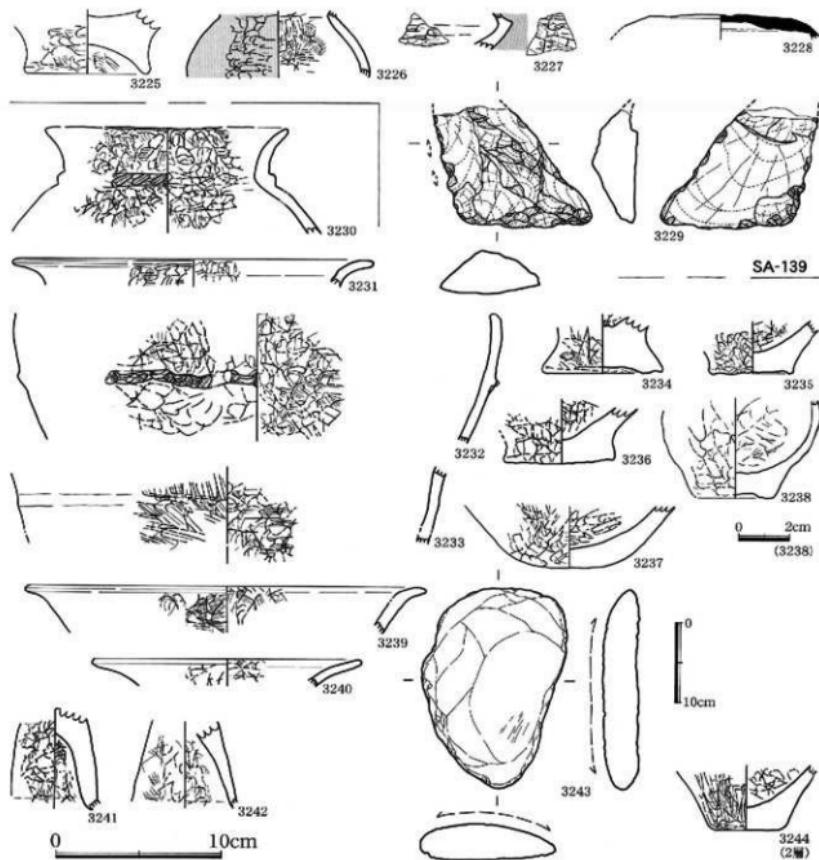
157・158号溝に切られていたが、浅い削失であった。南北3.8~4.13m・東西3.8~4.18mの不整方形を呈する住居である。覆土は16~27cm遺存し、掘形の削失は無い。主柱穴は、直径20~30cm・



第315図 S A-137 出土遺物実測図(2)



第316図 S A-138・139 出土遺物実測図(1)



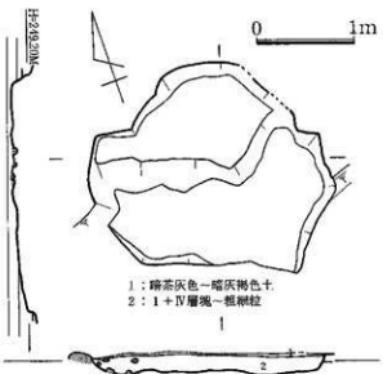
第317図 SA-139 出土遺物実測図(2), SA-140 出土遺物実測図

深さ40~53cmの4本柱で、南辺が短い長方形（住居の掘形に相似）に配置されている。中央やや南東寄りには、口唇部を打ち欠いた双孔タイプの瓶（3210）を使用した土器埋設炉がある。炉の西側には直径24cmの焼土が広がり（カ層）、初期の掘り込み炉（第1次炉）があったようである。貼り床は3~23cmの厚さで、ほぼ水平に施されている。

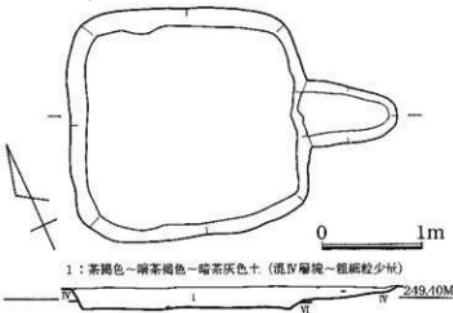
覆土から、土師器片1230点のほか、須恵器片12点等が、2層から土師器片65点と須恵器片2点が出土している。6世紀後半である。

#### SA-140 (第313図)

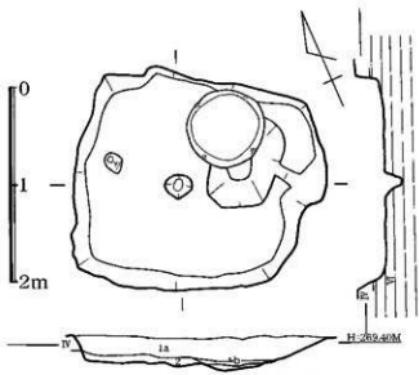
XIV区の北縁に位置した、東西4.4~4.74m・南北4.4~4.64mの隅円方形を呈する住居である。



第318図 S A-141 遺構実測図



第319図 S A-142 遺構実測図



第320図 S A-143 遺構実測図

覆土は10~21cm遺存し、削失は殆ど無い。主柱穴は、直徑18~25cm・深さ30~44cmの4本である。炉は確認されず、壁溝は北東部のみ明瞭であった。

覆土から、土師器片338点と台石1点が、2層から土師器片63点が出土しているが、図化できたのは少ない。4世紀後半~5世紀前半か。

#### S A-141 (第318図)

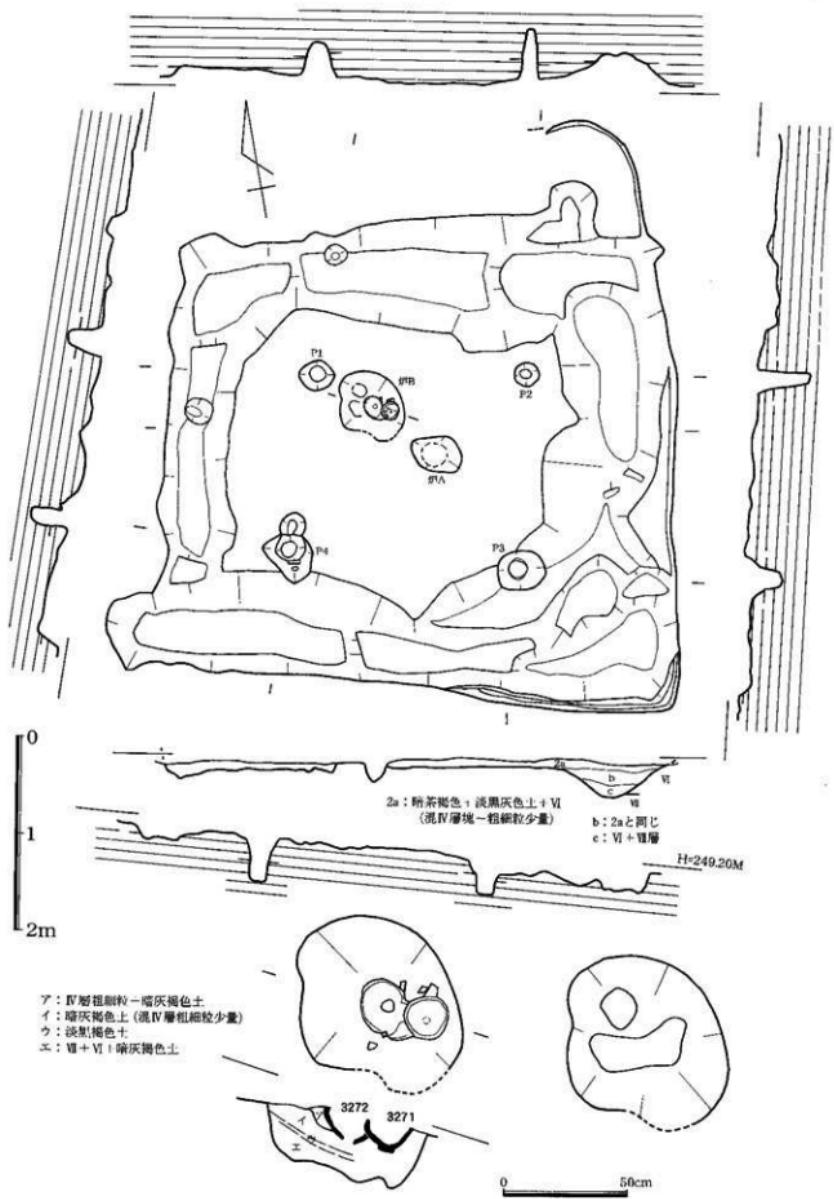
142号溝に切られた、長さ2m程の不整形の土坑状を呈する遺構である。覆土は2~4cm遺存し、2層は13~19cmの厚さがある。土層的には、20~30cmの削失が推定される。2層はやや縮まり、上面が水平であることから貼り床であると判断したが、主柱穴や炉・壁溝は遺構内外では検出できていない。本来は数m四方であったと想定される。

覆土から、土師器片12点が、2層から6点が出土しているが、図化できたのは僅か3点である。5世紀代か。

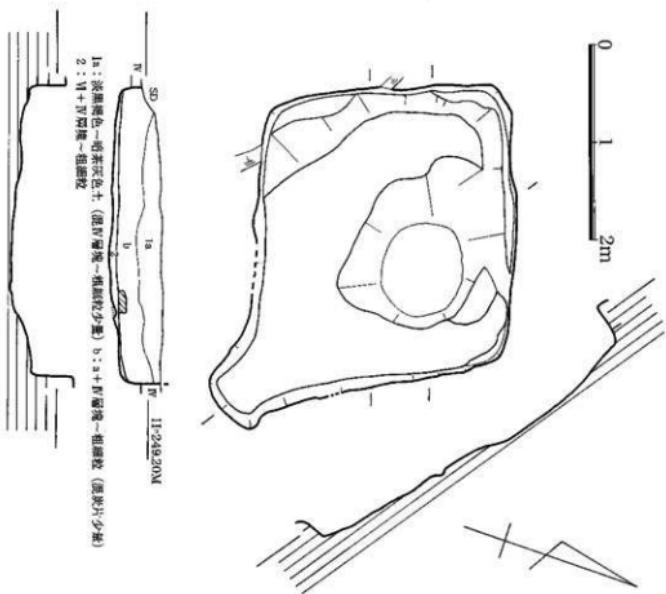
#### S A-142 (第319図)

III区との堀付近、115号住居の2.6m南に位置した、南北2~2.36m・東西2.26~2.46mの隅円方形の東辺中央に、長さ90cm・最大幅68cmの突出部が伴う。床面はスロープになり、住居内とは9cmの段がある。覆土は20~22cm遺存し、土層的には25cm程の削失が推定される。主柱穴や壁溝・貼り床は無く、形態のみでの判断である。

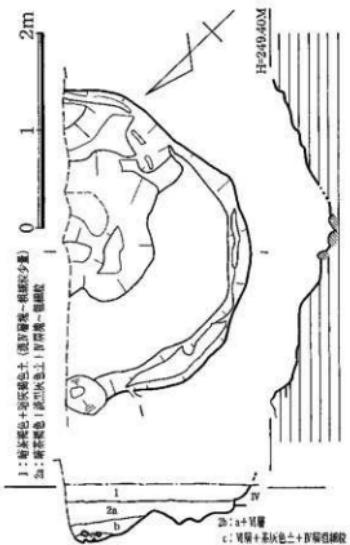
覆土から、土師器片452点と須恵器



第321図 SA-144 遺構実測図



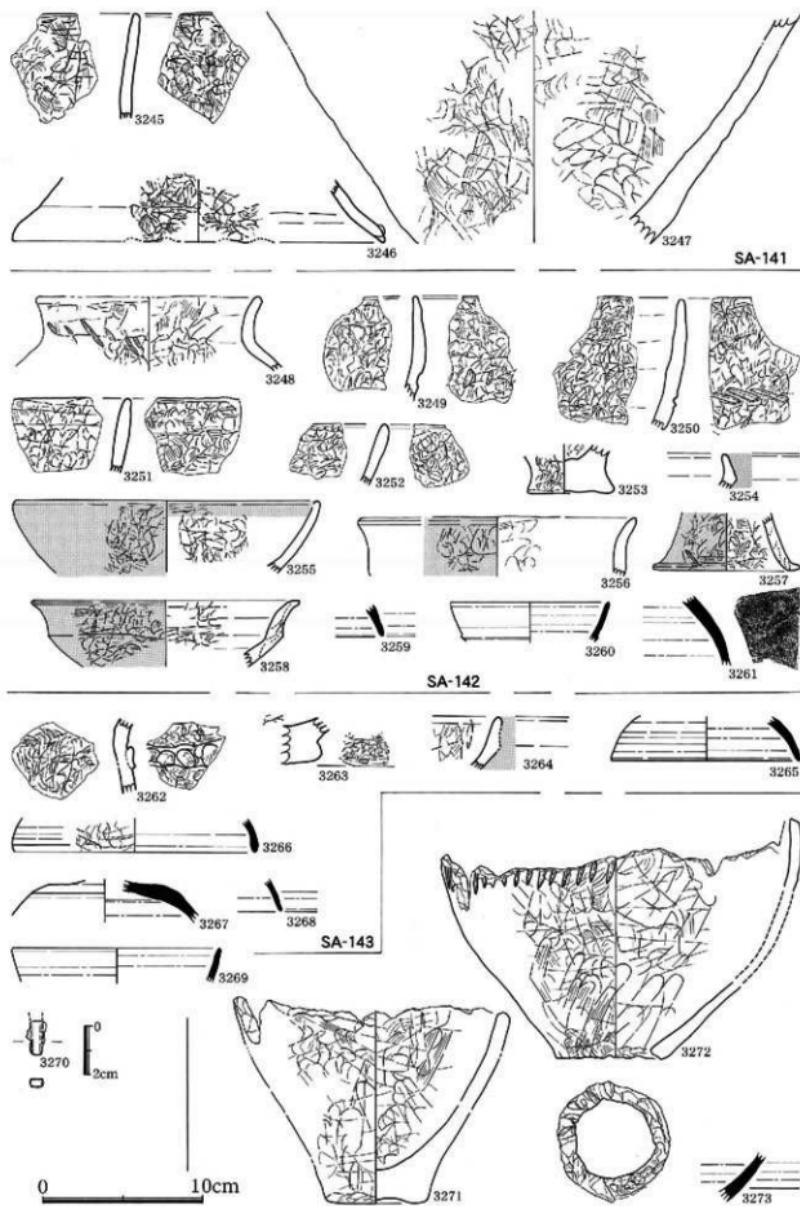
第322図 SA-145 造構実測図



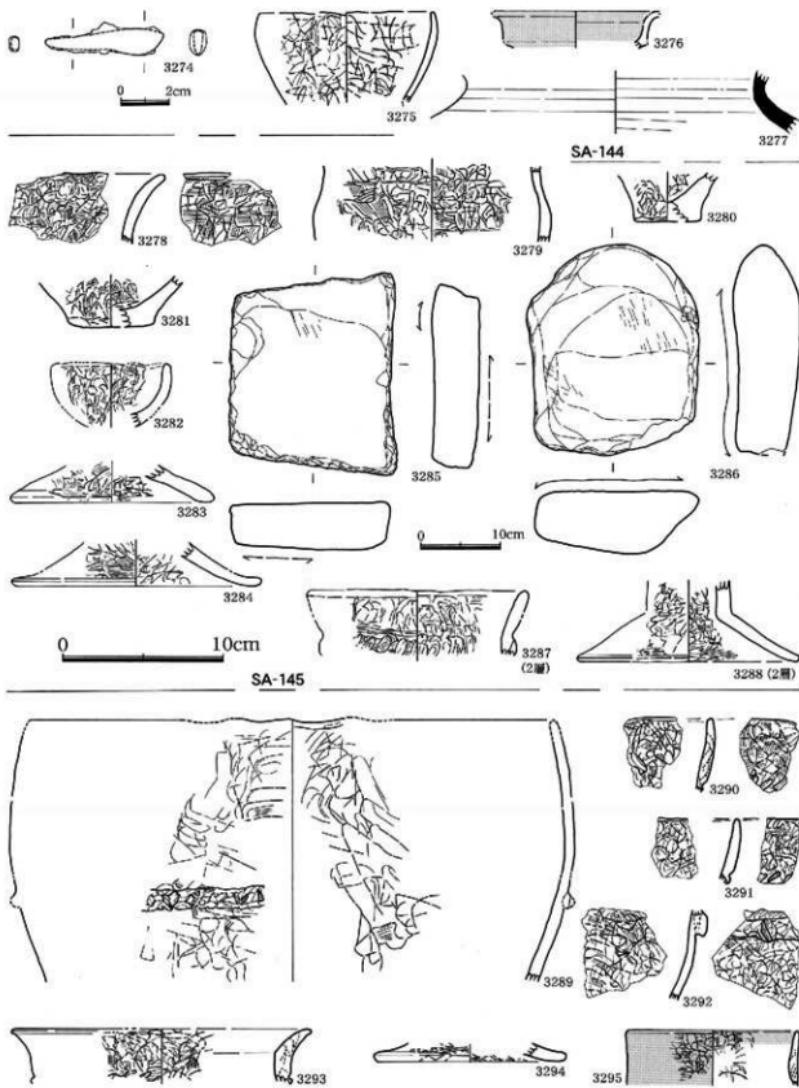
第323図 SA-146 造構実測図



第324図 SA-147 造構実測図



第325図 SA-141~144 出土遺物実測図(1)

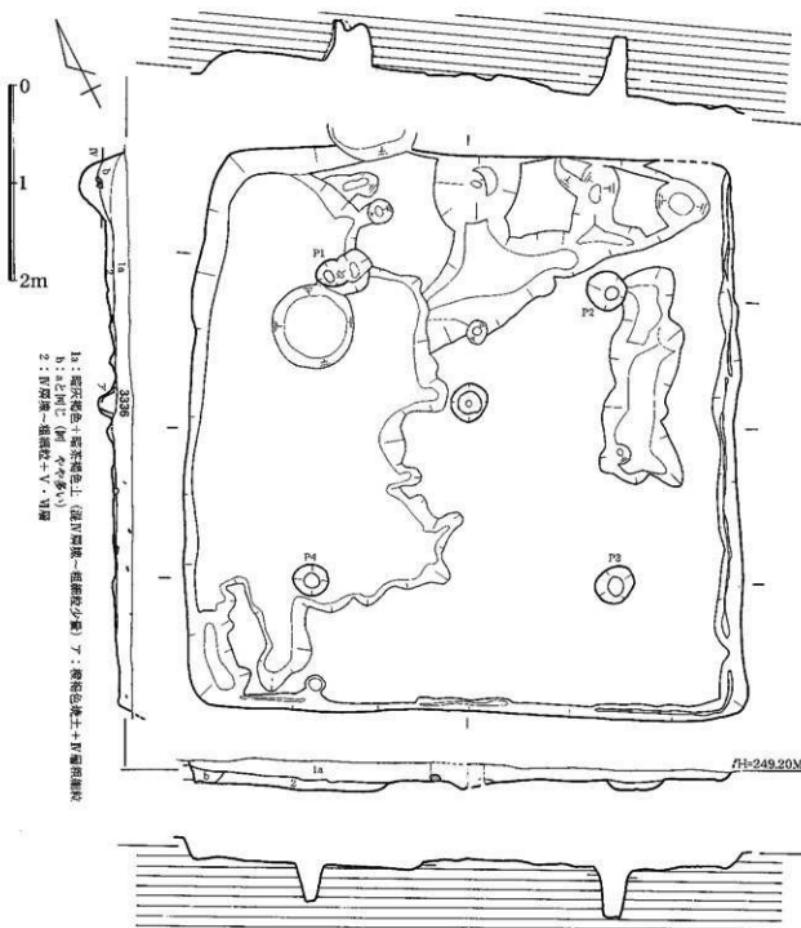


第326図 SA-144 出土遺物実測図(2), SA-145-147 出土遺物実測図

片9点が出土しているが、図化できたのは少ない。6世紀後半である。

#### S A-143 (第320図)

142号住居と2.2m隔てた南側に位置した、東西2.2~2.5m・南北1.9~2.26mの、歪つな長方形を呈する。覆土は20~25cm遺存し、土層的には20cm程度の削失が推定される。東壁中央は、緩やかなスロープ状になっており、最大幅50cmの、142号住居に似たスロープ（出入口）が付設していた



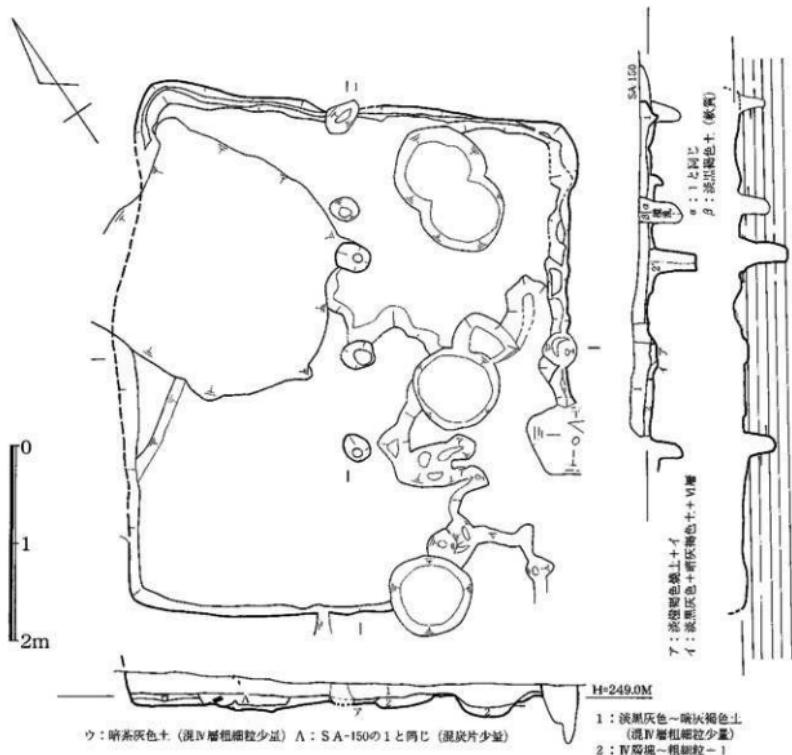
第327図 S A-148 遺構実測図

可能性が高い。中央やや西寄りには、長径38cm・短径24cm・深さ17cmのpitがあり、主柱穴と思われる。その北東部には、長径98cm・短径64cm・深さ10cm（下半分には貼り床）の土坑が伴う。

覆土から、土師器片278点のほか、須恵器片8点、鉄鎌片1点（3270）が出土しているが、図化できた土器は7点である。6世紀後半である。

#### S A-144 (第321図)

Ⅴ区の北西中央部、広範囲に天地返しされた所で検出した、東西5.8m以上、南北6.06mの方形と推定される住居である。覆土の殆どは削失し、南東隅に形状の痕跡を残す。主柱穴は、直径25~48cm・深さ34~54cmの4本（P 1~4）で、南西の柱穴には柱抜き取り穴が北側に付く。4本柱の中央やや東寄りには、長径54cm・短径38cm・深さ8cmの炭粒混じりの掘り込みが（A、初期）がある。柱穴P 1との間には、埋設土器が重複するがBがある。口縁部～胴部上半を打ち欠いた甕（3271）



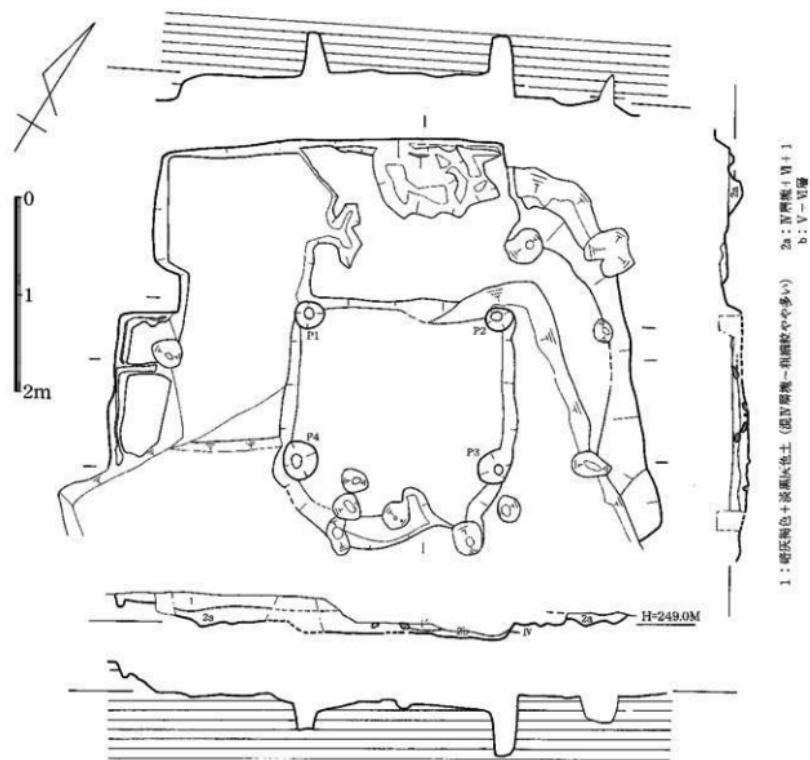
第328図 S A-149 遺構実測図

を使用したのが新段階で、口縁部を打ち欠いた甌（3272）を使用したのが古段階であり、後者の一部が潰されている。主柱穴から壁にかけては溝状に掘り返され、貼り床が施されている。

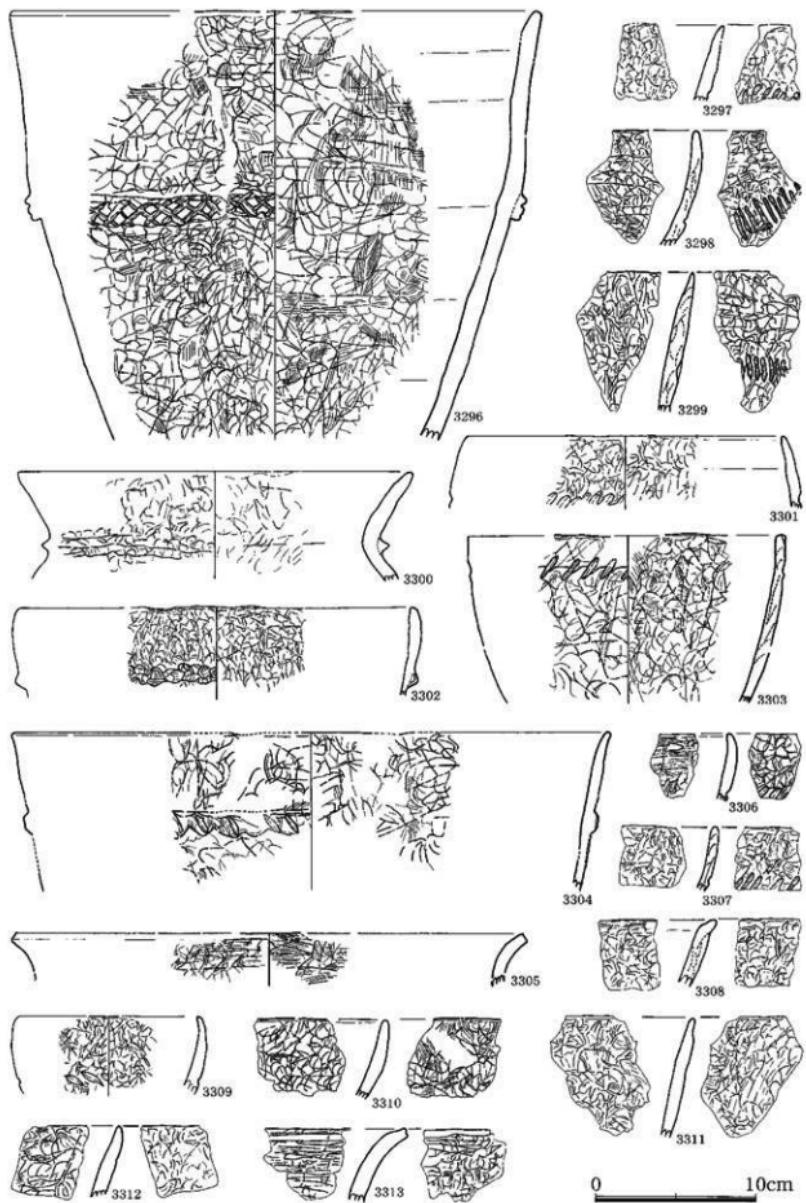
覆土から土師器片2点、2層から土師器片62点のほか須恵器片4点、鉄製刀子1点（3274）が出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀後半である。

#### S A-145 (第322図)

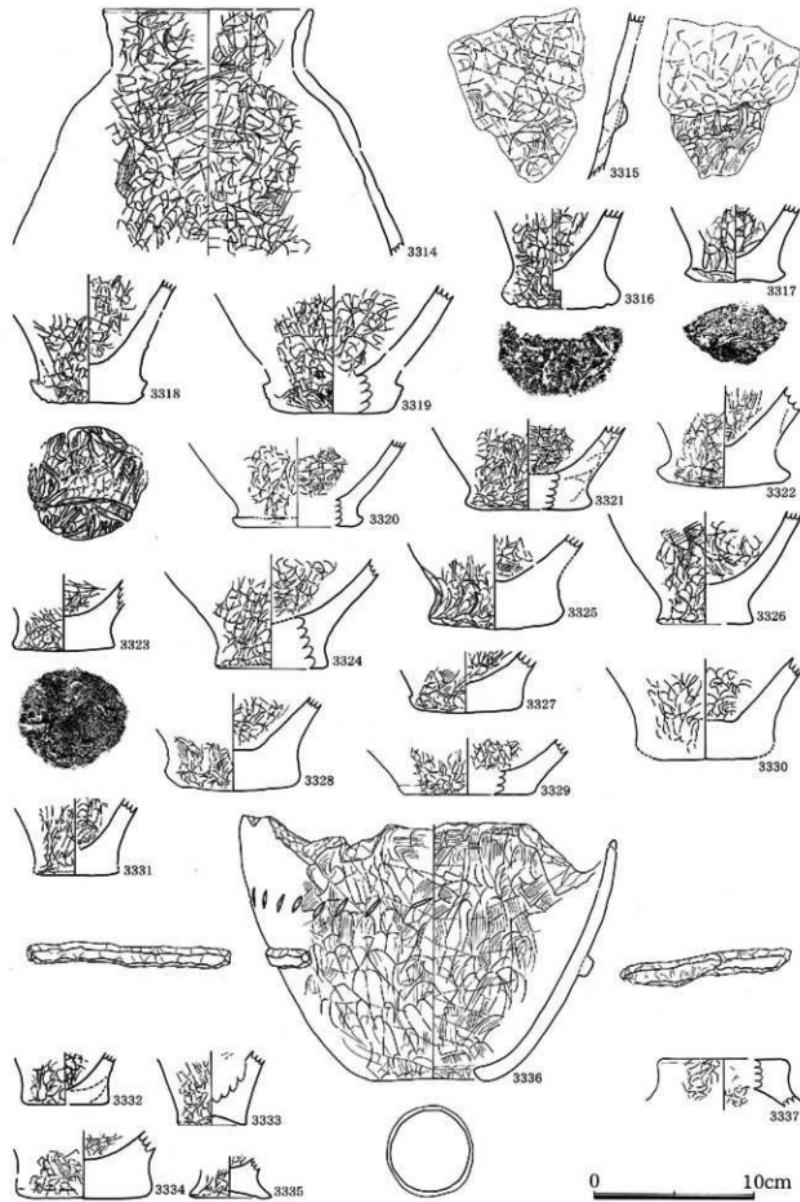
142号溝に南西部を切られていたが、削失は僅かである。長さ2.9～3.1m・幅2.5～2.6mの隅円長方形の南東隅に、幅70cm～1m・奥行き70cm程の突出部が付く。当突出部は別遺構の可能性を指定（平面では分別できず）したことから切り合いを確認したが、住居内と同時期に埋まり、底面はスロープ状に外方へ上昇することから、出入口であろうと思われる。方形住居の隅に出入口を付設



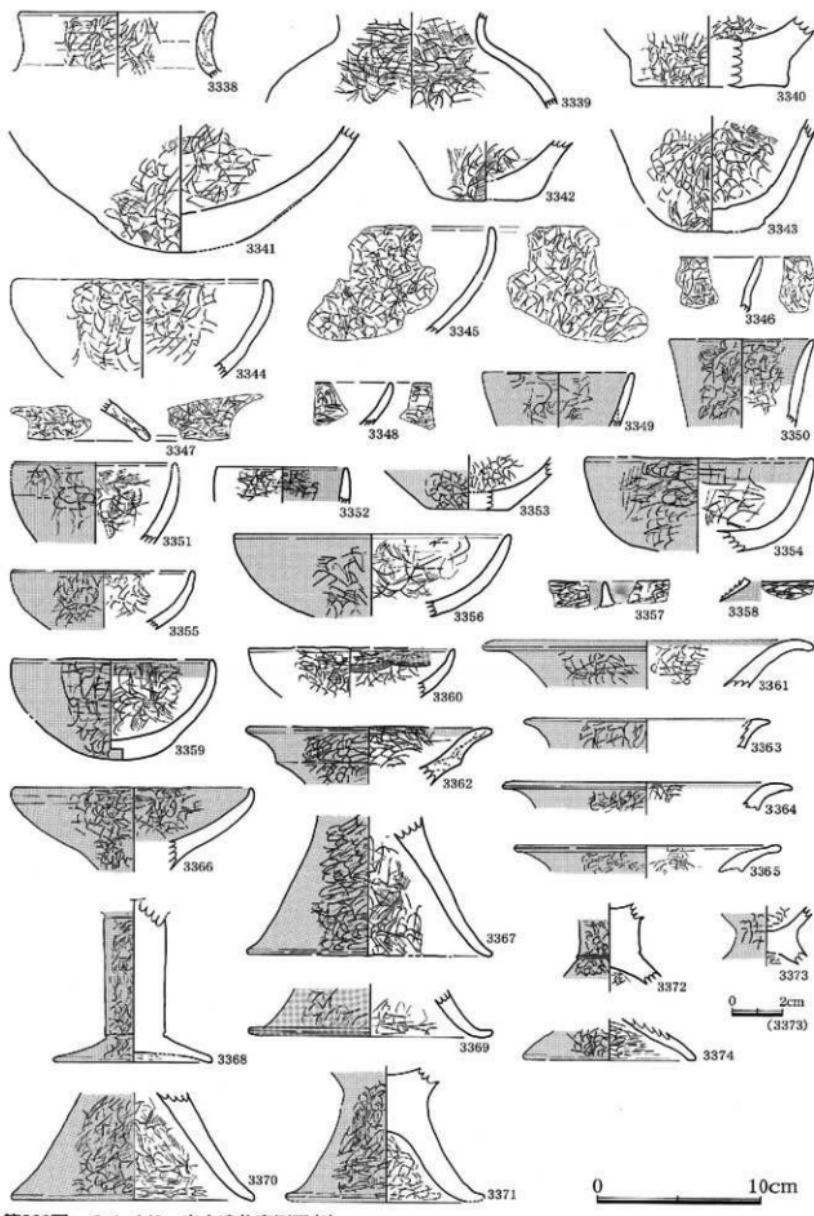
第329図 S A-150 遺構実測図



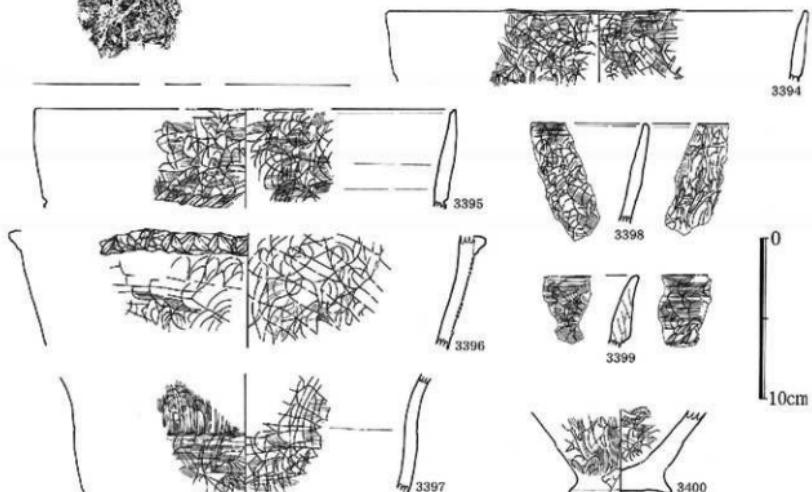
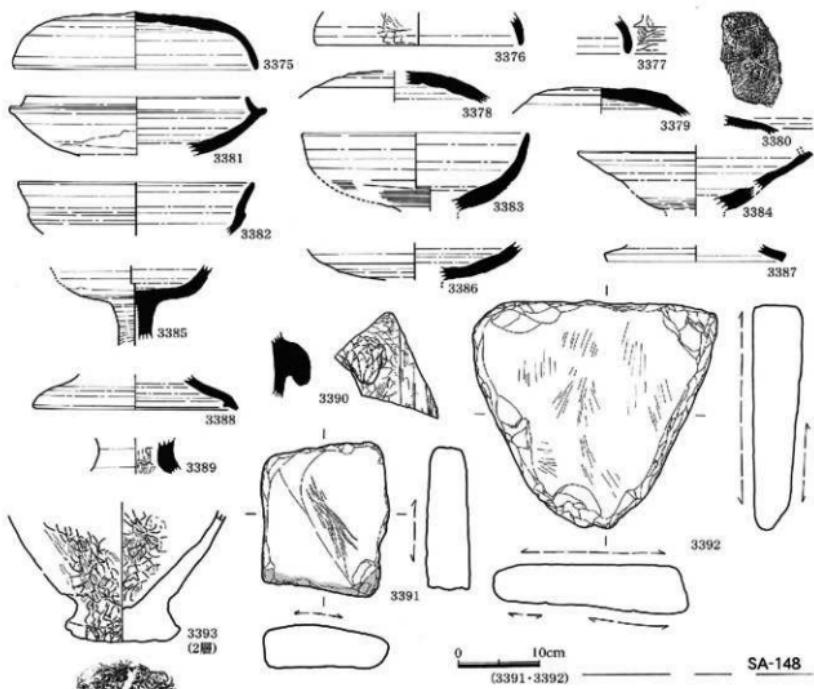
第330図 S A-148 出土遺物実測図(1)



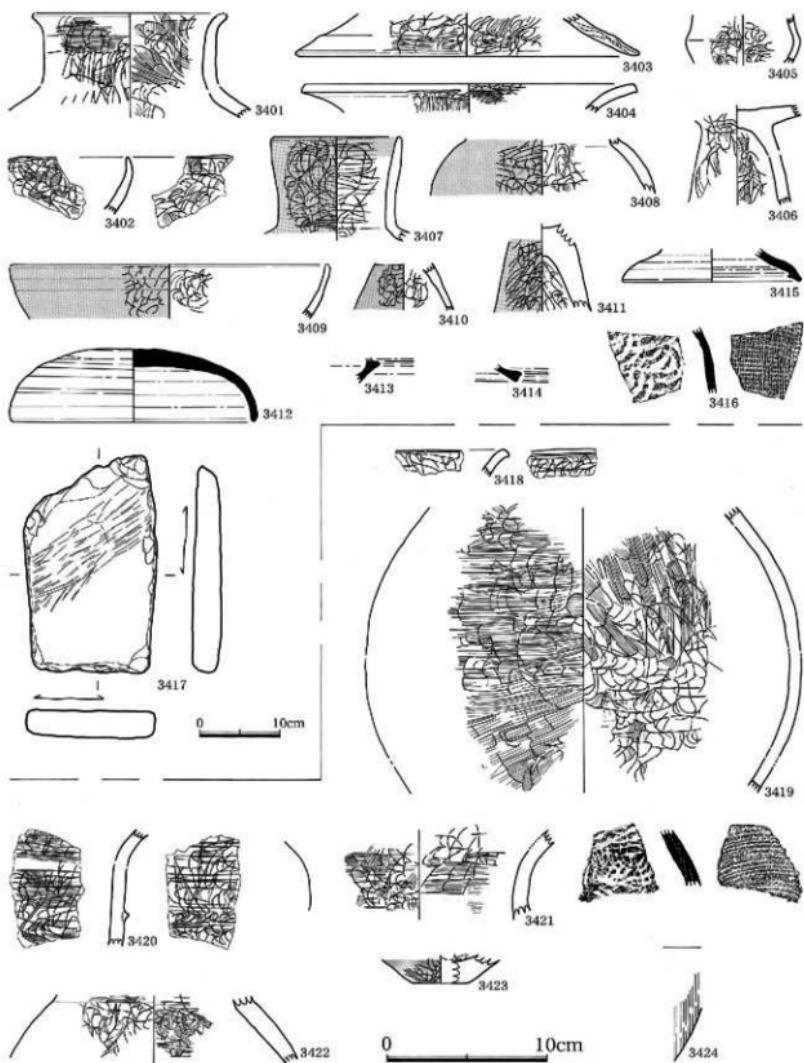
第331図 SA-148 出土遺物実測図(2)



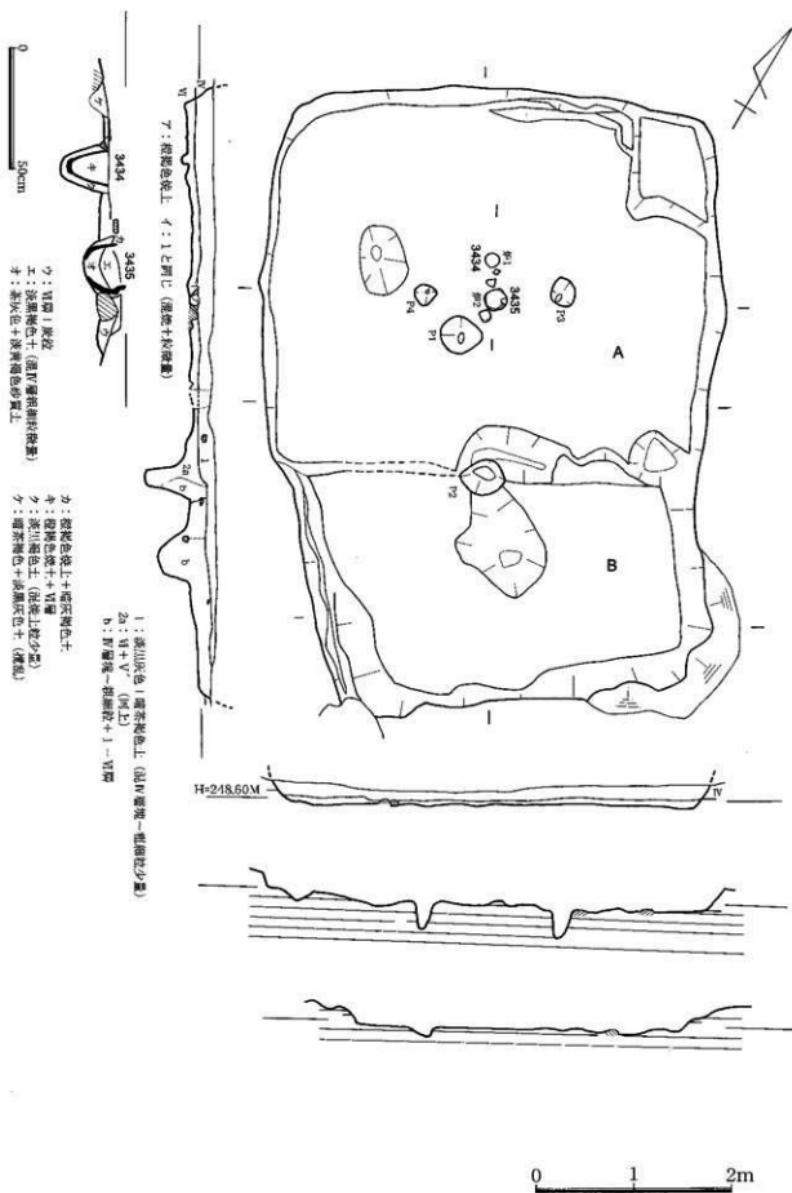
第332図 SA-148 出土遺物実測図(3)



第333図 SA-148 出土遺物実測図(4), SA-149 出土遺物実測図(1)



第334図 S A-149 出土遺物実測図(2), S A-150 出土遺物実測図



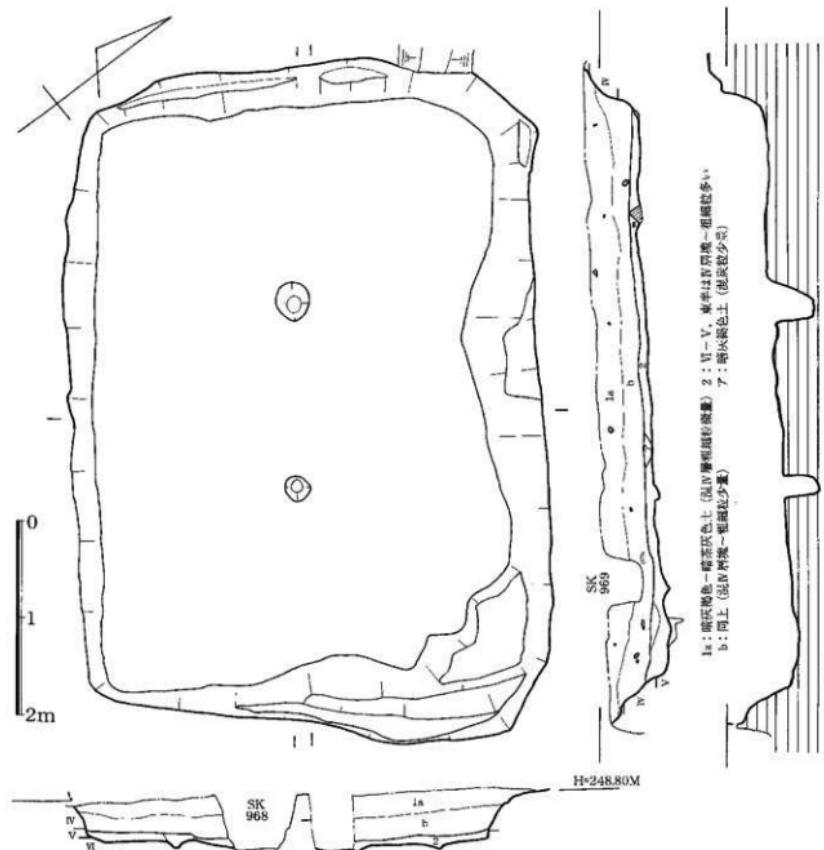
第335図 SA-151 遺構実測図

するタイプは、本市初である。主柱穴や炉・壁溝は確認されなかったが、水平に施された貼り床があることから、住居と断定した。覆土は38~45cm遺存し、土層的には20cm程の削失が推定される深めの住居である。

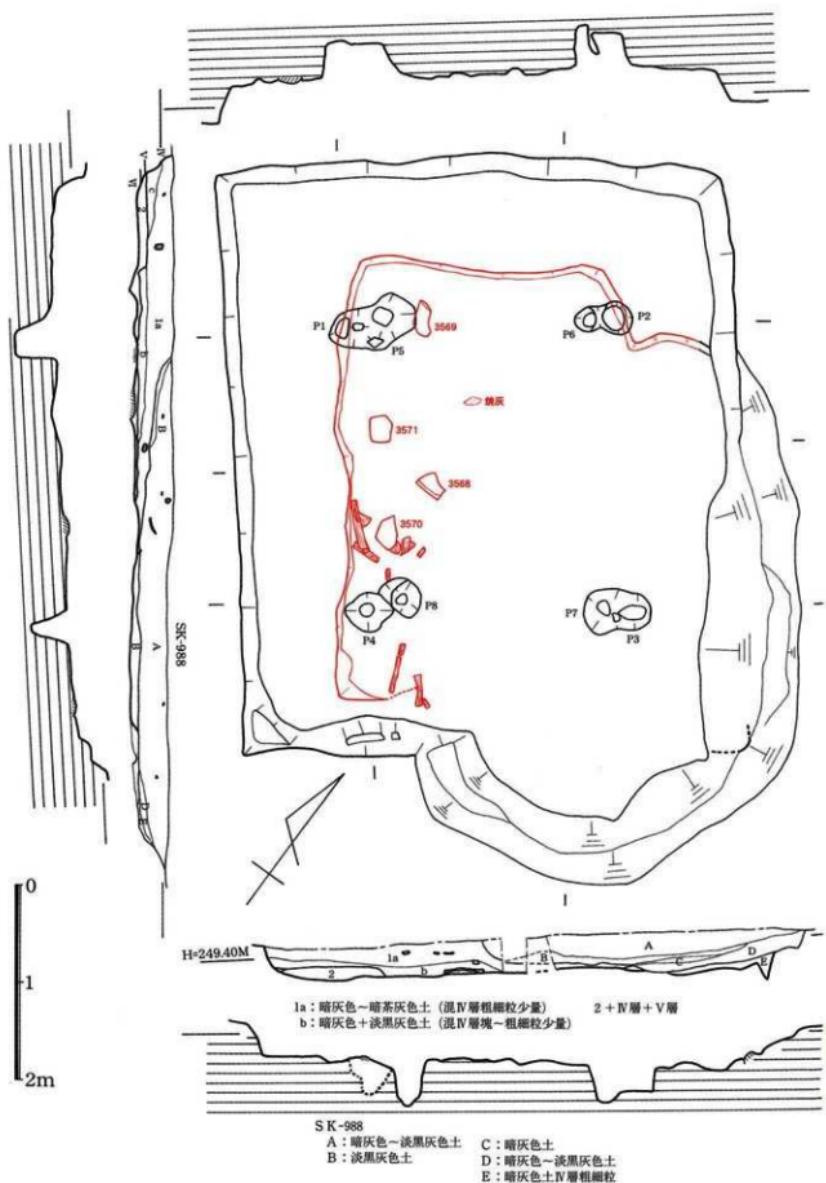
覆土から、土師器片207点と台石2点が、2層から土師器片11点が出土したが、図化できたのは少ない。4世紀後半~5世紀前半か。

#### S A-146 (第323図)

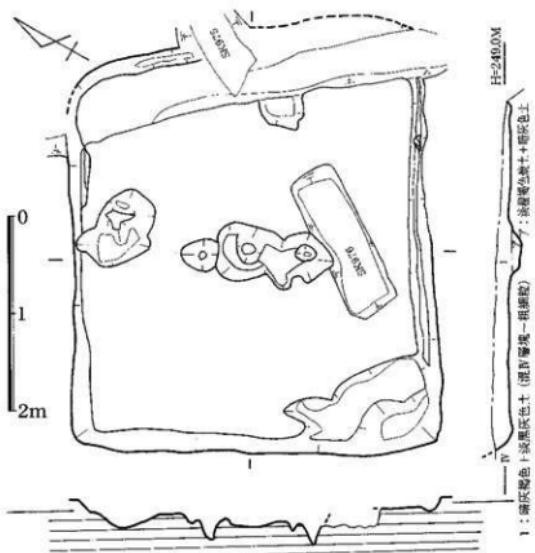
145号住居の2m北に位置し、半分を道路の擁壁基礎によって削失した、直径3.2m程の円形を呈する。覆土は17cm遺存し、土層的には15cm程の削失が推定される。2層は12~42cmの厚さがあるが



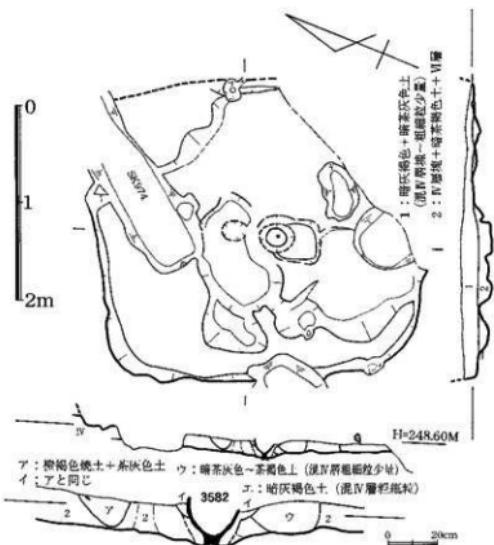
第336図 S A-152 遺構実測図



第337図 SA-153 遺構実測図 赤色は床面と台石・炭化材



第338図 SA-154 造構実測図



第339図 SA-155 造構実測図

上面がやや締まっていることから、貼り床と判断した。主柱穴と炉は検出していない。

覆土から、弥生終末前後の土器片27点が出土したが、図化に耐えない。

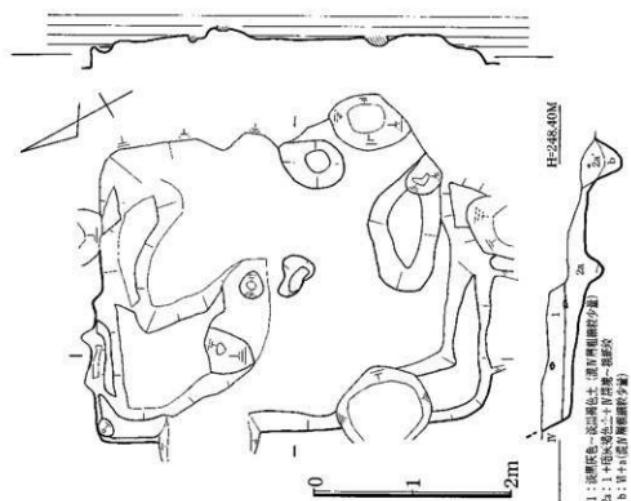
#### SA-147 (第324図)

146号住居の北西に接するが、明瞭な切り合いは無い。長さ3.4m以上・幅2.7m以上の方形もしくは長方形を呈する住居である。覆土は11~13cm遺存し、土層的には15cm程の削失が推定される。主柱穴や炉・塙溝は検出されず、貼り床も無い。規則的要因のみで住居に含めている。

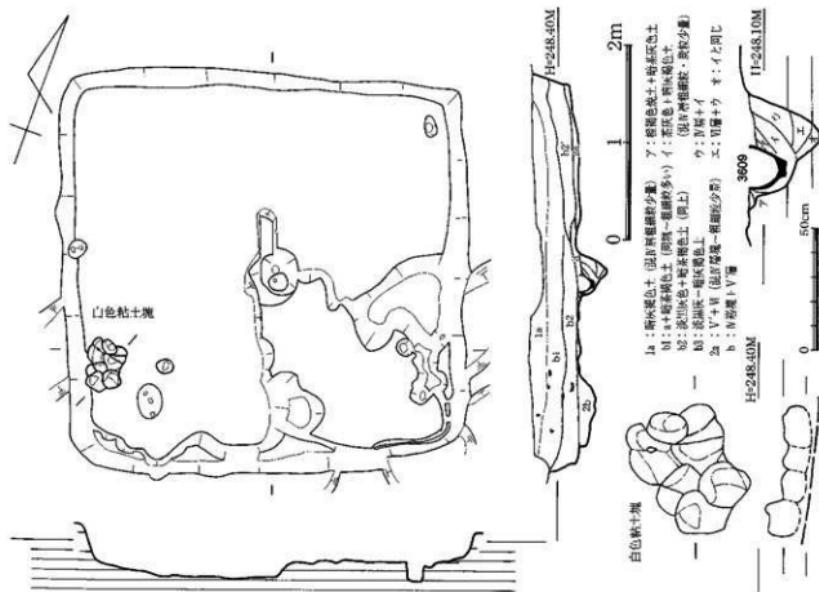
覆土から、土師器片239点と須恵器片1点が出土しているが、図化できたのは7点である。6世紀代か。

#### SA-148 (第327図)

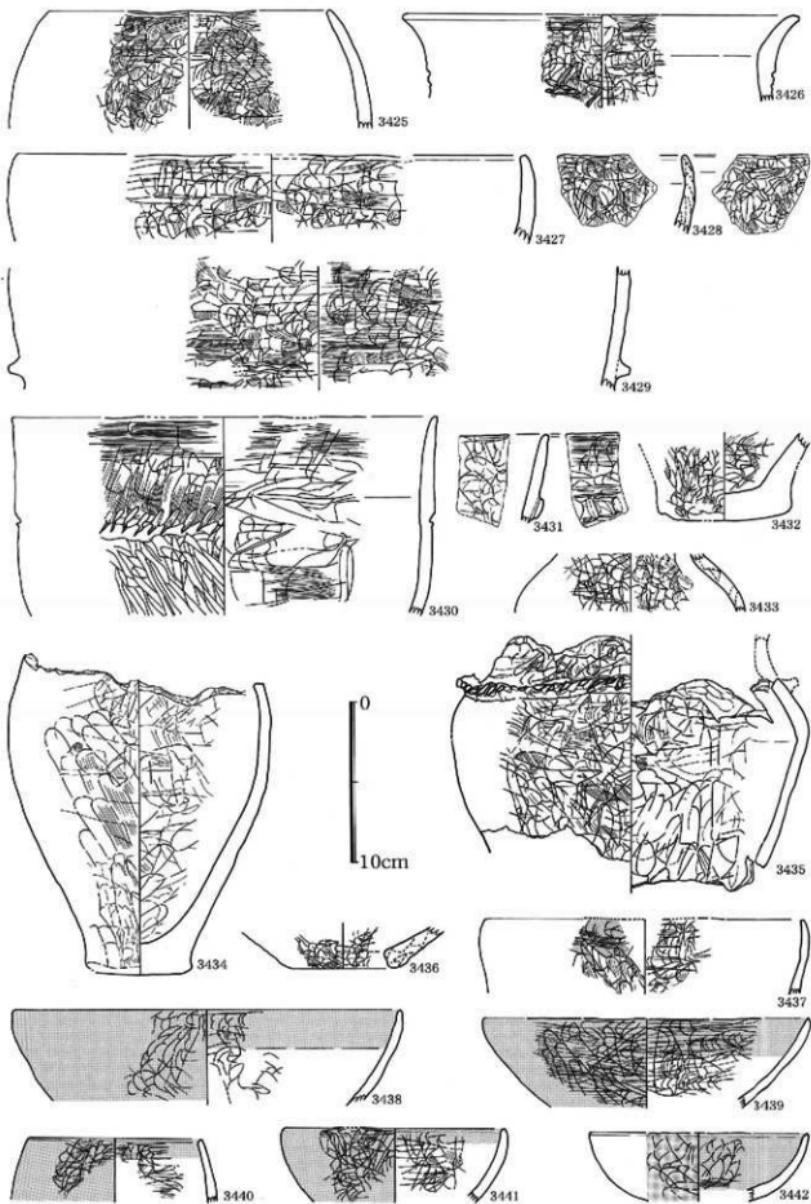
149号住居を切る、長さ5.74m・幅5.2~5.72mの、北東辺がやや短い隅円台形を呈する。覆土は8~20cm遺存し、土層的には15cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径30~40cm・深さ40~60cmの4本(P1~4)で、柱間は2.9~3.1mと広い。P1~2間が少し狭いのは、住居の掘形に相似する。中央や北東寄りには、口唇を打ち欠いた



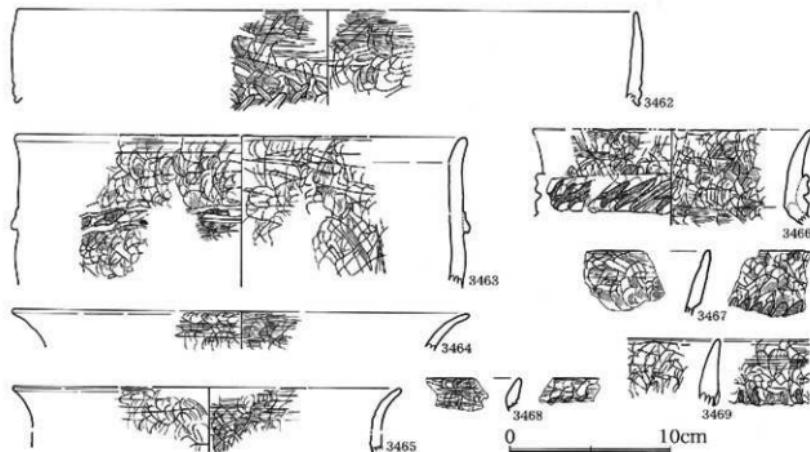
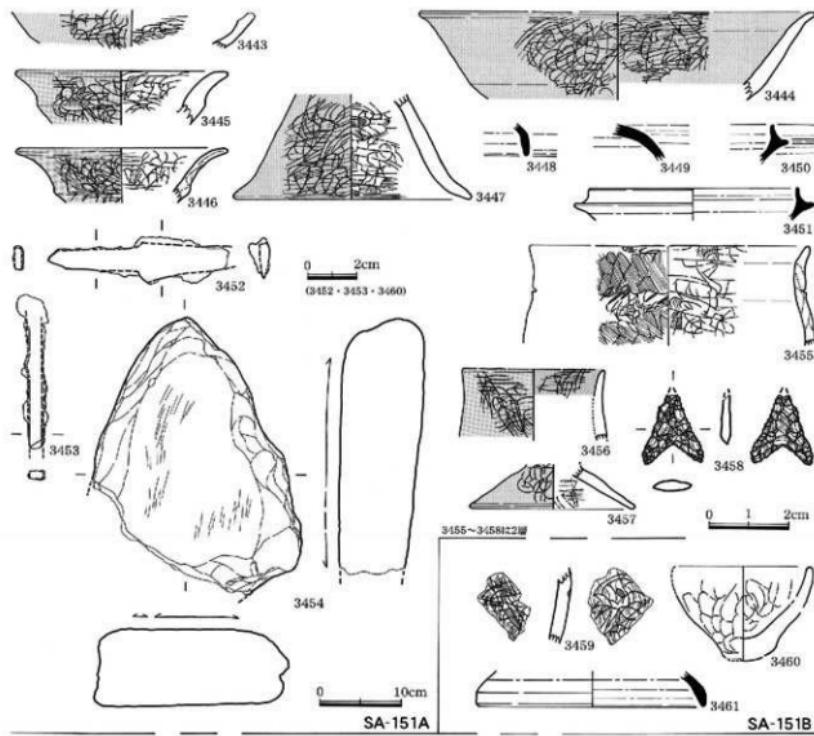
第340図 SA-156 遺構実測図



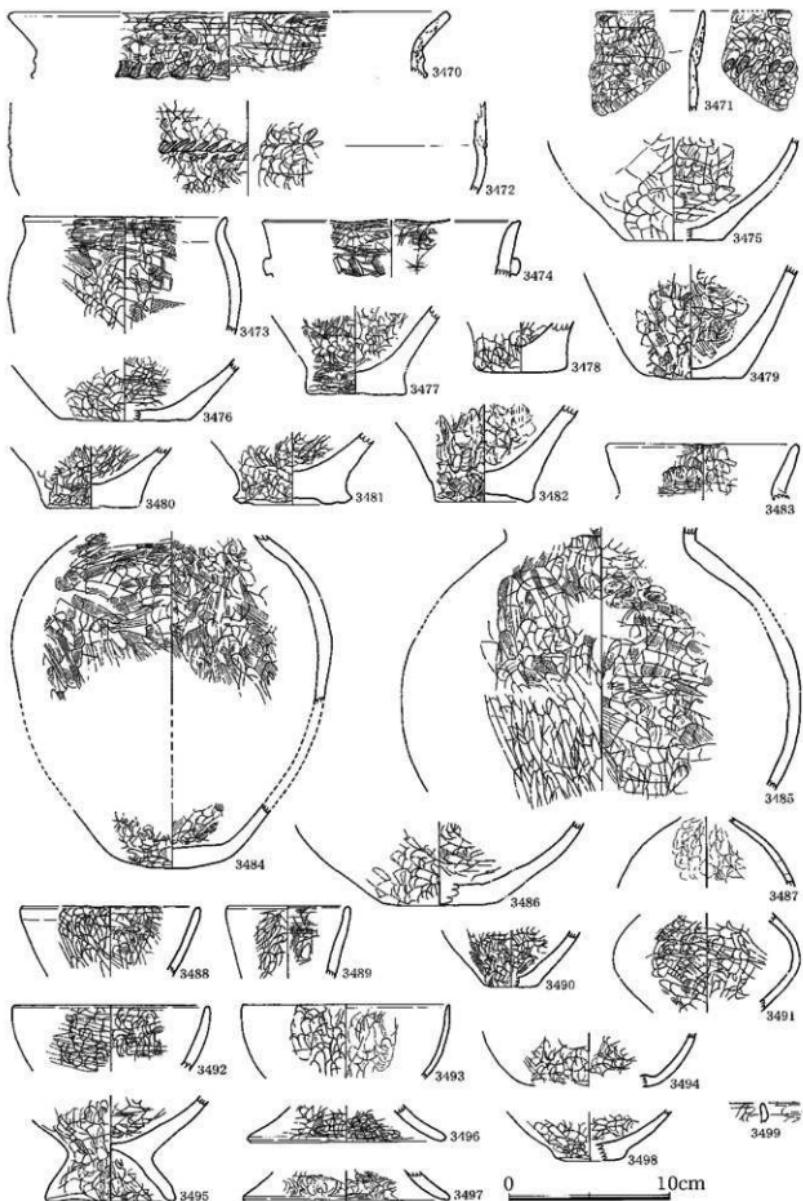
第341図 SA-157 遺構実測図



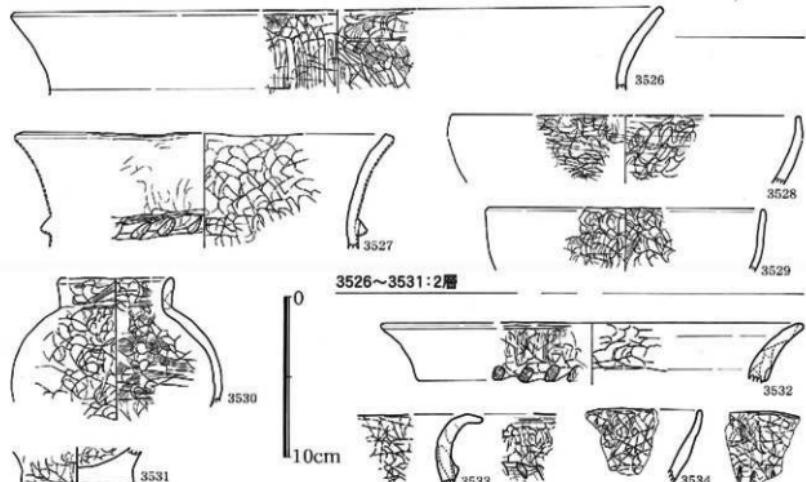
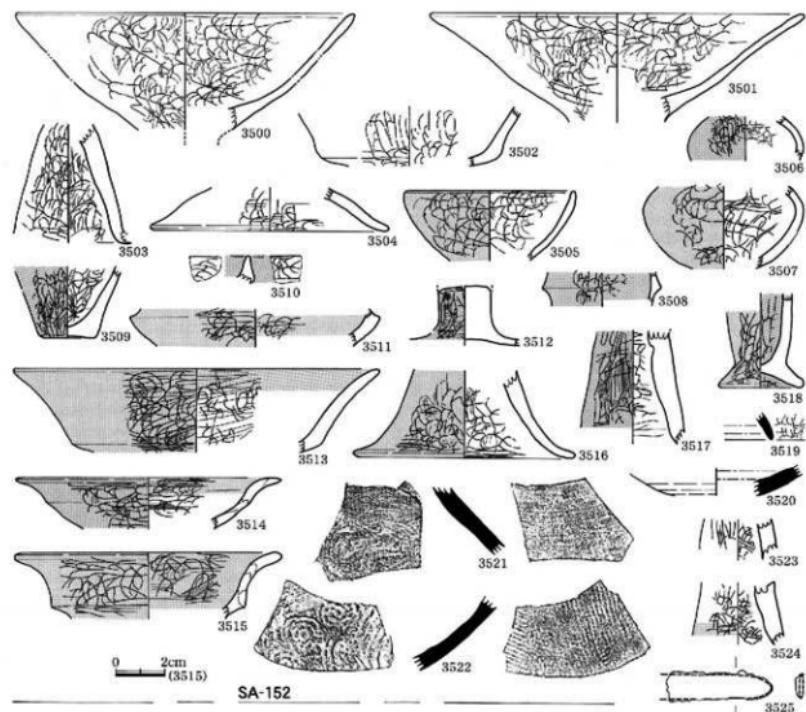
第342図 S A-151 出土遺物実測図(1)



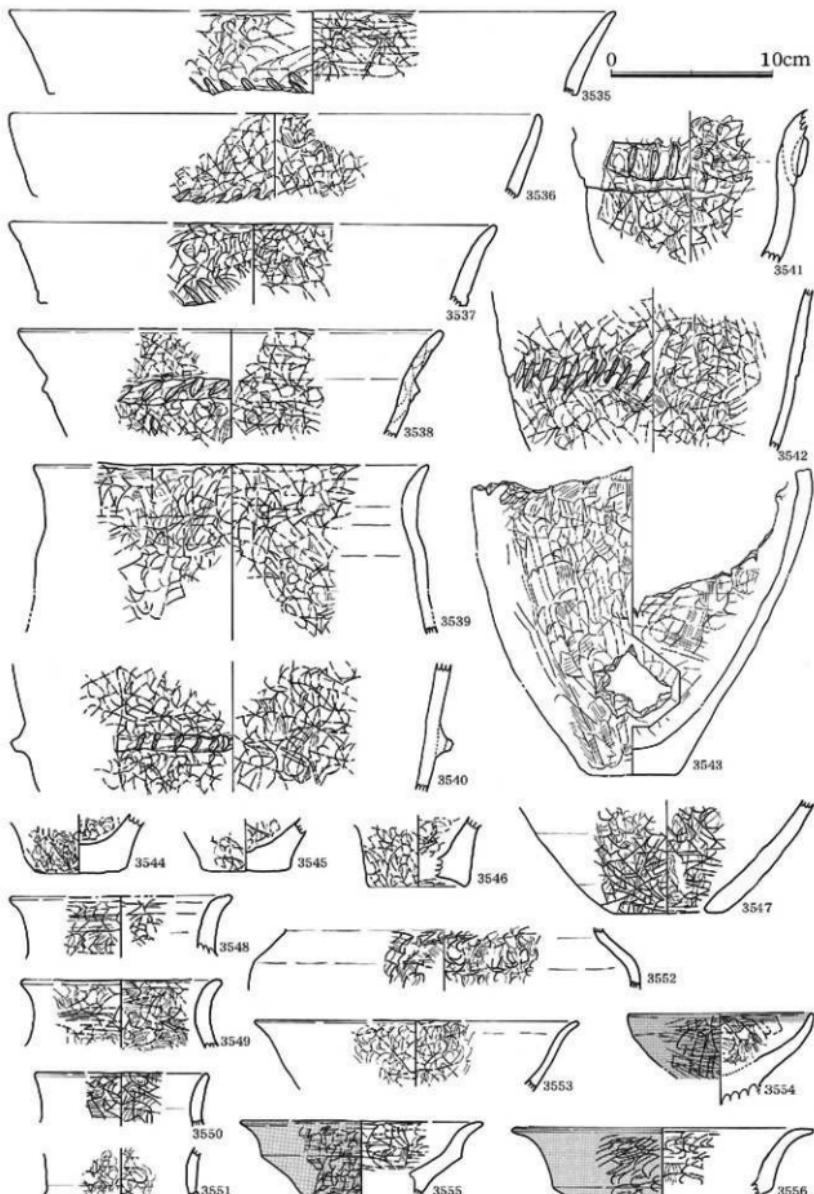
第343図 SA-151 出土遺物実測図(2), SA-152 出土遺物実測図(1)



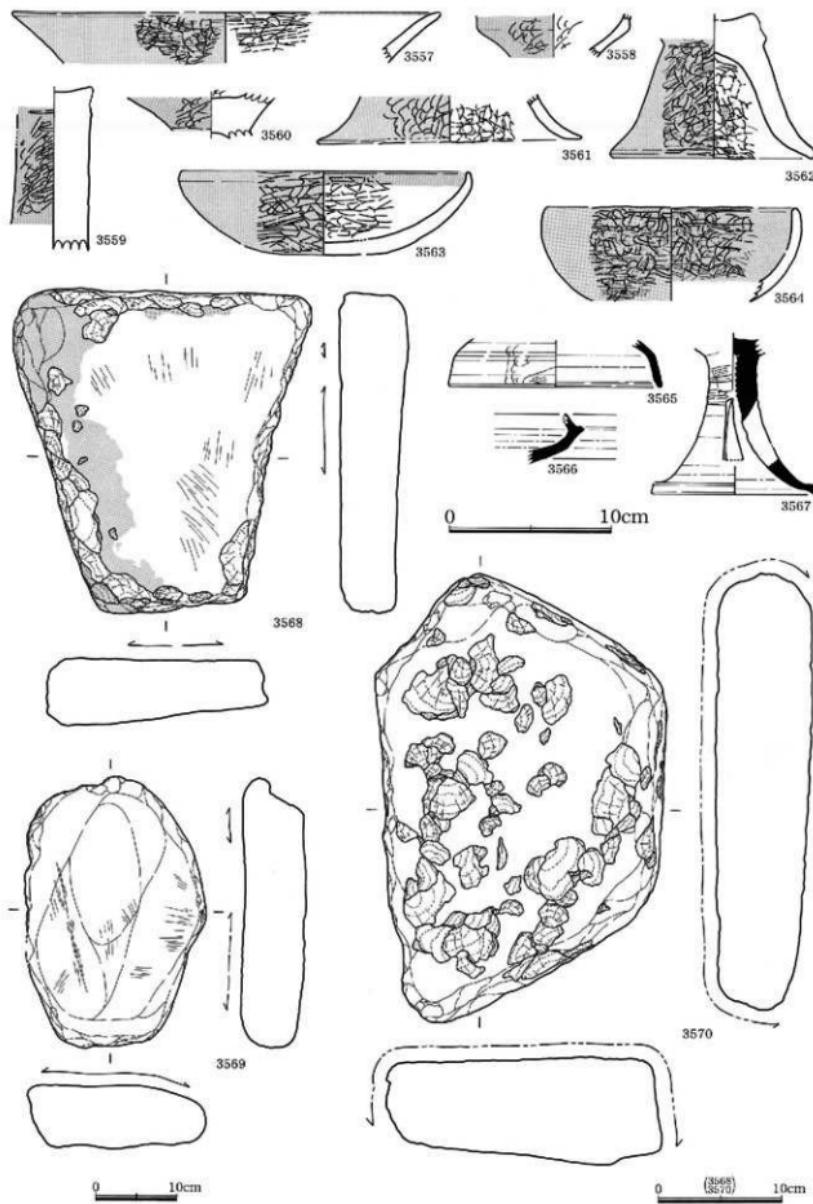
第344図 S A-152 出土遺物実測図(2)



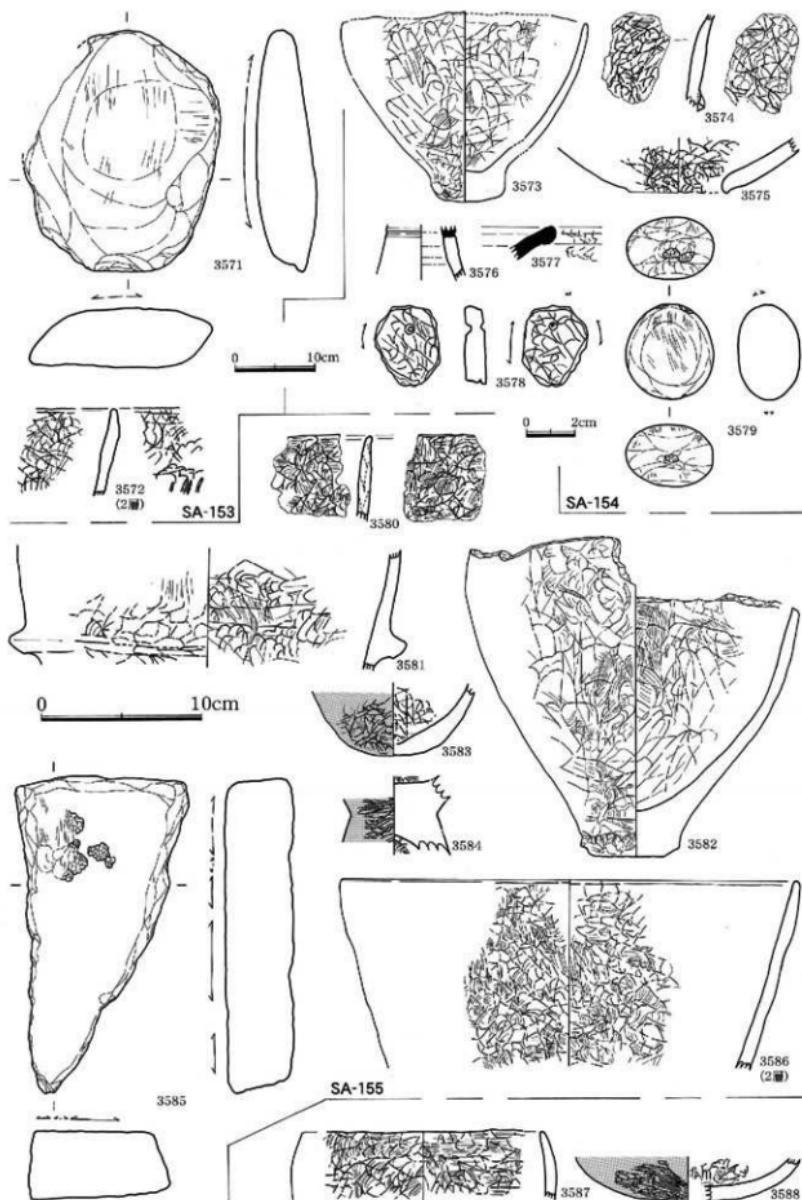
第345図 S A-152 出土遺物実測図(3), S A-153 出土遺物実測図(1)



第346図 S A-153 出土遺物実測図(2)



第347図 S A-153 出土遺物実測図(3)



第348図 SA-153 出土遺物実測図(4), SA-154~156 出土遺物実測図

瓶（3336）を使用した土器埋設炉がある。北東辺には壁溝が無く、中央には幅90cm・深さ34cm（下半は埋め戻し）の土坑が伴う。南東側の貼り床は僅かである。P 3の柱痕跡は、直径17cmであった。

覆土から、土師器片2480点のほか、須恵器片36点等が、2層から土師器片62点と須恵器片1点が出土している。須恵器の蓋（3375）は、166号溝出土片と接合している。3317と3322・3326・3331・3339・3344・3352・3353・3369～3371は被熱している。6世紀後半～7世紀前半である。

#### S A-149（第328図）

148号住居に切られ、150号住居を切る住居である。長さ5.2～5.44m・幅4.6mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は8～16cm遺存し、土層的には10～15cmの削失が推定される。主柱穴は、直徑25～34cm・深さ32・50cmの2本柱で、中央に、長径35cm・短径28cmの掘り込み炉がある。

覆土から、土師器片1051点のほか、須恵器片12点、台石1点が、2層から土師器片35点が出土しているが、図化できたのは少ない。須恵器の蓋3412は、148号住居出土片と接合している。6世紀後半～7世紀前半である。

#### S A-150（第329図）

149号住居に切られた、東西4.3～5.34m・南北4.2m以上（推定5.1～5.2m）の、方形基調の間仕切り住居である。覆土は8～18cm遺存し、土層的には、10cm程の削失が推定される。内区の床面は、さらに16～18cm低い。主柱穴は、直徑25～40cm・深さ38～64cmの4本（P 1～4）で、内区の掘形隅に設けられる。炉は確認できていない。

覆土から、弥生時代後期～古墳時代の土師器片58点と須恵器片1点（混入か）、2層から土器片18点が出土しているが、図化できたものは少ない。

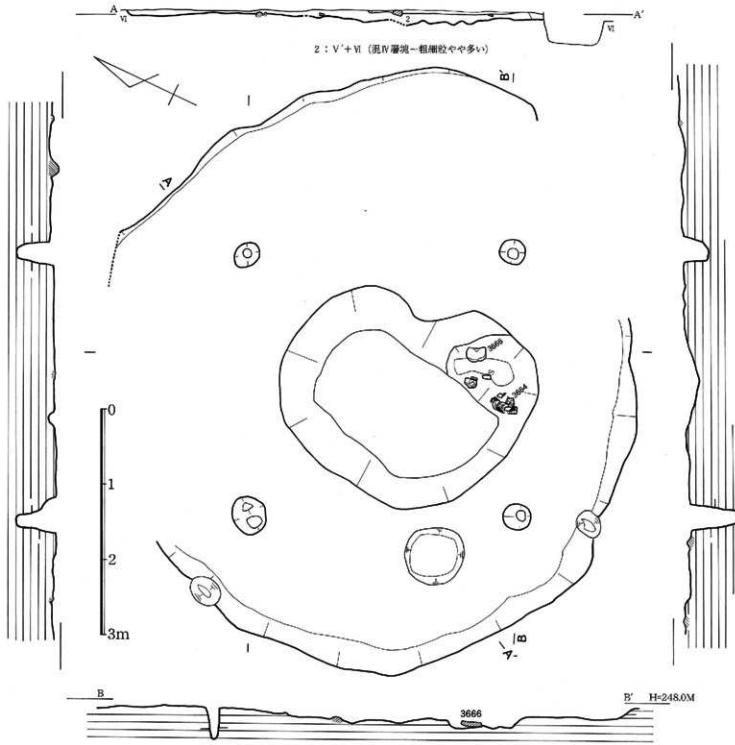
#### S A-151（第335図）

152号住居を切る、長さ6.1～6.47m・幅4～4.73mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は4～18cm遺存し、土層的には15～25cmの削失が推定される。主柱穴は、直徑39～45cm・深さ19・46cmの2本（P 1・2）で、口縁部と底部を打ち欠いた壺（3435）を使用した土器埋設炉（B）か、口縁部を打ち欠いた壺（3434）を使用した土器埋設炉（A）が伴う。拡張前は直徑19～31cm・深さ29cmの2本柱（P 3・4）で、炉AかBを伴い、長さ4.4～4.74m・幅3.9～4mの隅円長方形を呈し、主軸を90度転換する。P 2の南東部とP 4の西にある土坑状掘り込みは機能していない。

覆土から、土師器片1160点、須恵器片16点のほか、鉄製刀子1点（3447）、鐵鎌片1点（3453）、台石1点などが、2層から土師器片160点、須恵器片1点などが出土している。6世紀後半である。

#### S A-152（第336図）

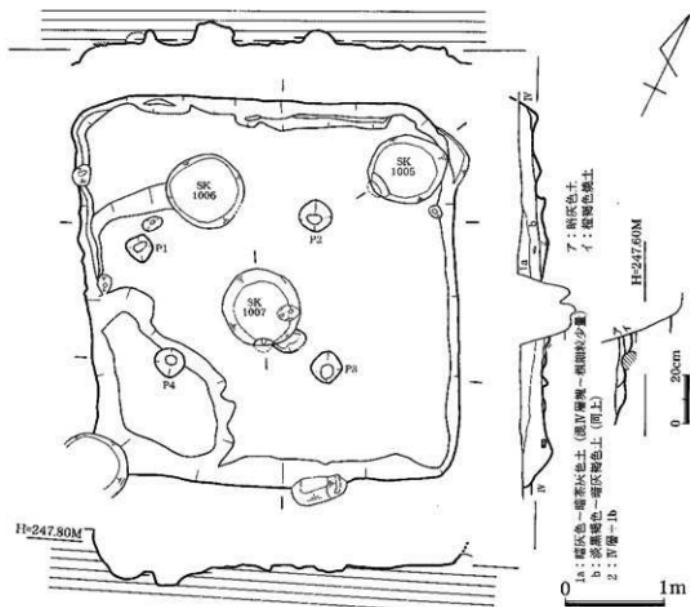
151号住居に切られた、長さ6.1～7.05m・幅4.54～4.80mの、隅円長方形を呈する住居である。覆土は40～45cm遺存し、南西部が10cm程の削失を受けているほかは、座棺墓3基（S K-967～969）が切り込んでいるくらいである。主柱穴は、直徑26～44cm・深さ36・45cmの2本柱である。長軸断面において、長径36cm・深さ8cmの掘り込み炉（ア層）を確認した以外の炉は無い。貼り床は全面に、厚さ8～20cm施されている。



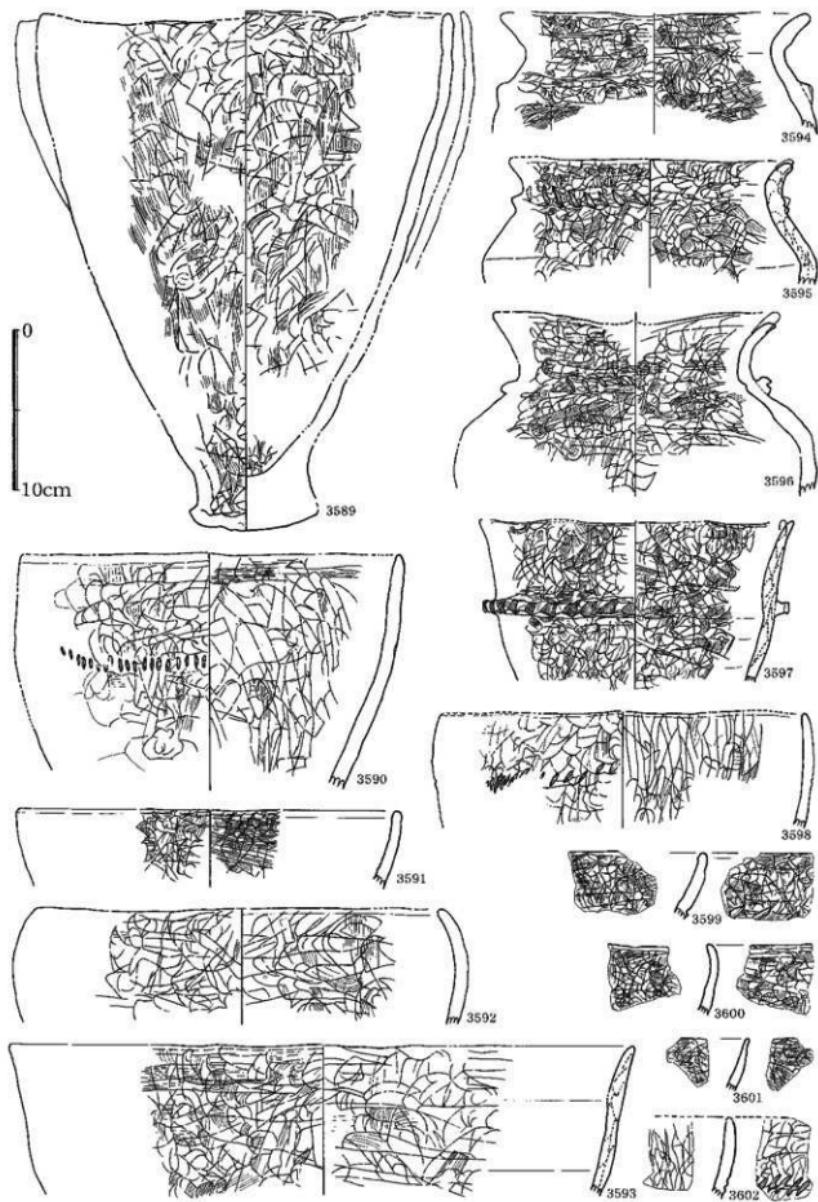
第349図 SA-158 造構実測図



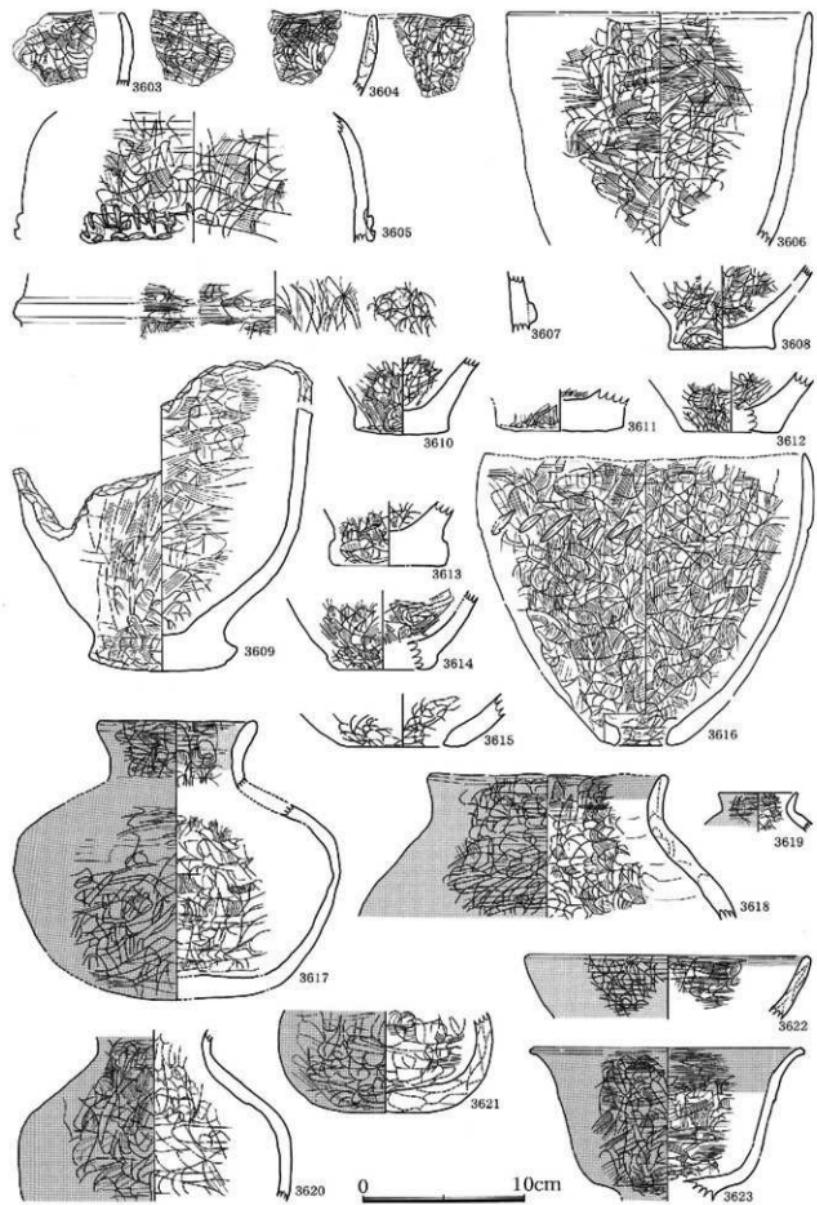
第350図 SA-159 遺構実測図



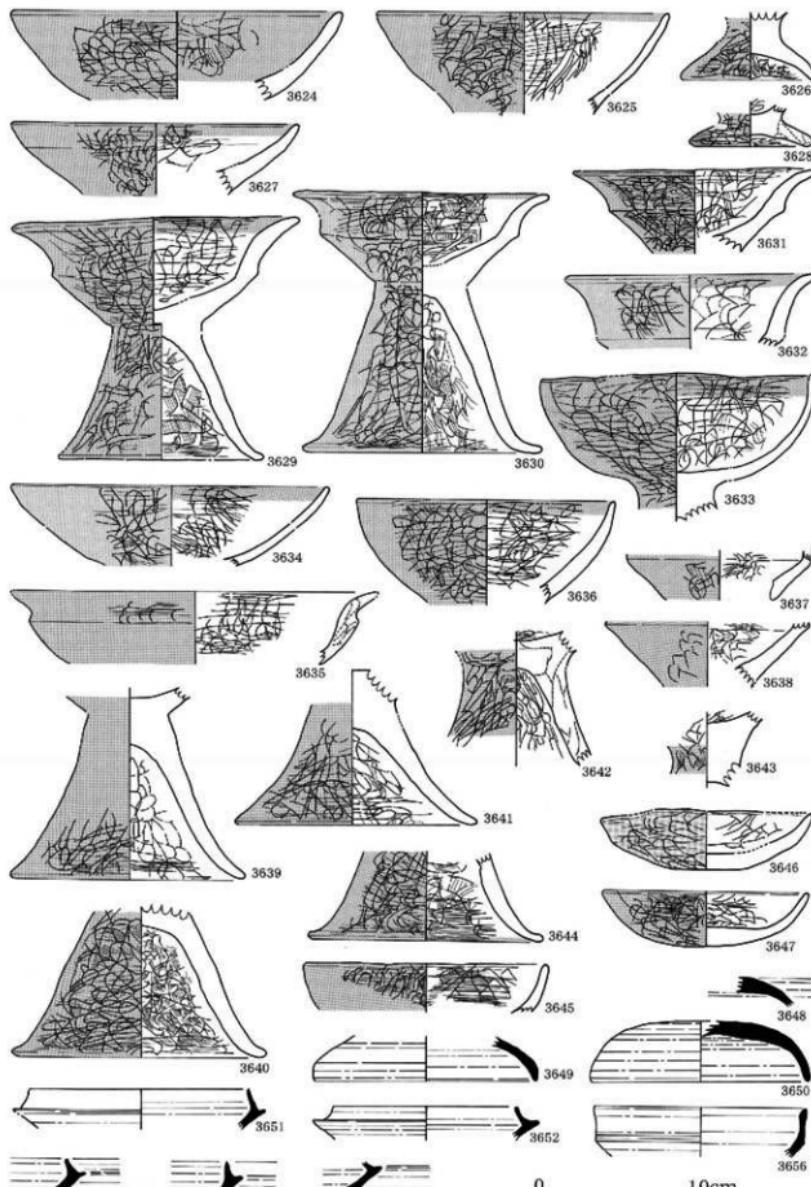
第351図 SA-160 遺構実測図



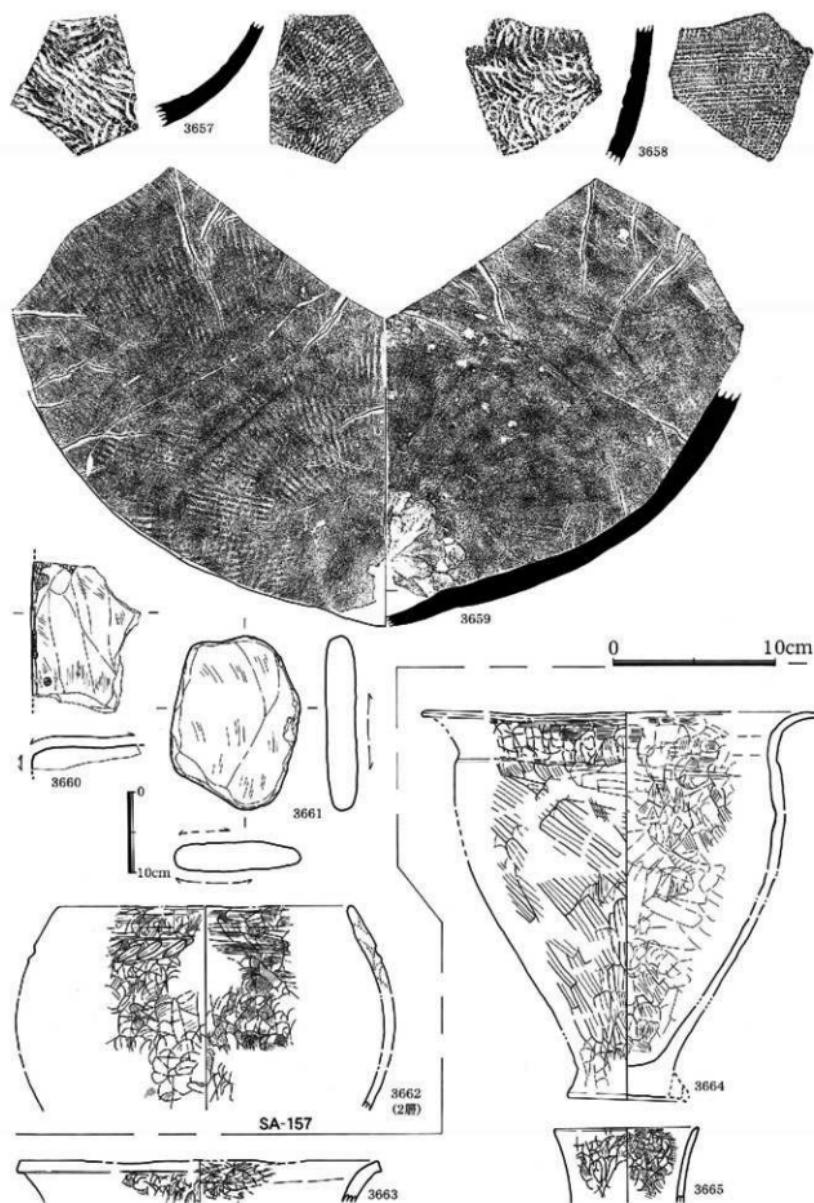
第352図 S A-157 出土遺物実測図(1)



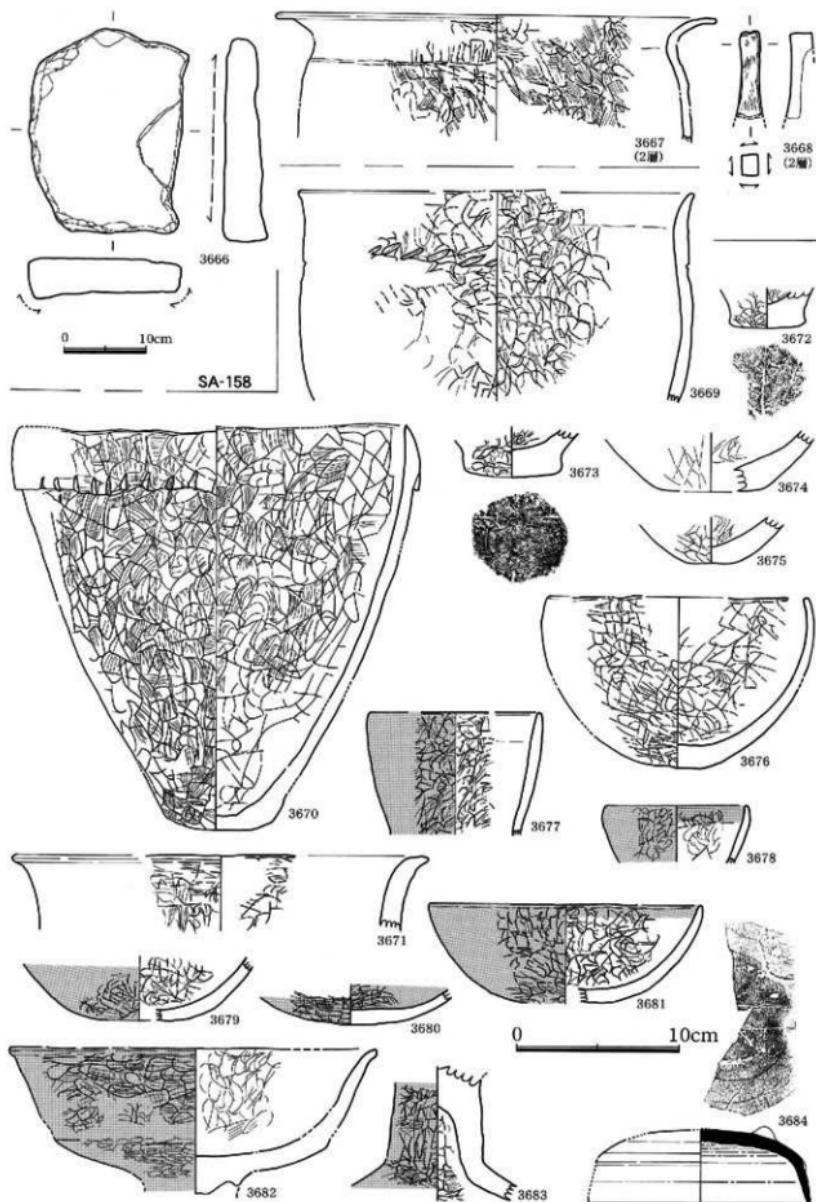
第353図 S A-157 出土遺物実測図(2)



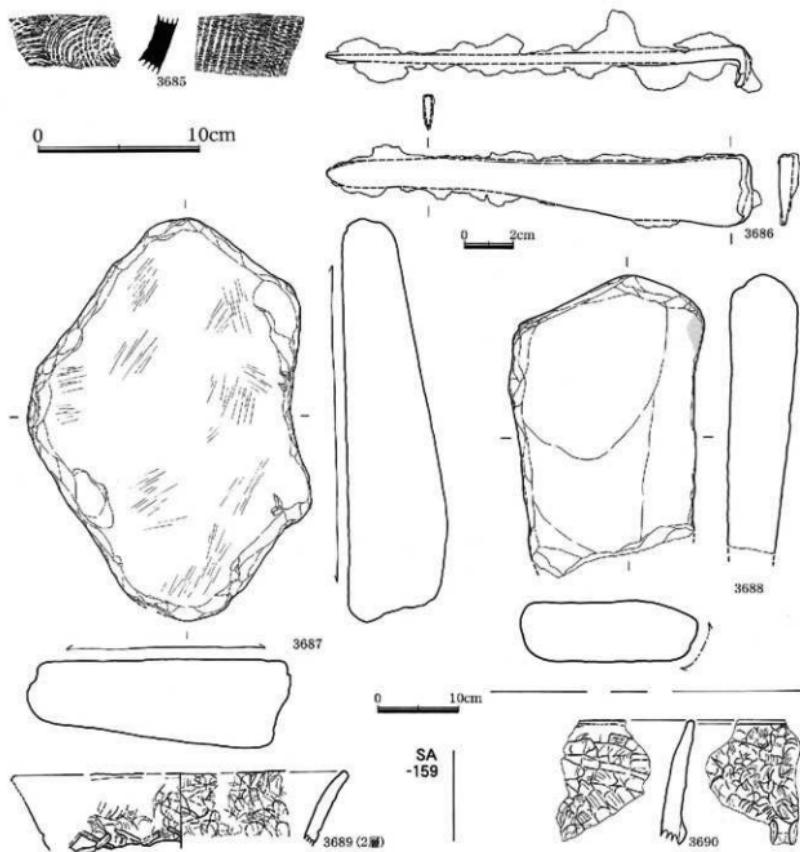
第354図 S A-157 出土遺物実測図(3)



第355図 SA-157 出土遺物実測図(4), SA-158 出土遺物実測図(1)



第356図 SA-158 出土遺物実測図(2), SA-159 出土遺物実測図(1)

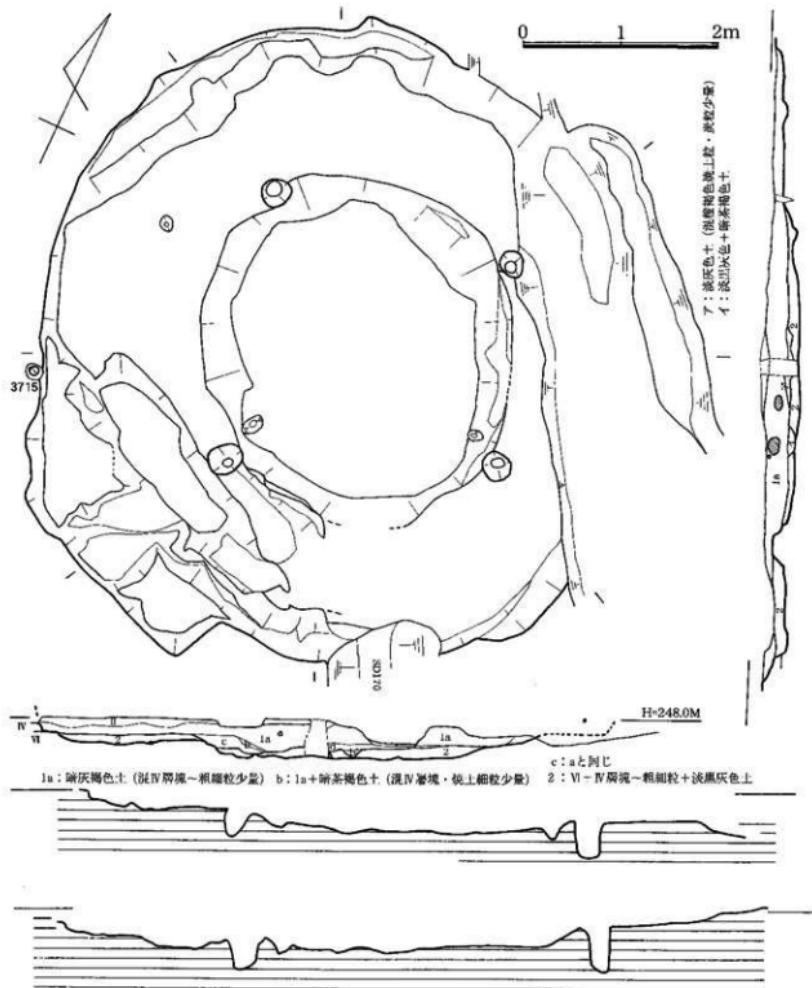


第357図 S A-159 出土遺物実測図(2), S A-160 出土遺物実測図

覆土から、土師器片1991点のほか須恵器片10点、鉄製刀子片1点などが、2層から土師器片12点が出土している。中には、丹塗り高環の脚折損部を丁寧に整形・研磨して蓋に転用した土器(3512)もある。6世紀後半である。

#### S A-153 (第337図)

長径5.6m・短径3.9mの近現代の大型土坑に切られているが、南東隅の痕跡は遺存していた。長さ6~6.16m・幅5.1mの長方形を呈する住居である。覆土は27~38cm遺存し、土層的には10cm程度の削失が推定される。主柱穴は4本で、各々新旧がある。北西~南西の壁側には、幅60cm~1m・



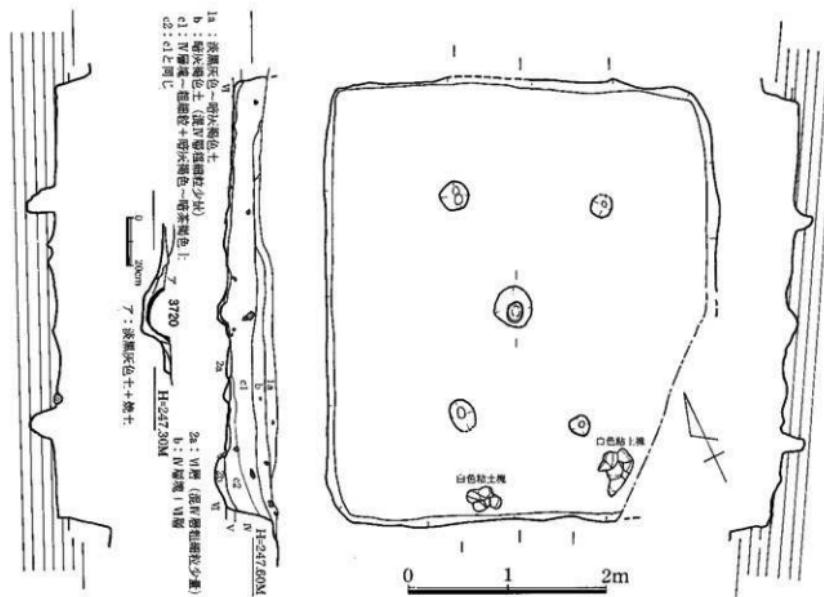
第358図 S A-161 遺構実測図

高さ10cmの貼り床によるベッド状遺構があり、P1・2はその下に位置することから、外側のP1～4が古段階と推定される。P1～4は深さ30～38cmで、P5～8は深さ38～48cmを測り、新段階のほうが深い。P5～P8間とその周囲の床面には6個の大きな石があり、うち4個に使用痕があった。3568と3570には、被熱と弾けがある鉄床石であり、残り2個も同類とみるべきであろう。炭化材や炭片・焼灰なども混在し、複数工入による小鋳造が想定される。明確な炉は確認できなかったが、焼灰に隣接して、口縁部を打ち欠いて窓を有する壺(3543)が立っており(床面下に数cm掘り込み)、炉として機能していた可能性がある。

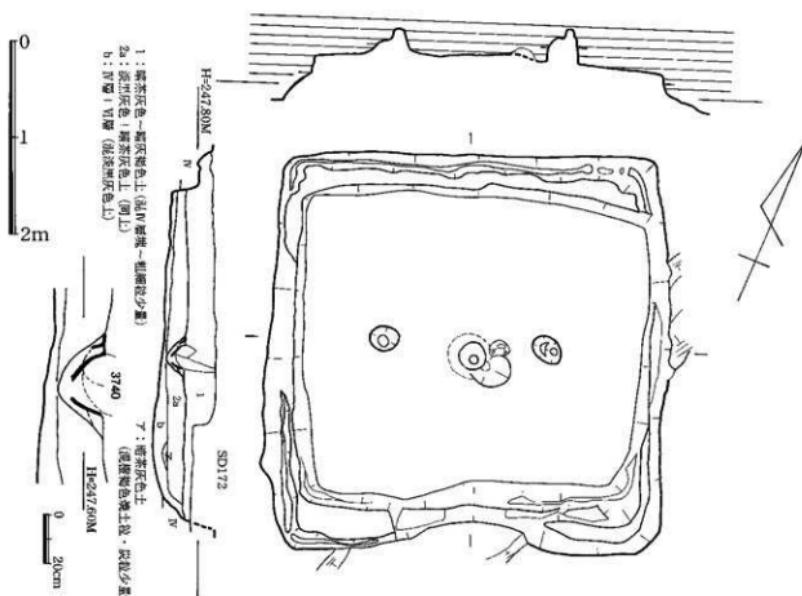
覆土から、土師器片300点のほか、須恵器片4点が、2層から土師器片43点が出土している。丹塗り土師器の高坏(3554)は、155号住居出土片と接合している。6世紀後半である。

#### S A-154 (第338図)

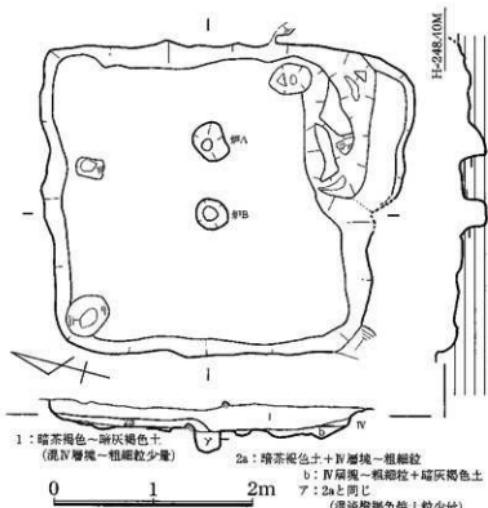
153号住居と1.6m離れた南側に位置し、975・976号土坑(近現代墓)と142・162号溝に切られた、長さ3.9～4.5m・幅3.6～3.7mの、北西辺が短い長方形タイプの住居である。覆土は6～20cm遺存し、土層的には15cm程の削失が推定される。主柱穴は、長径38cm・短径32cm・深さ20cmの2本柱であり、中間には、深さ8～10cmの掘り込み炉がある。北西辺中央には、深さ12cmの不整形な土坑がある。



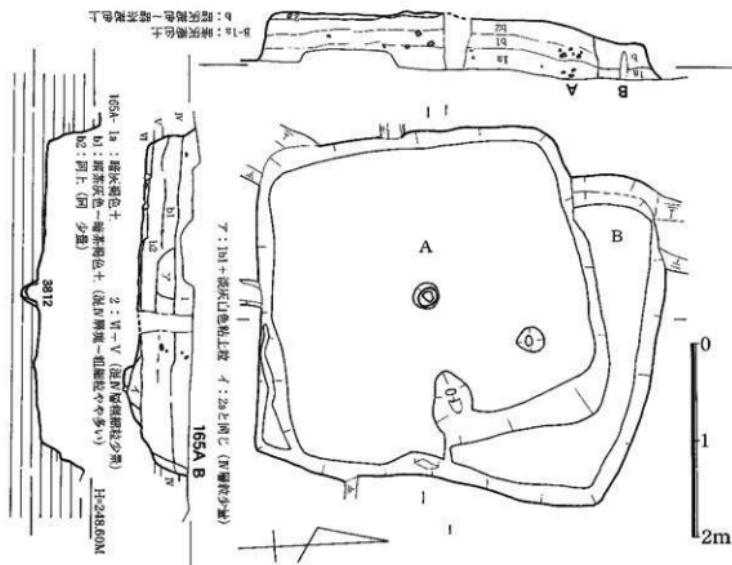
第359図 S A-162 遺構実測図



第360図 SA-163 遺構実測図



第361図 SA-164 遺構実測図



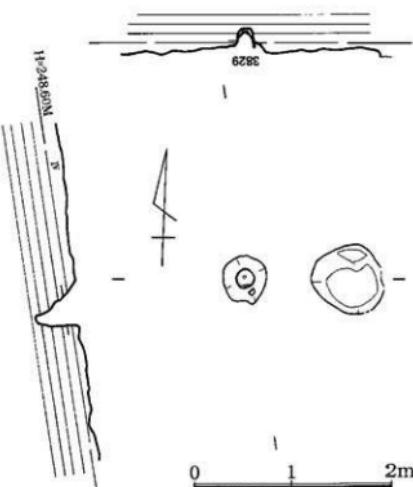
第362図 S A-165 遺構実測図

覆土から、土師器片175点、須恵器片4点のほか、両面穿孔途中の土器片(3578)、敲き石等が、2層から土師器片9点が出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀後半である。

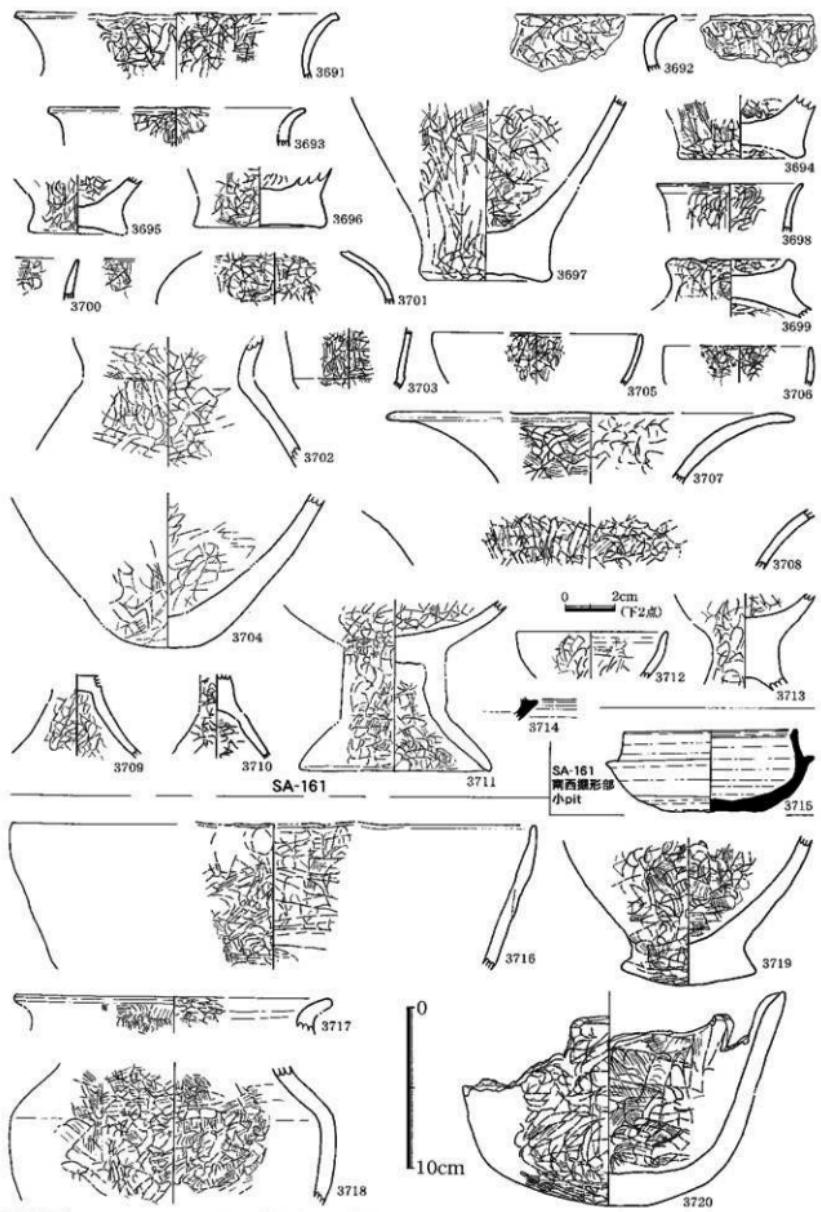
#### S A-155 (第339図)

154号住居と40cm隔てた北東側に位置し、974・975号土坑と一筆境・天地返しによって東半分の掘形が不明瞭である。南北3.1~3.4m・東西3m前後の隅円方形を呈する住居と推定される。覆土は4~17cm遺存し、土層的には15cm程の削失が推定される。主柱穴は確認されず、中央やや南寄りには、口縁部を打ち欠いた壺(3582)を使用した土器埋設炉がある。断面図のア・ウ層は掘り込み炉であり、3次期の炉の変遷がある。

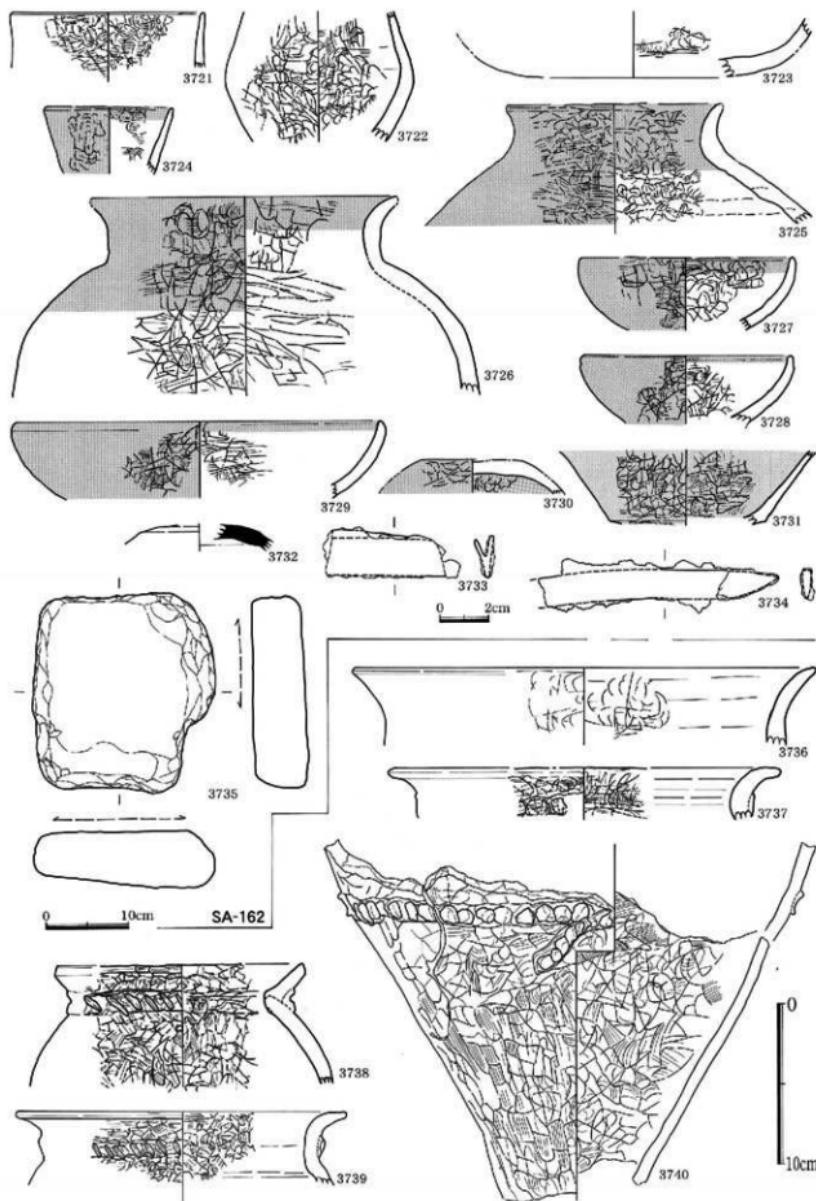
覆土から、土師器片68点のほか、須恵器片1点、台石1点が、2層から土師器片17点が出土しているが、図化できたの



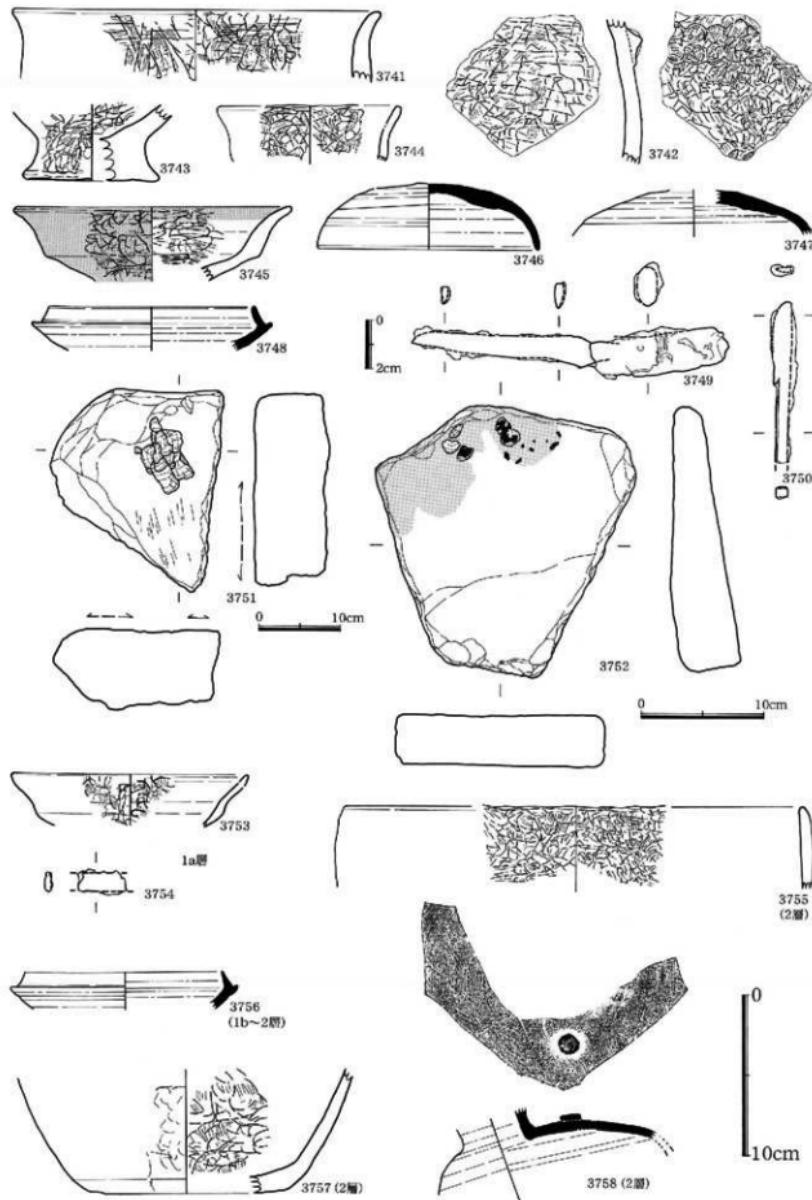
第363図 S A-166 遺構実測図



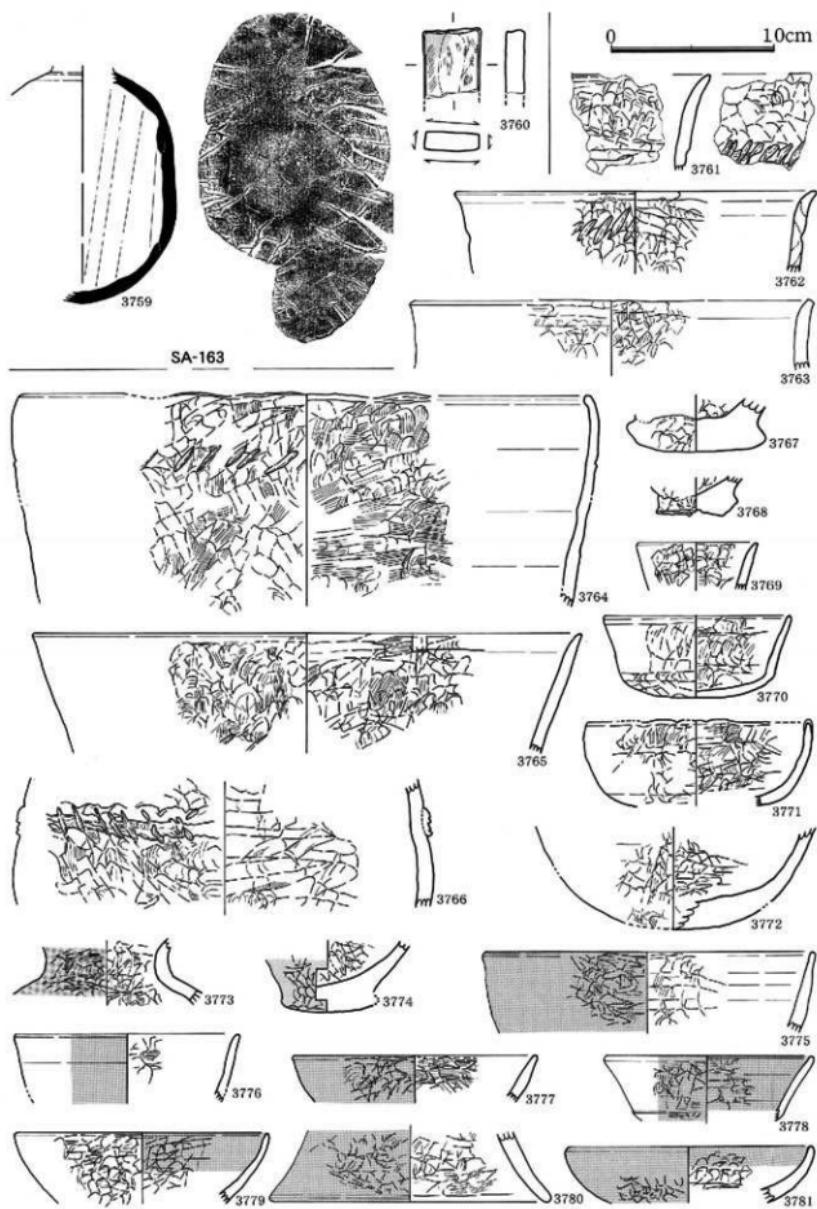
第364図 SA-161・162 出土遺物実測図(1)



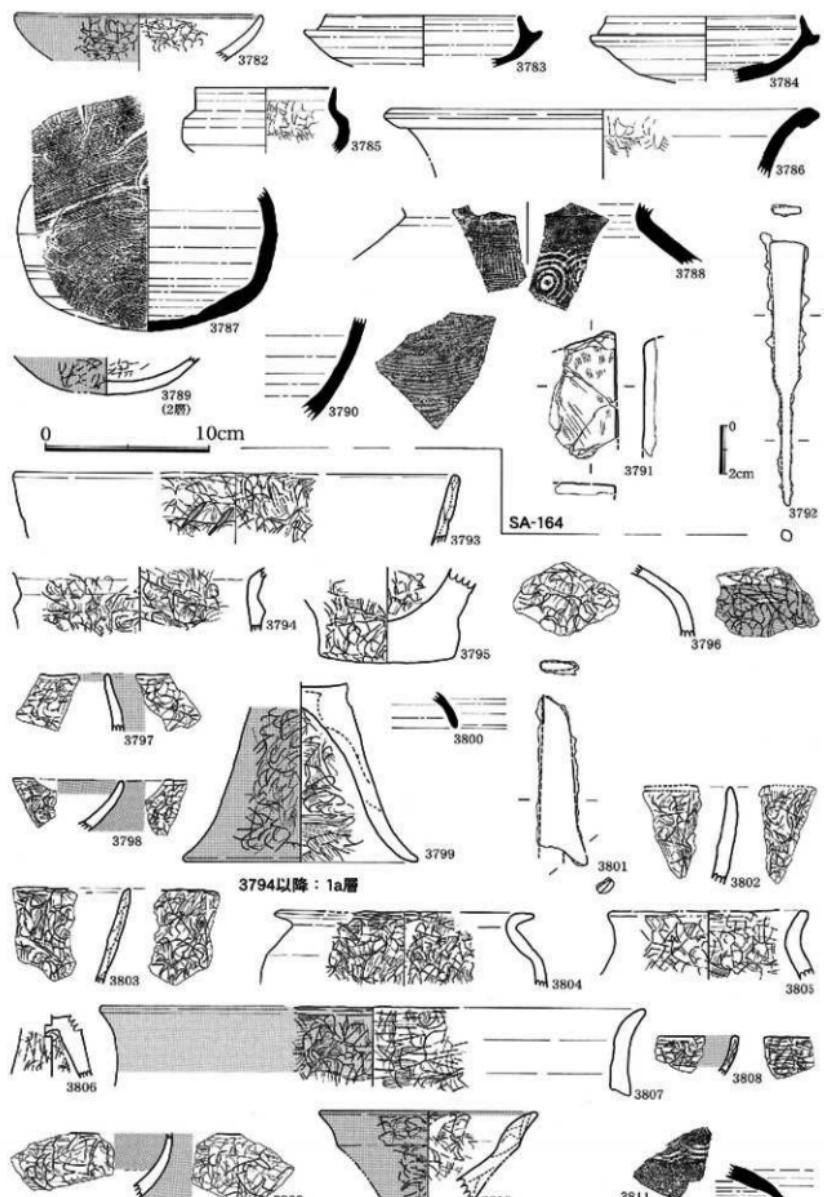
第365図 SA-162 出土遺物実測図(2), SA-163 出土遺物実測図(1)



第366図 SA-163 出土遺物実測図(2)

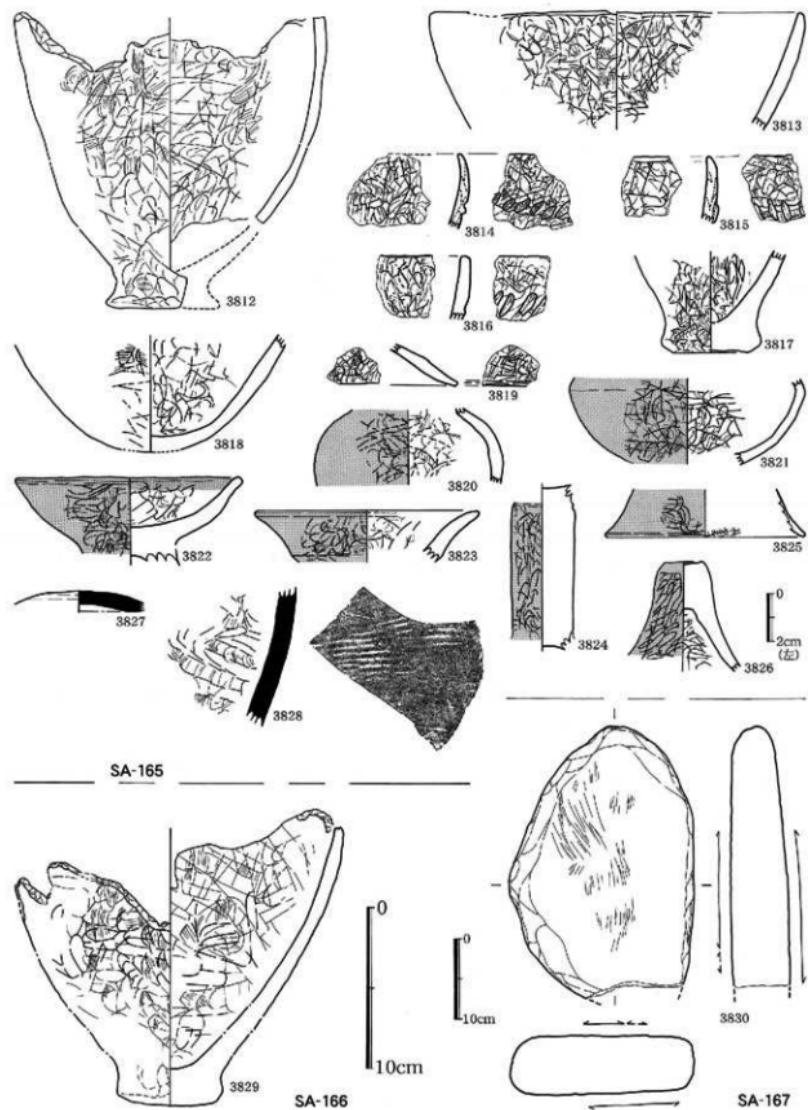


第367図 SA-163 出土遺物実測図(3), SA-164 出土遺物実測図(1)



第368図 S A-164 出土遺物実測図(2), S A-165 出土遺物実測図(1)

は少ない。6世紀前半か。



第369図 SA-165 出土遺物実測図(2), SA-166・167 出土遺物実測図

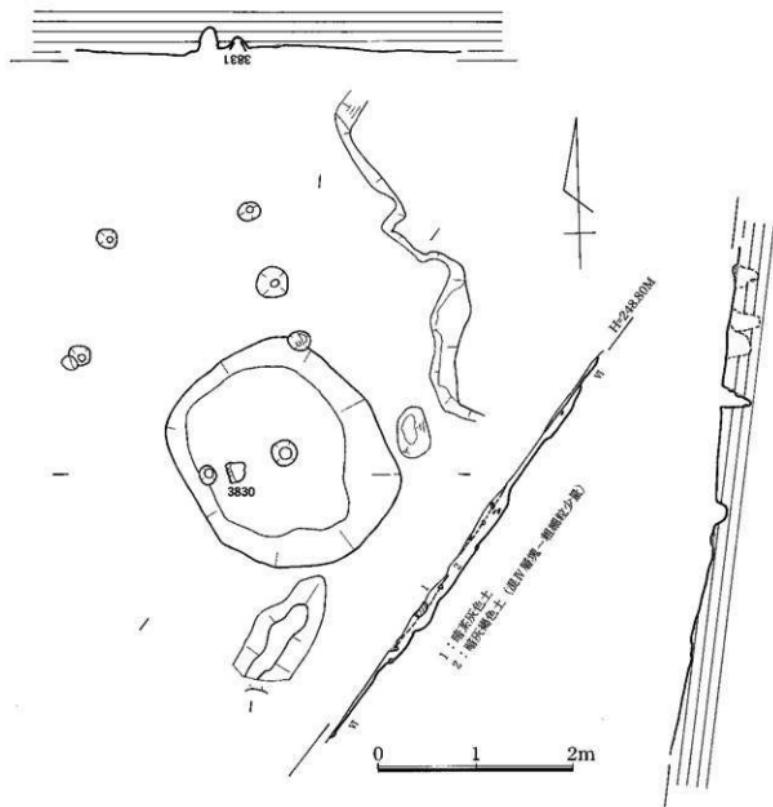
S A-156 (第340図)

座棺墓 2基と長方形土坑・163号溝に切られ、遺存状態が悪い。長さ4.0m・幅3.1m以上の隅円方形を呈する住居である。明瞭な主柱穴や炉は、確認できない。

覆土から、土器片159点が、2層から21点が出土しているが、図化できたのは2点である。5～6世紀である。

S A-157 (第341図)

156号住居の1.8m西に位置し、座棺墓 2基と溝状遺構 2条に切られていたが、影響は少ない。東西4～4.16m・南北3.9～4.16mの隅円方形を呈する住居である。覆土は44～48cm、良好に遺存する。主柱穴は無いが、中央に、口縁部～胴部上半を打ち欠いた壺 (3609) を使用した土器埋設ががある。埋設炉の裏込めはア・イ層であり、ウ～オ層は、深さ28cmの掘り込みがもしくは主柱穴であ



第370図 S A-157 遺構実測図

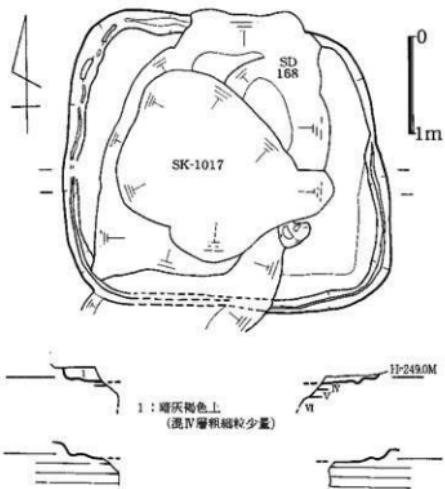
った可能性が高い。壁溝は、東南隅のみ検出された。

覆土から、土師器片1449点のほか、須恵器片23点等が、2層から土師器片18点と須恵器片1点が出土している。丹塗りの鉢3646は、165号住居出土片と接合している。床面南西部では、直径10~17cm程の白色粘土塊が8個程度集積し、30cm東にも1塊が出土している。土器の混和材等に使用する目的で保管されていたと想定される。6世紀後半である。

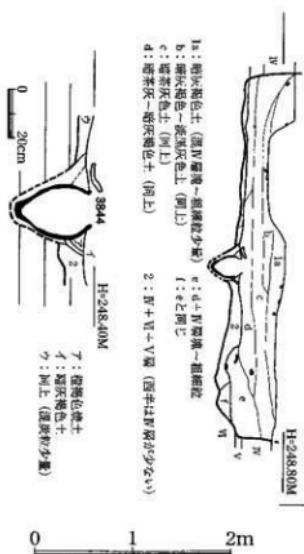
S A-158 (第349図)

Ⅲ区東端の、天地返しによって痕跡程度の遺存であったが、2層の掘り込みラインによって、規模と形態が推定できる。

長径7.9m・短径7.5m程の不整円形プランと推定される。主柱穴は、直径24~51cm・深さ34~68cmの4本柱で、柱間は3.5m前後である。土層的には、40cm程の削失と推定される。中央付近の大き



第371図 S A-168 遺構実測図



第372図 S A-169 遺構実測図

な凹みは機能せず（貼り床）、南側の、長径1.28m・短径96cm・深さ18cmの土坑が伴い、壺（3664）と台石（3666）が出土している。

柱穴等から土師器片3点と須恵器片1点が、2層から土師器片30点と須恵器片1点、手持ち砥石1点が出土しているが、図化できたのは僅かである。4世紀代で須恵器は混入か。

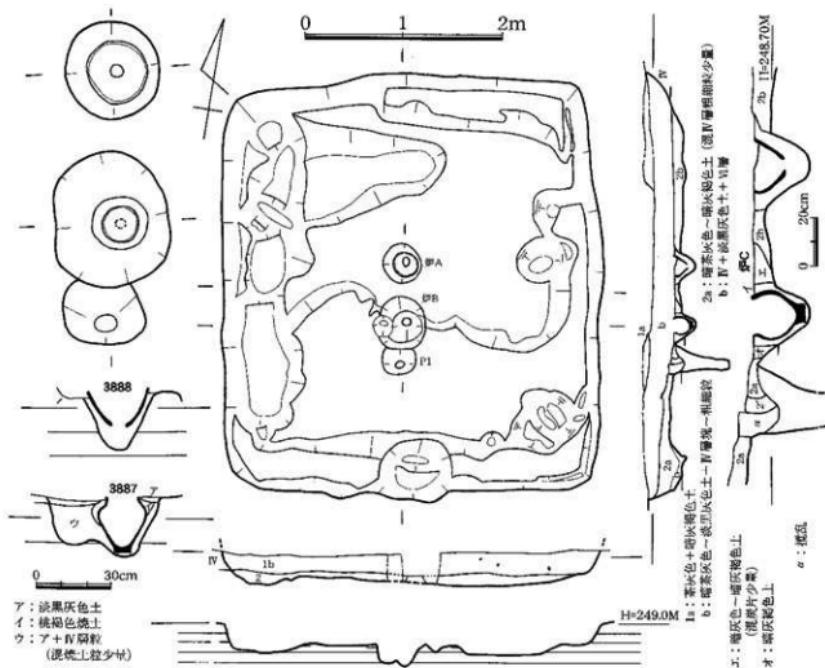
#### S A-159 (第350図)

158号住居の西3.2mに位置し、160号住居を切り、1004号土坑に切られる住居で、長さ・幅とも2.4~2.6m程の不整隅円方形を呈する。覆土は16~20cm遺存し、土層的には20cm程の削失が推定される。主柱穴は無いが、中央（イ層）とその南（ア層）に掘り込みがある。貼り床は6~10cmの厚さで全面に施されている。

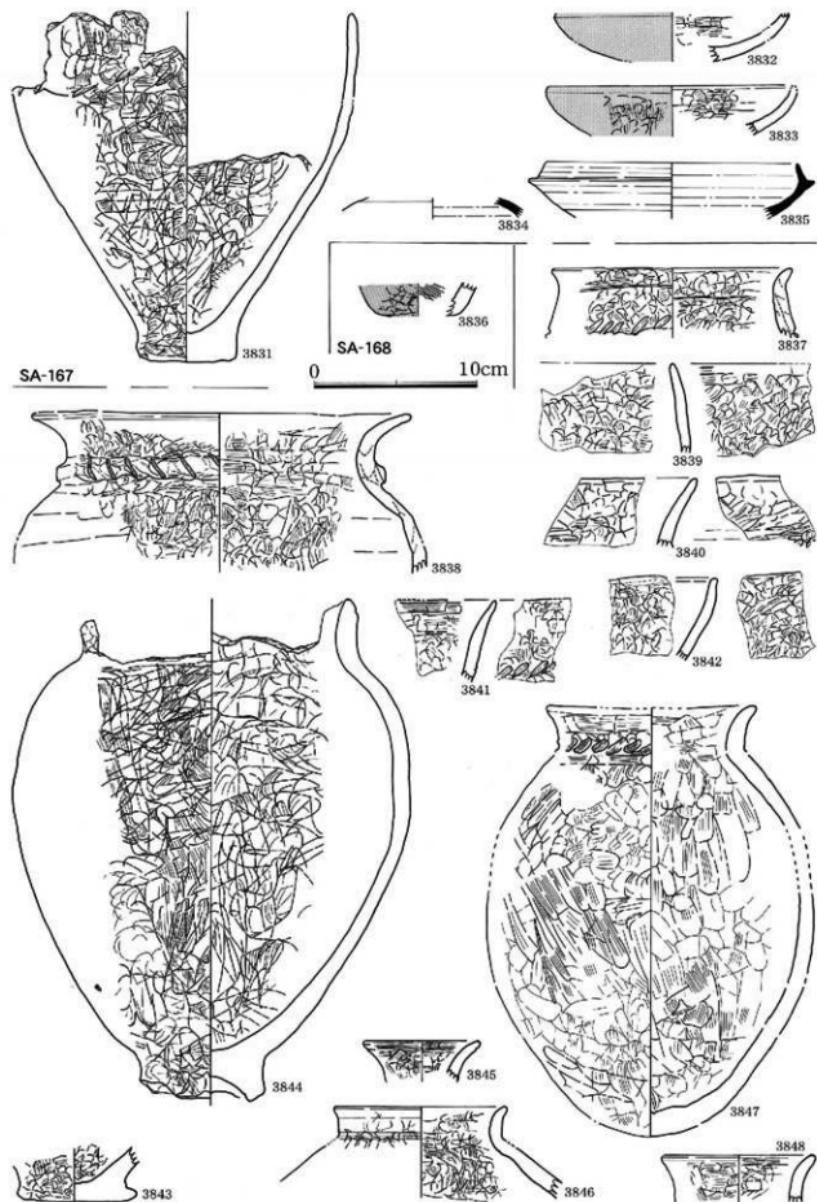
覆土から、土師器片100点のほか、須恵器片2点、鉄鎌1点（3686）、台石2点が、2層から土師器片13点が出土している。6世紀前半か。

#### S A-160 (第351図)

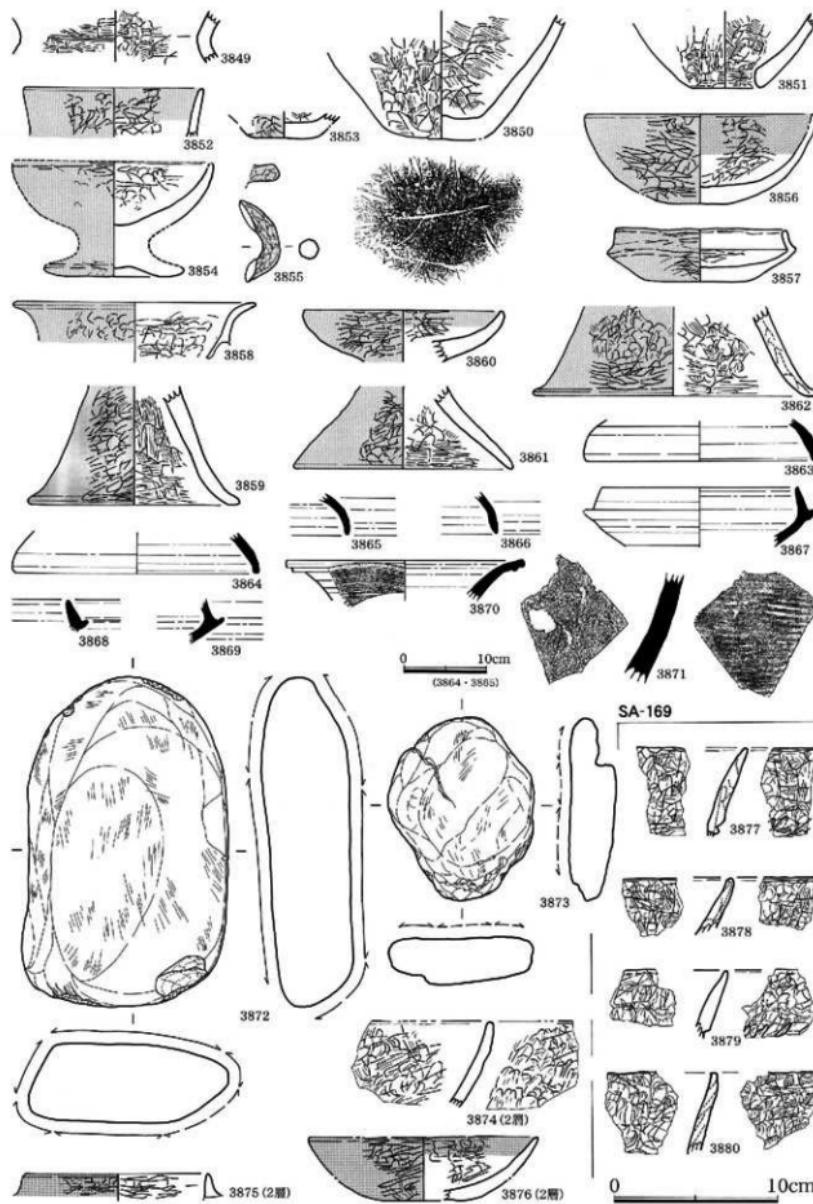
159号住居と座棺墓4基に切られた、東西3.6~3.8m・南北3.9mの隅円方形を呈する住居である。覆土は10~20cm遺存し、土層的には、北側が10cm程の削失と推定される。主柱穴は、直径25~34cm・



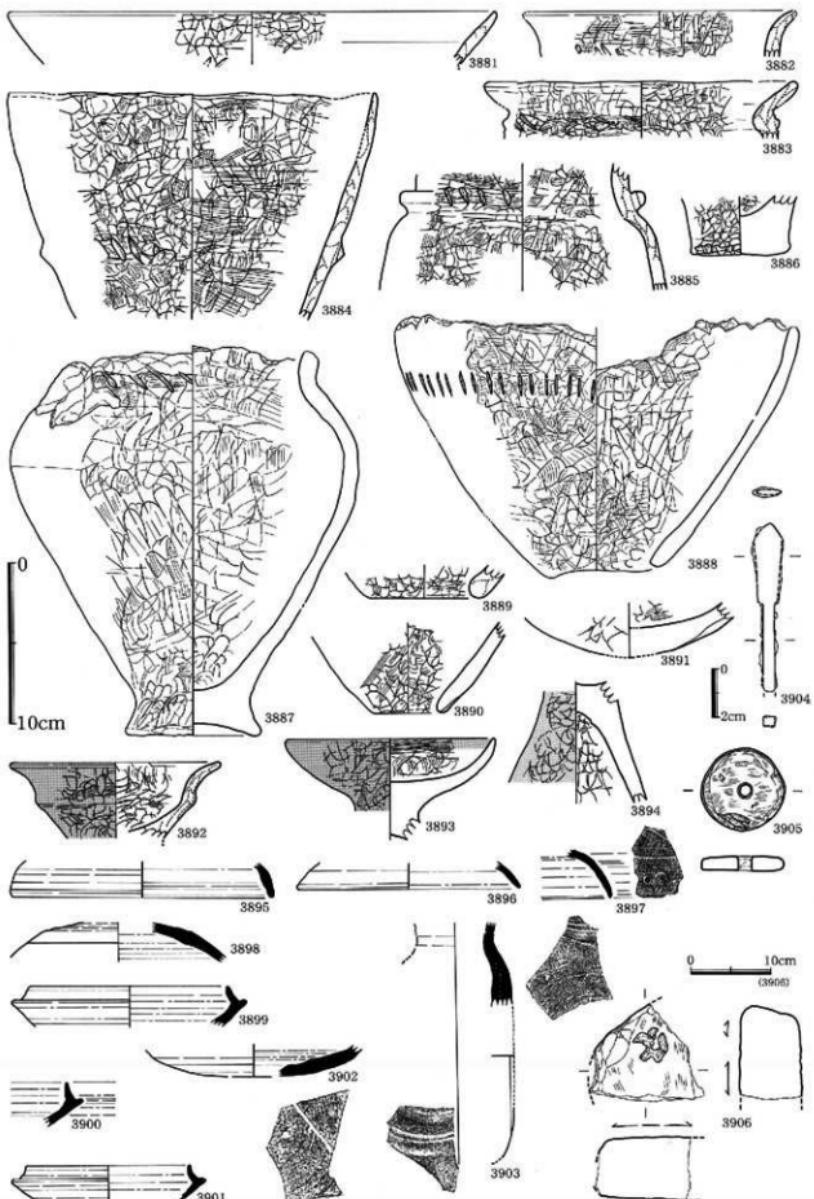
第373図 S A-170 遺構実測図



第374図 SA-167～169 出土遺物実測図(1)



第375図 SA-169 出土遺物実測図(2), SA-170 出土遺物実測図(1)



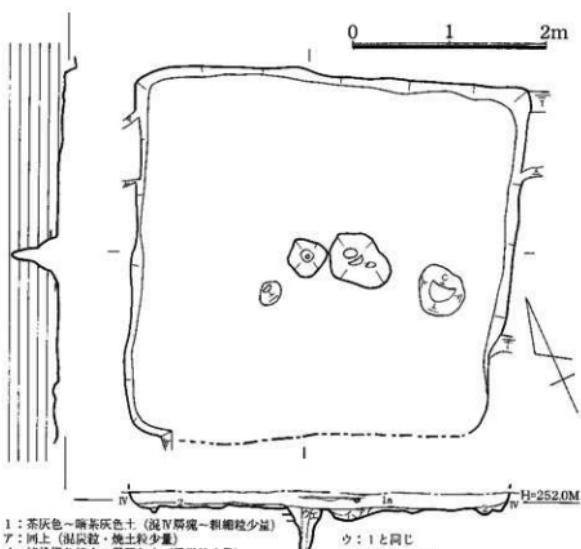
第376図 SA-170 出土遺物実測図(2)

深さ8~22cmの4本柱(P1~4)であるが、浅く不安定である。中央部は座棺墓によって消失するが、ア・イ層の掘り込み炉がある。1005・1007の座棺墓には壁面下部に仏龕が抉られており、詳細は後述する。

覆土から、土師器片184点が、2層から5点が出土したが、図化できたのは僅か1点である。

#### S A-161 (第358図)

160号住居と40cm隔てた南東に位置し、近現代の170号溝等に切られ、北東部が消失している。長径6.8m・短径5.9~6mの楕円形を基調とし、南側に、幅2.9m・奥行き60~70cmの突出部があり出入口を想定させる。覆土は8~18cm遺存し、土層的には20~40cmの削失が推定される。内区はさ



らに10~18cm低く、貼り床は全面に6~12cmの厚さで施されている。  
主柱穴は直径22~30cm  
・深さ28~48cmの4本である。内区の中央部では、長径90cm・深さ4~5cmの炉跡を確認している。

覆土から、弥生終末~古墳時代前期の土器片358点と須恵器片1点(混入)、2層から弥生時代後期の土器片13点が出土しているが、図化できたのは少ない。

3715は、住居の南西部

第377図 S A-171 遺構実測図

掘形を切る小pitから出土した完形の須恵器坏身であるが、直接住居に伴うものではない。3694は、1010号土坑出土片と接合しており、遺構の関連を示す重要な手懸かりである。

#### S A-162 (第359図)

160号住居と40cm、161号住居と1.4m隔てた南西部に位置した、長さ4.52~4.58m・幅3.8~3.96mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は26~42cm遺存し、北側が20cm程削失していると推定される。主柱穴は、直径20~32cm・深さ20~30cmの4本柱で、住居掘形に相似する長方形に配置されている。中央には丸底甕の底部(3720)を使用した土器埋設炉がある。貼り床は2~5cmと薄く、南縁中央部のみ10cm程の厚さがある。

覆土から、土師器片428点のほか、須恵器片2点、鎌先様鉄器(3733)、刀子(3734)、台石1

点等が、2層から土師器片14点等が出土している。壺の底部3719は、163号住居出土片と接合している。南壁沿いでは、直径10~15cmの白色粘土塊の集積が2ヶ所にあつた。6世紀後半である。

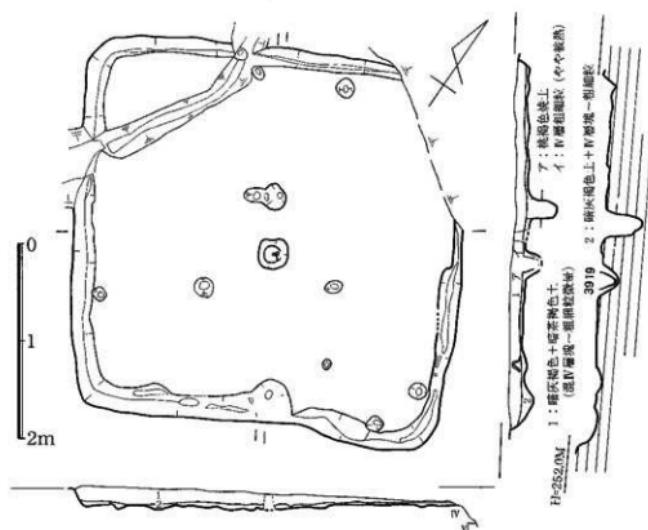
S A-163(第360  
図)

160号住居の

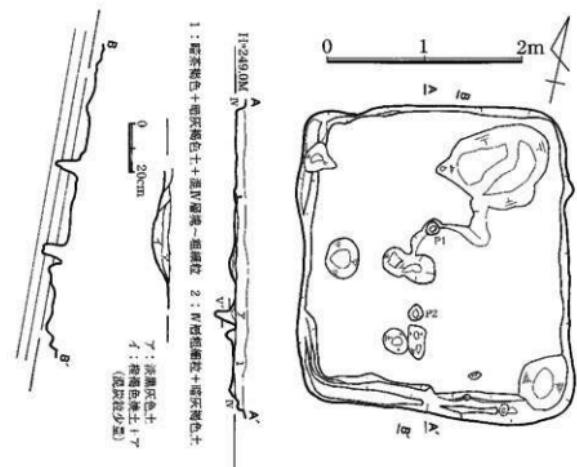
2.3m西に位置し、172号溝に切られた、長さ4.04~4.10m・幅3.77~4.02mの方形を呈する住居である。覆土は26~33cm遺存し、土層的には5cm程の削失と推定される。主柱穴は2本で、直径23~32cm・深さ26~35cmを測る。柱穴断面は、柱が抜き取られた形であるが、床面が2枚あることから新旧の主柱穴を想

定すべきであろう。

中央 第378図 S A-172 遺構実測図



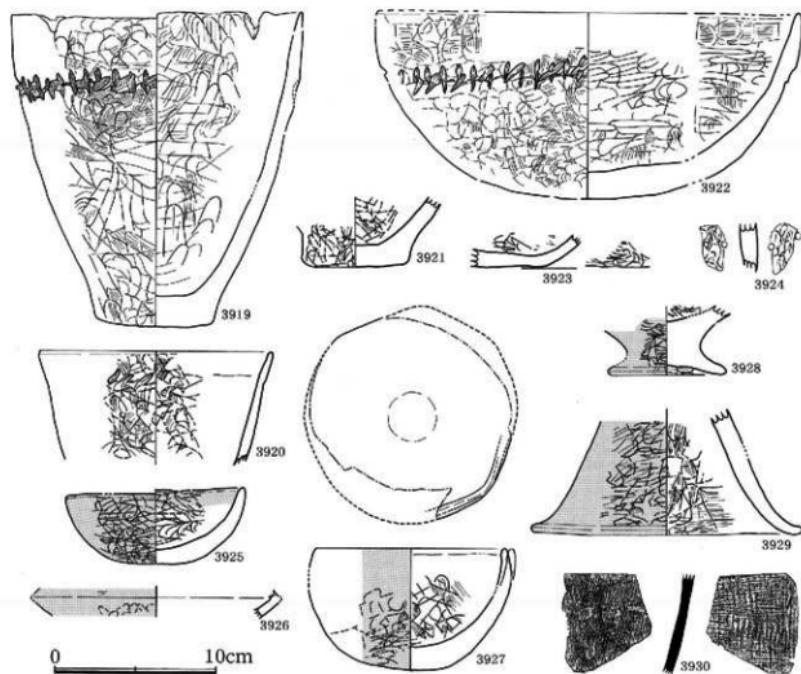
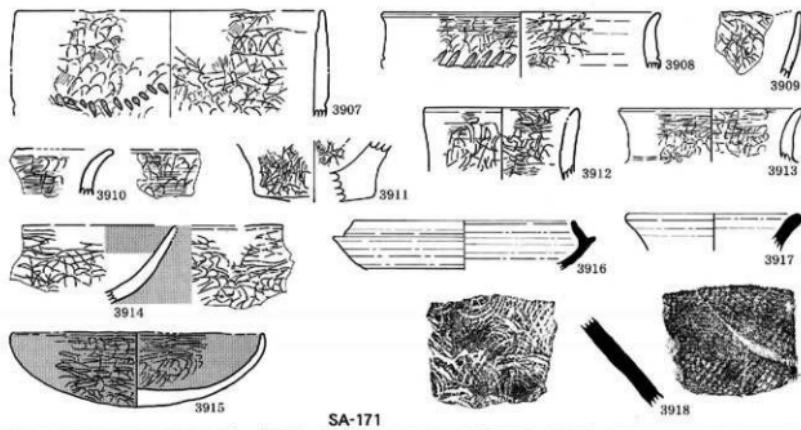
第378図 S A-172 遺構実測図



中央 第379図 S A-174 遺構実測図

には、口縁部と底部を打ち欠いた壺(3740)を使用した土器埋設炉がある。北西面と南東面には、幅10~33cmのベッド状遺構がある。厚さ10~18cmの2a層を剥ぐと、1次面が現れ、中央南側に、直径42cm・深さ6cmの掘り込み炉(ア層)が確認された。

覆土から、土師器片575点のほか須恵器片8点、刀子・刀子片・鉄鏃片各1点、鉄床石2点等が、



第380図 SA-171・172 出土遺物実測図